山岳

第二十四年
第三號

山岳

第二十四年
第三號

目次

本欄

吾妻群山……田部正太郎……一頁
初夏の豐後の山旅……竹内亮……三四
神流川雜藁……高畑棟材……五三
双六谷を中心として……冠松次郎……六九

雜錄

ラティモア氏夫妻招待會……松方三郎……九八
西毛無山(大方山)……黑田正夫……一〇二
立場川と川俣川……吉田喜久治……一〇六
三國嶺下の櫻郷……大平晟……一一〇
平戸嶋の山々……竹内亮……一一三
新潟の親しき山々……藤島玄……一一六
早春大武川を遡る記……黑田正夫……一二〇

「なかのりさん」に就て……閑　古　鳥……一二三

雜　報　　自一二六 至一六〇

○海　外　彙　報
○各學校山岳部消息
○山岳圖書紹介
○會　員　通　信

會　報　　自一六一 至一六五

○第四十四回小集會記事○會務報告○交換及寄贈圖書目

圖　版　　對頁

○家形山○中吾妻附近より望める西大巓と西吾妻……四
○東大巓○家形山……八
○人形石と新高湯との間に於けるオホシラビソとコメツガの森林（コロタイプ）……一二
○沼尻溫泉附近より西大巓と西吾妻とを望む（コロタイプ）……一六
○谷地平小屋を隔てゝ東吾妻方面を望む（コロタイプ）……二四
○大倉瀧（コロタイプ）……二八
○杖立川の上流……三六

○ミヤマキリシマの群落（コロタイプ）……四〇
○池ノ臺の尾根より福万山を望む○池ノ臺の池と雨乞岳及び城ヶ岳（コロタイプ）……四四
○池ノ臺の池と由布岳……四八
○北方より望める鶴見岳○萬年山南方の高原……五二
○コグラ谷の廊下○松ヶ谷上手の釣橋より下流……七六
○コグラ谷の上流○コグラの大瀑……八八
○双六谷打込小屋より見たる中俣岳（黒部五郎岳）（コロタイプ）……九二
○段和山より遠望したる大方山（西毛無山）○精進バノラマより見たる
大方連山の北面（コロタイプ）……一〇四
○大武川より見たる八ヶ岳○戸臺より見たる仙丈岳……一二〇

吾妻群山

田部正太郎

はしがき
青木山小屋を根據とする吾妻群山のスキー（紹介・紀行）
吾妻山初夏の旅（紀行）
中秋の谷地平へ（紀行）
中吾妻、谷地平の散策（紀行）
あとがき

はしがき

私が北陸の高等學校を卒へて、東京帝國大學へ入るに從ひ、學校のスキー練習合宿地である五色へ、行くやうになり、それからゲレンデが延びて吾妻群山を歩き廻るやうになつたが、尙、その事以外に、大學へ入つたその年の夏から、早速五色へシャンツェ建設、谷地平小屋建設、青木山小屋電話敷設等の事業で、或は計畫のため、或は監督のため、雪のない五色溫泉や吾妻の山々へ、スキーの時期外れに出掛けたのである。それから、金澤の高等學校

時代に白山山脈の山々がいつも私の腦裡に跋扈して、今日に到る迄、一種拔く事の出來ない戀着心となつて居るが、丁度同じ樣な氣分と風貌との持主である吾妻群山は、東京に於ける、その戀着心の延長とでも云ふが如く、又吾妻の山が白山の連山に代つたとも云へやう。そして私の吾妻山行は私のあらゆる意味の過去の頁から、取り去る事の出來ない物になつて了つたのである。

秋の冷やかな風が面を拂ふ頃、黑い針葉樹が果しなく續いて、しめやかな咽っぽい香が大氣中に靜かに薰じてゐる中を、搦み合つた根を、ステップの、よい足がかりにして、無言の中に、深い〳〵登りと、果しないやうな歩みをつゞけたり。

或は初夏の頃、强い日光に照らされて、山毛欅やドロヤナギ等の闊葉樹の、若葉の萌え出づるやうな綠の中を、大勢の友達と高笑したり、ざわめいたりして、もうすぐ着く筈の、夜の宿を、或は夕餐を、心では定めて見て、勇んで見たり、苦にして見たり。

春の光を十分に受けて、忙しさうに流れ去る溪流を、自分は暢氣に左岸に右岸に、幾度も徒涉したり、又急に淵になつて、崖を登る辛苦を嘗めたりして行くと、急に大きな澤が入つて、地圖を按じて、あれかこれかとさゞめき合ふ焦燥。

或は冬の頃、廣い太尾根が霞の彼方につゞいて、幾重にも幾重にも重なる山波の中に、自分が嘗て辿つた山稜を、記憶の中から呼び起したり、又何時も心掛けながら、今日に到るまで未だに極める機會のない山々を眺めながら、

ストックリングの音律的な響に進むうち、急滑降のスロープに急に出會して、思はず歡聲をあげたり。

今日飛驒山脈がアルプスの名を獨占して、殊に夏期に蝟集され、そのため眞に山を愛する人々が少時なりとも、自然の懷に逃避せんとする傾向が、或意味に於て綜合的になつて、秩父や奥日光が隨分宣傳せられて都人士の杖を曳くやうになつた今日、吾妻群山が同じ風貌に、否、それ以上或意味で立派な山塊なるに、何等賞稱されずに居ることはその當を得ざる事と思ふのである。

青木山小屋を根據とする吾妻群山のスキー

青木山スキー小屋の位置は五色溫泉を距つる事約二里餘で、吾妻群山の東、家形山の麓、青木山の北にある。夜具、ストーヴ、炊事道具一切揃つて、電話も出來てゐる。

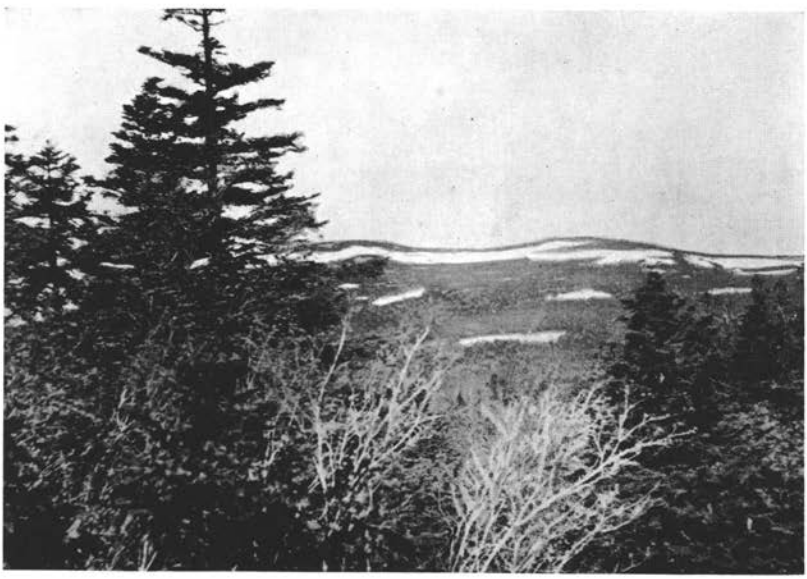
抑々吾妻群山は山形福島兩縣の國境にある山々の總稱にて、北は高湯、西南は檜原、小野川、秋元の諸湖より、東は五色、土湯に介在する約六千尺級の山々である。主な者を擧ぐれば、家形、一切經、東吾妻、中吾妻、西吾妻東大嶺、西大嶺等である。森林地帶であるが、喬木はなく、却つてそのために、雪の質がよく、吹き曝しの處もあるが、ドライに近い。青木山の小屋を中心として、吾妻を歩くときは、重いリュックサックを擔ぐ必要もなく、危險も伴はない。そしてスキーも左程上達した人でなくも爲し得られる。朝出發して充分遊んで、夕には歸れる。ピクニック式な、人夫などを要しない、經濟的なスキー登山である。目前に展開される美しい景色を眺めながら、最

も十分なトレイニングと、それから登山のスポーツ化の點において、今來の人々の要求するスキーの傾向を、大ゲレンデ主義と定義すれば、吾妻のスキーは將にそれに違ひないのである。

小屋を出て、登る事二時間、八百メートルを登つて家形に達する。美しい樹氷を珍しく思ひながら、東大嶺、西吾妻を遊んで歸るか、東吾妻に遊ぶかしてもその日に小屋まで充分歸れる。相當の吹雪の日でも、青木山の宿までは難なく、下りは十五分の快味も味へる。默々として、タンネンの生えてゐる尾根を、我々がストックリングの音律的な響の中に進むうちにも、スキーシプールは、相語るが如く、我々はそれによつてまた語れるが如き氣分は、吾妻登高のエッセンスであらう。

毎年、師走の風が東都に訪れて、雪の狀況などが傳へられて、五色で雪上を滑る人となるのであるが、我等の姿はそれから三々五々青木山小屋へ吸はれて行く。そして毎年大抵二週間位をこの小屋に暮して了ふが、時々溫泉にも用事で歸りもするけれど、先輩の方々やその他の人々を、或は迎へたり、或は送つたりしてゐる急しさ、嬉しさ賑かさ、寂しさ。たゞ時間は忽々として過去つて了ふのである。

昭和元年十二月某日、私は稻積、中島の兩君と暖かい寢床のうれしい環境である小屋を出て、その前日登つた家形山へ登つて見た。廣い頭の臺地へ、矮生の栂が風致の妙を盡して散在してゐるのを倘何度もよく見た。樹氷がサンタクロースのお爺さんのやうな形をしてゐる面白さ、片栗粉のやうな雪がスキーの下で、キュー〳〵音を立てゝ



（上） 家　　形　　山　　桑田英次氏撮影

（下） 中吾妻附近より望める西大嶺（左）と西吾妻（右）　田部正太郎氏撮影

ゐるのをきいた。東北の山のスキーの面白さは格別なものだと思ひながら歩を進ますと、自分達はいつの間にか家形（ガタ）を烏帽子の方に向け大部下つてゐた事に氣がついた。

亂れ飛ぶ雲の切れ間から、豪宕な山容を持つ山々、烏帽子を越えてすぐそこに地圖に見える東大嶺が招くやうに見えてゐる。それから烏帽子に行つた時に、東大嶺と見てゐた山の右手に更に、霞の彼方に廣い〳〵山容の山が見えて我々に誇つてゐる。私はその時「東大嶺は手先の指のやうな尾根が澤山出てゐて、頭が廣くて間違ひやすく、吹雪くと駄目で、十二月には誰れも行つてゐない。」と某先輩の云つた事を思ひ出した。それから、我々は風の猛烈な中を衝いて進み、一八九二・六米突の三角點のある山（我々は昭元山と呼んでゐる）を左手に見て行くと、風も當らず深い積雪に大變困惑したが、樹枝の間にかゝつた滑稽な雪狀を見て過ぎ行くうち、ピクニックにでも來た樣な氣持になつて了つた。少し上りになつた頃、猛烈な風が我々三人を横ナグリにナグリつける。東大嶺には間もなくつく。暫くして歸る。歸りも同じ道であつたかと記憶してゐる。家形山についたのはまだ早かつた、でもその時分はもう吹雪で眞暗であつたが、家形山の肩から滑出してからは、粉雪の中をカッ飛して、美しい無我の狀體が數分續いて小屋に着く。

それからストーヴを圍んで、吹雪の軒端にぶつかる音をよそに、熱い豚汁をすゝりながら、淡い終日の疲勞を樂しい會話に紛らし、全く社會苦を忘れた感謝と至福の日を暮した。夕飯が濟んでから小屋の世話人、作松と善七の「あす晴れたら、大嶺さ行だかし」と云ふ語調の話が續いた。

それから或日、また家形から下つて烏帽子と昭元山の間に出たとき、もう登る事なしに、この緩やかな下りを續けて見たく、この谷を下りて自分等の居る綾い山足の集り、谷地平を見やうと云ふ事になつた。栂の黒い〳〵拔けられさうにも見えない森林の間をフッ飛んで行くと、左程心配もなく行先が開ける。時には失敗して引返した事もあつたが、そのドライな雪質を充分に樂んで進むうちに、森林が開けて、川が雪を割つて、淵れもせずに、せゝらぎを立てゝ流れてゐる廣い開けた處に來て了つた。型體を異にした景色に珍しく思ひ、のんびりして一時間も此處で費して了つた。谷地平っていゝ處だと皆が云つた。(實はこれは谷地平の下の谷であつた事が後で分つた。)

それから歸路をどうとるかと云ふ問題になつてから、同じ道は面白くないから他の道から行けと云ふ事になり、鎌沼へ拔けて見やうと云ふ事になつた。その上りの辛い事、何處をどう通つたか全々分らぬが、たゞ深い森林を互に呼び交したりして元氣を付けて、無茶苦茶に登つたのである。鎌沼の南、東吾妻の裾についたのであるが、その時間の早い事、谷地平から小一時間、東吾妻もすぐだと云ふので、三十分間程苦闘をやつた。實際苦闘であつたので、波狀になつた雪の上を、登りのみではなく、下りの滑行にも隨分苦しかつた。ガタ〳〵した不愉快な何分かを費した、それに吹雪が此頃より漸くはげしく、此行深く印象に殘つて東吾妻には以後二度と行かない。沼の東を廻つて一切經の鞍部を乘越す邊で、吹雪のため、先が全々分らず磁石等を取出す騒ぎとなつたが、家形の肩には早くついた。

かくして、我々のゲレンデは段々に伸び、擴げられて行つた。栂森下り、米澤高湯下り、西吾妻行など。そして

それが何度も繰返された。

實際に於て、吾妻の山々の中、東大嶺、西大嶺、中吾妻方面が吾妻として相當のガンバリを見せてゐる。そして此等の山々の北斜面は雪狀が大變によく、此處で充分に遊ぶには青木山小屋は少し遠い嫌がある。吾妻群山の中央部と思はれる谷地平に小屋の必要を感じ、色々交渉の結果、現今では喜多方營林署の手で建設せられ、冬は東京帝國大學スキー山岳部の使用に委せられてゐる。位置はよいから冬季埋れたりなどはしないが、設備が不充分なため、重荷を負はねばならず、あまり大衆的でないのが遺憾である。

それから、小野川湖、東吾妻—中吾妻の南斜面は長くて雪質も惡いらしいが、西大嶺を越して、檜原湖を眞下に見ながら、スキーを驅つて、湖畔の平和村、早稲澤へ下るのも面白いらしいが、未だに決行の機會がない。廣い吾妻は、我々を充分に面白がらせる場所、狀況等の箇條を澤山に持つて居て、一度スキーで此の地、此の道へ踏み入れた足は仲々洗はれぬであらう。

吾妻山初夏の旅

昭和三年七月一日　土湯　午後三、四五。野地温泉　六、〇〇

三日　野地—高森—一澤—金掘（一二、〇〇——一、〇〇）秋元—雄子澤—早稲澤

三日　早稲澤　午前九、〇〇。西大嶺　正午一二、〇〇。白布高湯　午後五、〇〇

○吾妻群山　田部

四日　高湯―米澤

學校の授業が終つて、青木山小屋の電話工事打合せの爲め五色へ出掛けたが、五色では毎日雨降りで、火鉢を抱へる位の寒さ、此處から谷地平へ拔ける積りで、二三日滯在して見たが霽れず、一緒に行くと云ふ善七君にも、溫泉に歸ると云つて板谷へ下つた。板谷でこの儘、東京へ歸るのは、隨分物足りなく思はれて、福島で汽車を降りて、土湯邊から、吾妻を歩かうと云ふ、氣輕な心持に捉はれて了つた。

土湯行の自動車に乘つて、福島の町を去つたのは、二時過ぎであつた。信夫橋を渡つて、右手の田甫道に入つて間もなく、ゲージが道を外して了ひさうで、心配してゐると、道が惡くて車は進まぬと云ふ。仕方なく降りて行くと、地藏原（ヂゾウッパラ）と云ふ馬方等のゴロ〳〵してゐる驛傳場の樣な所を過ぎる。これから土湯まで一里。

土湯はこの十二月大火で大半は烏有に歸し、川向ふの一部分が殘つてゐるのみであつた。まだ早いので湯をあびてそれから、本町に逆戻りして、會津街道に入つた。昔、會津侯はこの街道を通つて江戸に出たものらしく、道は立派で、電力會社の高壓線が通つて居る。それに、上つたり下つたり、野地（ノヂ）溫泉まで二時間以上かゝつてゐる。面白くない。幕（マク）ノ湯の澤に沿うて上ればよさゝうだと思つた。闊葉樹の疎林を行くうちに、野地溫泉の主人と、羽多野と云ふ土湯湯治の常連と一緒になる。溫泉近くなつて、鬼面山（キメンザン）が左手に見えて、崖崩の荒れ膚を見せてゐた。高山（タカヤマ）と相ノ峯（アヒノミネ）が割合によく見えてゐた、野地についたのが六時、日暮れ迄には横向溫泉（ヨコムキ）位まで行けさうであつたが、此處に泊る事にする。夕燒けで美しいが、土湯峠よりの突風の物凄いのに驚く。冬此の邊り一帶は雪が溜らぬさう

（上）東　大　嶺
（下）家　形　山　　鹽川三千勝氏撮影

である。濕泉宿は勿論一軒で、ランプを使つてゐる村里離れた型をしてゐる。濕泉は蒸氣で筧の水を熱して湯槽に引いてゐる。胃腸に效くので菓子屋の羽多野氏が必ず夏に來るのださうである。

クッコウの聲に目がさめれば、金色の光が部屋にも湯室にもあたつてゐる。朝の冷氣の裡に、湯が惜しげもなく溢流して　空しく過ぎ去つて行く。

宿を出て土湯峠へ登る。東吾妻、相ノ峯、高山等が見えるが、會津の磐梯(バンダイ)が紫紺色に美しく映える。峠を下つて一時間、横向(ヨコムキ)温泉に達する。それから暫く緩い勾配を下ると高森(タカモリ)と云ふ部落に達する。硫黄をむき出しにしてゐる安達太良山(アダタラヤマ)がはつきり見える。此處迄の道、應揚な綏道、會津風に吹きつけられて搖れる闊葉樹の木の葉を通して、入り來る日光が、一人旅に、明るみを與へる。でも電柱が氣分を傷けて面白くない。

高森から下れば、沼尻(ヌマクリ)であるが、早く電柱と別れたくなつて、民家で敎へられた通り、裏山を登つて行く。吾妻山南部を早く味はんとして。一人旅の氣樂さ、旅の放浪性、定つた行程は最初からない。

約百五十米程上つたと思ふ頃、闊葉樹林の樹葉の先に、異樣に耀いたものがあつた。秋元湖である。一人旅に力を添へて呉れるものは、此等の景色の變化に違ひない。山間に湛へられたる湖の遠望は、舊友との邂逅にも等しいものか。殊に脚の輕きを覺える。峠で徑が二つに分れる。敎へられた通り、左へ下つて行く。下生えの猛烈た森林

の中を足早やに過ぎて、小倉川を渡る頃、俄かに脚下より文字通りに烏が飛び立つ。雛を連れた鷹が驚いて飛立つたのである。この邊は鷹が隨分居ると云ふ事を後で聞いた。先に見えた秋元湖はあれっきり見えない。數軒の家が見えて來る。どの家も樣子が少し變で、誰も居ない。仕方がないので、先へ行くと、徑が左手の山へどん〳〵登つてゐる。變だと思つてゐると、運良く岩魚取りに會ひ、この道は大原村への峠徑で、一澤へ行くには、逆戻りして左へ曲れと敎へて呉れる。

この邊のノンビリした景色、東京の塵埃にまみれた人々に見せたい景色。廣い高原がダラリとした中吾妻の山足に續いてゐる應揚さ。大倉、小倉の澤の廣い事。吾妻にかゝる白雲の佇ひ。草原の千草萬花に色とり〴〵なる事。處々に思ひ出したやうにカンバがポツリ〳〵と生えて居る所。

少し寢ころんで見て居たが、氣分を別つ友もなかつた。

「皆馬鹿だなあ、こんな處を知らないかなあ。日光の小田代ケ原よりもいゝのに。」

等勝手な事を一人で云つても、よかつた。

一澤の人家で、婆さんが色々話をして呉れる。先に過ぎた部落は、椀等の木地を作る小屋ださうである。これから先も大變にある事を敎へて呉れた。

一澤の部落の浮世離れのしてゐる事。ばら〳〵に十軒足らずの家が、世の文明をよそに、太古を物語りげなる樣

子、丈餘の積雪の冬も、此處に住んで居るさうだが、やはり木地と少しの畠で暮してゐるのであらう。茶代を置くと、山中でそんな事は愼しめと、婆さんに叱られる。一澤の村に別れてからも、彼等の質朴な有樣を考へて行くうちに、自分は秋元湖畔に立つてゐた。

秋元湖、又の名吾妻湖。此れは吾妻の山ひだの低地に水を滿へたものには外ならぬが、檜原湖、小野川湖の二湖と共に明治二十一年、磐梯の噴火に伴ひ、長瀨川(ナガセガワ)を堰き止めて出來たものである。その當時、秋元と云ふ村落が湖水になつて了つて村全體の人が死んだ。多分一澤の樣な村で、一澤のやうな村人であつたらう。

湖水に小島が點在してゐる。この湖畔からは、白布山の蔭になつて磐梯山は見えない。湖水が唯長く山間に切れ込んでゐる樣で、對岸は見えない。

湖について廻ると村落がまたある。舟を出して呉れると云ふ家へ入つて賴んだが、今日は駄目だと云つてゐた。時に十二時。この部落は大島原(オホシマバラ)又は金堀(カネホリ)と云つて、二三年前から村落として認められて、縣稅や國稅を拂つてゐるのだ、と云つて、威張つて居た。一澤や此處の子供は小學校へ通ふのに峠道を二三里歩いて、里に出ねばならぬので、冬などは辛く、一年の半分出られゝばよい方ださうである。

この土地の人の話によると、此處より吾妻湖の湖岸に沿うて秋元に至る「陸測五萬分ノ一圖幅」に見ゆる道は、大變に荒れてゐて、且遠まはりであるとの事。それで山に上る近道を敎へて呉れた。

午後一時、此處を出て、北に向つて登る。又四五軒家がある、急な上りになつて一寸脈氣がさすが、左手の山が

○吾妻群山　田部

相當大きく、即ち出森山である事が分る。峠らしいものを越へると、右手に中吾妻へ行く徑が見える。此處は草地の高原になつてゐる。鳥が囀る。それから一天かき曇つて、夕立がやつて來る。夕立よけに運よく建てられてゐた、小屋に入る。誰も居らぬ。霽れてからよく見ると四五軒家がある。木場事務所とかである。秋元へ行く徑を子供に案内させて、中津川への下り口迄トロッコ道を下る。唐松川の木を秋元湖に下すのである。

中津川に立派な橋があつて、手前の袂に、奇麗な家がある。此處から急に立派な道になつて、吾妻湖を巡つて居る。磐梯の雄姿が日光に輝いて、紫色の膚、水に映じて美しい。水邊を巡つて、充分に湖を味ひながら、四時頃、長瀬川となつて、湖の流れ出づる處の堰堤に到る迄、誰れにも會はなかつた。

大きな、闊幅に見えない村落がある。槍原村へ行きたいと云ふと、皆が危いから止めろと云つて聞かない。強ひて行くなら、早稲澤へはサンボウ峠を越えねばならぬとして、曾原開墾の薪炭事務所で泊つて、よく知つてゐる人に聞いて行けと云ふ。此頃は槍原湖は舟行の便がないと云ふ。自分も一人、その氣になつて、別れを告げて、營林署の木材運搬用のレール道が小野川湖迄の近道である事を教へられたので、これによつて歩く。栂のやうな針葉樹が火山灰の砂地にぐぢけた樣に生えてゐる中を進むと、小野川湖の流れ口に着く。この間は隨分凹凸のある土地で、磐梯が益々美しく見える。

小野川湖は山間の湖水のやうで、廻りの木々が、鬱々として、湖面にも藻の樣な水草が一面に生えて、淀んで去らざる水面は、心のめいりさうな靜かさの湖であるやうだ。

人形石と新高湯との間に於るけオホシラビソとコメツガの森林　　田邊和雄氏撮影

小野川湖畔を出發して、暫く後にしてゐた磐梯が、前方に見えて來る。「變だ」と思ひながら行くと家が見える。曾原(ソウハラ)にしては早過ぎると思つて、聞くと、此處は檜原湖畔の雄子澤(オシザハ)と云ふ處で今檜原村まで發動汽船の出る所である。それは、檜原の青年團が磐梯登山を終へて歸る所だからである。此處に到つて怪我の功名も徹底したもので、偶然性に織込まれて行く旅のユーモアは一人旅に限ると思つた。

舟は容易には出なかつた。遂に日が暮れて了つてから、漸く湖に滑出した。磐梯には丁度三五の月がかゝつてゐた。檜原湖、これはどんな風貌の湖であらうか、靜かに進む舟の中で、飽かず眺めてゐる。

湖面に碎ける月影で、この南北に深く切込んだ中にも、大小の島が相當存在してしゐる事が分る。舟は湖の中央を走るらしく、左右の岸がそれでも相當迫つて居る。山がそれ程高くもない點から見れば、南北の果て知れぬ長さの觀念が、飽くまで湖を深い切込んだものにして了つた。湖が山を立體視せしめ、自身を狹めて了つたのであらうか。

平和な飾氣のない吾妻湖、怪異な靜かさの小野川湖、それから物凄いやうに碧を湛へて刈込んで見える檜原湖。此の各々特異の相貌と特色のある色と光との湖沼がかくも見事に揃つて、吾妻と調和しておさまつて居る。そして餘り人々の注意と興味とを引かないのを不思議に思つた。

自分は誘はれもせず、口說かれもせず、只地圖を賴りに歩いたに過きないのであるが、この面白い彷徨をもつと

續けて行きたかつた。冬に、吾妻の尾根を傳つて、此方にも來る機會が、假にあるにしても、此程面白く歩けるか全く疑問である。寸時でもこんな調子で歩けたなら、それ丈け幸福であらう。

舟は始め檜原についた。地圖を按すると、早稲澤の方が唯親しく、西大巓へ登るにも都合よく、考へられたので早稲澤まで乘る。舟が暗い、ヨシかアシの中に入つて、自分も下りる。村迄四五町、連中が一人一人家に入つて行く中で一人が區長に頼みにくいと云つて、自分の叔母さんの家に、私の宿を頼んで呉れた。暗いランプの光に照らされて、嬬遙で食事を濟ますと、此處の主人が今夜區長の處に、村の寄合があるから行くと云ふ。それでは明日西吾妻までの案内人を頼むと云つて、自分は床に入つた。

翌日、筧を傳ふ水音に目がさめて、雨かそれとも、流れ水かと思つて、戸を開ければ、降雨烈しく、朝餐の後、主人は喜多方へ歸れと云ふ。八時半頃主人が頼んでおいた案内が、天氣が定まりさうだから行くと云つて來た。案内と云つても西大巓へ一度行つた事があるだけだと云つてゐた。只心強いパートナーであればよいのである。

村を別れる時、小錢に不自由をして、五圓札を細かくして呉れと云つて、四十軒もあらう村中を歩いて見たが駄目で、遂に三軒の家が寄合つて、五十錢銀貨十枚を都合して呉れた。宿のお禮に何枚かを渡すと、どうしても取らない、最後に一枚しか取らなかつた。後で聞くと、此の邊は米の一升拂ひとか云つて、一泊して一升の米の相場だけ拂へばそれで結構濟む所ださうだ。

この村は喜多方へ賣出すお椀物の木地を作つてゐるので、二百四十箇を七圓五十錢で卸すのださうだ。木の代金一圓と馬力賃五十錢を、内からさし引かれると云つてゐた。今迄の木地小屋も皆それに類したものである。そこゝに、水車樣の工場らしいものがある。

西大嶺に登るには、吾妻川を溯つて一歩一歩進む譯である。川の水量は相當多かつた。進むにつれて、廣い河床の砂礫の間を流れて居た川の景趣は次第に狹められて、谷は深くなつて、水の瀨は激しく流れる。闊葉樹が所をせましと、潜拔けるにも困難な程密生してゐる。隨分登つたと思はれる頃、瀧が行手を塞いでゐるのに會ふ。不動瀧と云ふ。この瀧に出會つてから右手の藪の中に、どん〳〵入つて行く。ジグザックに登るのでなく、笹や藪につかまりながら、直線に登つて行く猛烈な事、勿論道でもなんでもない。でも所々鉈を入れた跡がある。殆んど休む事が不可能で、否でも藪をかいて登らねばならぬのである。それでも振返つて見ると、檜原湖は見えない。自分は今、大早稻澤山(オホワセザハヤマ)と西大嶺と東鉢山(トウハチヤマ)との尾根の間の澤を登つてゐる事が分つた。闊葉樹の森林の盡くる頃、笹が深くなつて、それから栂等の針葉樹が現はれて來た。針葉樹は風でいためられてゐる樣子で、何れも少さく盆栽の樣に曲つてゐた。

西大嶺の三角點に達した時は丁度十二時。暫く立つて四顧す。丁度南側のみが晴れて、磐梯山に白雲がたなびいてゐる。檜原、小野川湖は見えない。米澤の方は雨雲が立ちこめてゐる。大嶺の南斜面はゆるく、緩(なだ)らかで、密生

した、森林を持つて居る。西吾妻はよく見える。その間は偃松高く密生して、西吾妻の南斜面の窪んだ處に雪を蓄へてゐる。

いゝ山だ。女性的な、潤ひある山だ。冬の訪れもよからうが、誰れも讃美しない、夏の大巓も、「その奥床しさは他の山々に見られぬ魅力を、充分に持つてゐる。

これから高湯へ下る道で、大變な騒ぎを演じて了つた。彼の話によれば、「早稲澤から大巓を越へて高湯に出たものは、自分で二人目で、一人は當時郡會議員であつた人ださうである。その時區長が同行したが、西大巓からすぐに北に切つて行く方が、近道であると敎へられたと云ふ。それらしいものがあるので行くと、鉈で下生へを切つたやうな跡が、未だに殘つてゐる。それを便りに行くと程なく先が分らなくなる。北側は疊つてゐて、一寸先も見えぬので、はつきりは分らぬが、隨分變な所を歩いてゐるらしく、藪潜りに精を出してゐたが、三四十分もの時間が三角點を出てからたつたと思はれる頃、餘程大巓の頭をまき過ぎてゐるらしいと云ふ氣がして、さつきより時間が餘計にかゝつて、又大巓迄歸つた。頂上にくれば、南側がはれてゐる。隨分馬鹿にされた譯である。それから西吾妻山の方を目がけて徑らしい所を行くとハヒ松が高くなつてゐて、どうしても通れない。又早稲澤へ歸らうかと何度考へたか知れない。歸るにしても、一應は偃松潜りに勇氣を出して見る。相當苦しさを嘗めて乘り切ると、水氣のある沼地へ出た。大谷地平と云ふ立札がしてあつて、立派な徑がついてゐる。時に三時半である。この道なら高湯迄二時間とかゝりさうもない。案内は道を間違へた事を詫び、約束通り歸ると云ふ。此處で歸すのは氣の毒であ

沼尻温泉附近より西大嶺(左)と西吾妻(右)とを望む　　武田久吉氏撮影

つたから、高湯迄行く事にした。西吾妻の頂上は極めずして下りた。

此處から若女平の高原迄は、針葉樹が枝を交へて川前澤(カハマヘ)さへ見えなかつた。根がこぶのやうに、ごつ〳〵してゐたり、赤土になつてゐたりする徑を、たゞ森の匂ひを心ゆくまゝに嗅いだ。若女平(ワカメ)から高湯迄は、だら〳〵した廣い尾根を疎らな、處々シャクナギやツツジの花の咲く林を拔けて、高湯につく。若女平の美しい事、北斜面の緩い草原で、二人で一緒に休んだ。こゝから高湯まで飛ぶやうにして、溫泉についたのは五時十五分であつた。高湯から米澤まで三時間位で充分であるから、自分は今夜十一時の汽車に乘る事にして、そこで濡れた身體や着物を乾かすため終に湯に入る。

白布の高湯、自分は此處で又瞬間的の裁決に捉はれて了つたのである。奇麗にすき透つた湯水が、大きな木樋からドン〳〵流出して、自分の體のために、又も湯槽を溢流して流去る。終によい氣持ちになつて、次の朝高湯を出る事にした。

中秋の谷地平へ

昭和三年九月二十八日　上野發　午後一〇、三五

二十九日　五色發　午前一一、〇〇。青木山小屋着　二、〇〇

三十日　小屋發　九、〇〇。谷地平着　一二、三〇。谷地平發　三、一〇。五色着　八、二〇

○吾妻群山　田部

九月も末、日の光りにも黄色を帶ぶる一日、五色の佐藤儀兵衛氏より、一緒に山歩きをすると云ふ手紙が來た。佐藤氏と春から一度共に吾妻を存分歩いて見やうと云ふ約束であつた。青木山の小屋にどんなに電話がかけられ、谷地平にどんな小屋が出來たかと考へて、興奮した一夜を汽車で明した。連れもなく例の坂を登つて、五色に着いて、主人佐藤氏と一別以來の挨拶をしたのは八時半頃であつた。

佐藤氏も家をあける事になるので、用意に忙しく、十一時頃出發する。我々兩人の外に例の善七が一緒に行く事になる。賽ノ河原迄の登りは冬と同じに辛く、此處は相當灌木が擴つてゐるが、此の邊は、風の平素強い爲めか、草地でなだらかで、女性的である。時に天氣よく、米澤の町が見へ、雪がなくてだらしなく鉢森山も見える。高倉を搦んで白土の小屋の澤に到る間は笹藪がひどく一驚を喫する。道は立派で苦痛もない。上つたり下つたりして行くうちに、小屋近くになつて、電柱工事をやつてゐるのを見る。完成には間もないらしく、殊の外嬉しく思はれた。この電柱工事等を見て居た爲め、青木山の小屋に着いたのは二時、これから谷地平迄は、日暮迄には着ける筈であるが、電報を打つておいた稻積君が來るかも知れぬので今日は此處に泊る事にする。

善七が「山さもうゆがないかし。」とか云ひながら、前の小屋から焚木を山の様に取つて來て、ストーヴにどん〳〵投込む。湯が沸く、茶が出る。

「何時來ても、この小屋はいゝなあ」

「東京にはこんな處はありますまい。」

「いや何處にもこんな小屋はないね。いくら居てもあきないね。」

など佐藤氏とストーヴを圍んで話してゐる。此の小屋は二年も自分は年越しをしてゐる。それだのに今また來て見て物新しいが如く、嬉しくてならなかつた。

このストーヴを圍んで、このランプの光に照されて冬はスキ！の友達と熱い豚汁等を啜つたり、乾杯したり、山行きに翌日の天氣を心配したりした冬が思はれてならなかつた。「タンネンバーム」を歌つた人々が此處に居る樣に思はれてならなかつた。自分は立つて水小屋へ行つて見た。筧の水は冬と同じく寂しく音を立てゝ流れてゐる。飯を炊いでゐる善七を迎へてゐるやうで、冬と變りなく、善七が若し居なかつたら、この場合に大變不自然に思はれたに違ひあるまいと思つた。

冬と同じだ。然し窓外は白色でなく、黄ばんだ闊葉樹が處々に生へ、その下生は朱漆のやうな赤色をして疎らに色どつてゐた。

夕方になつて、天氣が悪くなり、降雨になつて、中秋三五の月も臺なしで眞暗である。夕飯が盛られる。

「汁いゝかし」

と云ふ聲の主は、やはりこの氣分の小屋に無くてはならぬものである。

翌日、早くから目がさめる。降雨である。皆今日は駄目だと云ひながら、それでも九時頃雨が止んで、霧がかゝつた。行けるだけ行つて見ると云ふので小屋を出る。

谷地平（ヤチダヒラ）へ行くには先づ家形山（イヘガタ）の向つて左の鞍部即ち五色沼へ出るのであるが、これは冬とは大變に異つて居る。第一に例の家形の懐（我々仲間での名稱）の邊の藪は、馬に乘つても見えない位の猛烈さである。例の褌（ふんどし）（これも以上と同じ）の邊迄は冬の家形登山と同じく、小屋の前の道を、その儘登つて行く。針葉樹が多いので芽が澤山に出る處ださうだ。善七が見付けてとつて行く。振返つて小屋の見えなくなる處から、道が左手の山へどん〳〵入つて行く。水のある最後の澤で、一休みの後、藪を離れて、針葉樹の大木が相當に茂つて、搦み合つた根が徑のステップをなして上つてゐる。この邊の森林は美しい。大根森（ダイコンセリ）の鉢形を右手に搦んで、陸測五萬分ノ一「吾妻山」圖幅に入る頃に、森が開けて、信夫の高湯道と合する。この道は三尺幅位の堂々たるもので、一切經までついてゐる。此處から東を見下せば、この道が遠くについて霞の彼方に隱れて居る。路傍に今年出來たと云ふ避難小屋がある。冬は使へぬと善七君が云つた。それから五色沼までの中、沼に顏を出す時、相變らずの突風のため、前進出來ぬ程である。霞で沼は見えない。一休みの後、全速力で下る。沼を廻つて、家形山の裾を廻る頃、風速が鈍つて、霞が霽れ、沼が見える。傍に小屋掛けがしてある。例のお墓である。

此の邊は一寸か二寸位の高さの草が生えて、毛氈を敷いたやうである。我々は自然に立止つて、附近を見廻す。五色沼は今日初めて小波を立てゝ、自分を迎へて居る。一寸凄味のある沼である。舊噴火口で、深さ五百尺もある切込んだ沼である。佐藤氏は魚なんぞ一匹も居らぬと云ふ。五色沼には、その樣子にも關らず、傳說等はないが、通稱「吾妻の熊」と云はれた、有名な案內人と彼と共に遭難した福島の人々の墓があるので、誰も無氣味に感ずるのである。家形山と一切經山は針葉樹が强風に虐められて、一米突に達せず、處々はげて土が見え、そしてその木

木が、この沼と釣合つて、もつと無氣味である。この邊は童話に見える、木の精、水の精、その他何々の精が月夜に浮れて踊り出す所のやうである。

此處より鎌沼に至る道は細く、「山ブダウ」と稱する二寸位の矮樹が一面に生えてゐる。それには青い實がなつてゐて、里に出せば一升いくらだとか佐藤氏は云つて居た。そして「アルコール」が大變含まれてゐるので村の衆が大勢取りに來るのださうである。食つて見たが一つで澤山だつた。一切經を搦んで鞍部に出て、一寸藪を潜つて下ると鎌沼に出る。

鎌沼は五色沼と異つて平和を語つて盡きない樣子である。四圍の丘陵的山々が低くて且なだらかな爲め、弱くて穩やかな感じを與へる、沼の中に石が飛石の如く散在して、淺い所が隨分あるらしい。沼畔にベンチが作つてある。此處に腰を下して、沼の全形を見る。附近に笹が大變に多く、時々訪れる秋風にさわめいてゐる、全く嬉しい氣持である。この平和な湖沼の風趣を盡きず眺めて、いゝ氣持ちになつて了ふ。佐藤氏に促されて、我にかへつて立去る。氏の話によると、この笹に蛙が卵を生み付けて、そこでかへつてから、沼に入る。とかで、天然記念物だとか云つてゐた。この邊には笹藪の間に小さい幾通りかの、水溜りが點在して居る。沼を廻つて右へ切つて下ると、地藏佛がある。それから美しい針葉樹林の間を拔けて出れば谷地平に下れるのである。

この下りは、細い丘陵的尾根傳ひで、大森林の立派なものである。亭々たる喬木が枝を交へて、カナツガ、ホンツガ等の針葉樹ばかりのやうであつたと記憶する。針葉樹の大森林である。

「カンバ」の白膚も美しく、登高のあくがれの一つには違ひない。それから山毛欅なども潤ひのある森林美を現出せしむるものに、違ひはない。併し栂、樅等の森はあくまで神秘さ、且不可思議を誘起する奥まりさ、と云ふものを力強く現出して、止まないのである。故に此の種の森林は必ず妖怪變化を呼ぶ。森の傳說は闊葉樹林にではなく、此等の針葉樹林に起るべきものに違ひない。

自分は只理屈なしに、この森林の中に吸ひ込まれるが如くに默々と進んで行く。赤土の上に搦んだ根、その根の土に落朽ちた葉が碎けて、土に歸らんとする屍。それらが只我等の足の裏に、無音の裡に、快い柔かさを傳へて呉れる。木立の枝、深く差交した繁みの隙から、覗き込む日光が、この音無の國では、最も煩さい、やかましや扱ひにされる感がある。

徑は、寧ろ緩めな勾配であるが、急ぐとも、後らすともなく歩いて行く。谷地平の何物かゞ引くやうに、後から誰かゞ押すやうに、でも自分は出來るだけ、この森林に永く居たいかのやうに。

「鎌沼のベンチを出たのが十一時、それからもう小一時間たつた。」と佐藤氏が云ふ。遠くに奏でる渓流のセヽラギも次第に近くなつた樣に思はれる。俄然森が開けて、中吾妻山（ナカアヅマザン）が見える。

破れた靴に最後の柔かな土壓を感じた時、我々は美しい流れを渡つて、細かい奇麗な小石の並んでゐる川原に立つて居た。流れが急ぐともなく、秋の日光を十分に浴してきらめいてゐる。

「小屋が見える」

と云ふ善七君の聲。新しい生木の香ひの去らない小屋が、河原の上に建てられて、我々を迎へてゐる。十二時少し

廻つてゐた。

かうして、我々は谷地平へ來て了つたが、此處に一寸變に感じたのは、先年スキーで谷地平へ來た時とはどうも異つてゐる事である。兎も角、中の圍爐で湯を沸す。晝食の用意が整ふ。この小屋は一間半、三間の板敷と一間三間の土間に分れて、その他に便所一間と焚木と入口が半間と一間半ついてゐる。すぐ傍を川が流れて居る。北向きで、窓は狹間で、丘がせまつてゐるので、冬はどうかと佐藤氏と色々考へて見る。屋根は板で、どうにかせねば冬は使へぬ。この小屋は大抵埋らぬ積であるが吹き溜りらしい。この小屋が何時かはスキーヒュッテとして完成されて、青木山の小屋の樣なユーモラスになる時も遠くあるまいと思ふ。

中食が濟むと、佐藤氏と北側の丘陵を登つて見た。小徑が上つてゐる、房のやうな形をした矮樹が徑を狹ばめてゐる。徑を登れば、廣い〳〵じぶ〳〵の谷へ出る。處々に鬼怒沼のやうに、沼が大小點在して居る。沼に水草が生えて居る。この原が相當に續く。この原の西は相當斷崖になつて切立つてゐるらしく、川があつてその向ふに、中吾妻が牛の樣に長く横はつて、頂上は疊つて見えないが、その尾根を北に辿れば、東大嶺、昭元山、烏帽子と續いてゐる。この草原は何處迄進んでも、ぐしや〳〵で靴全部を沒して了ふ。介在する沼の深いのにも驚く、一米突位のものは澤山にある。この草原の北端迄行くと矮樹が競ふて枝を擴げてゐる。その北が斷崖になつて溪流が走つて居るが、この溪流は谷地平の水とは關係がないのである。曾てスキーで來た處はこの溪流の開けた處だつたのであ

る。佐藤氏は木に登つて見下してゐた。北方には、丁度烏帽子と昭元の間の廣い大きな澤が見えて、その澤の中に疎らに、木が生えてゐる。家形、一切經等はどんよりと見えるが、東吾妻は見えない。天氣なら平も奇麗であらうしよい處らしい。

二人で善七の待つてゐる小屋へ歸つたのは、間もなくの事であつた。この小屋は大倉川の小瀧の上で合流する一支流の澤にある事が漸く分つた。土湯村から來たと云ふ岩魚取りがヤスやビクなどを以てやつて來て、小屋に入つて來る。この川には岩魚が澤山居るさうで一夜ついて一貫目は大丈夫と力んで居た。それから我々は又寫眞機を持つて先程の場所へ行つた。兎君が不思議さうに、我々を眺めて居た。

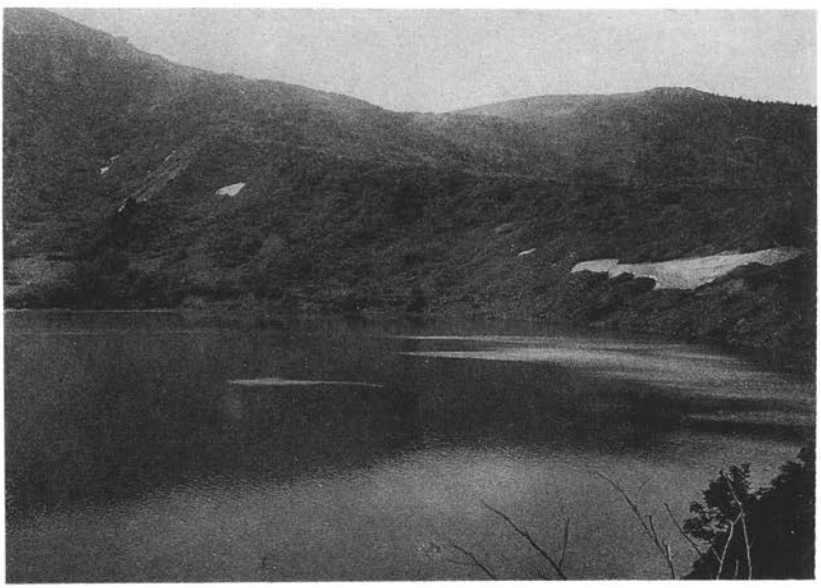
小屋に歸ると雨が降つて來た。佐藤氏はこの調子では明日の天候も分らぬと云ひ出し、五色へ早く歸らうと云ふ。自分も學校もある事故、三時過ぎに小屋を出發して逆戻りする。前に出た道と同じ道をぐん〳〵登る。雨が降る。鎌沼へ出た時は雨は霽れて、霞がかゝつて居た。それからも元來た道をその通りに歩いて、青木山小屋に着いたのは六時、そこで水筒の酒を飲んで、あの長い道をラテルネをつけて歸つた。福島の燈火が美しく見えたが、空には星一つ見えぬ暗夜であつた。五色に八時過ぎに着いて、その夜板谷から上野へ向つた。

中吾妻、谷地平の散策

昭和四年六月二十三日　五色發　午後一二、三〇。谷地平　七、〇〇

二十四日　小瀧見物　午後四、〇〇

谷地平小屋を隔てゝ東吾妻方面を望む　　田部正太郎氏撮影



五　色　沼　　同

二十五日　駕籠山稲荷
二十六日　谷地平　午前六、〇〇。中吾妻　八、〇〇。谷地　一〇、〇〇——午後一、〇〇　幕湯　四、〇〇
二十七日　幕湯　午前六、〇〇。一澤　午前八、〇〇

勤めの身になる迄數日あるので、輕い旅心が浮上つて、谷地平や中吾妻の黑い森林の音無の國が目にちらつき、急に用意して、遲い夜汽車で五色へ向ふ。五色について來意を告げると、佐藤氏は、二日前に通知を呉れれば、一緒に行けたものをと殘念がつてゐた。でも一人旅は寂しからうと例の善七君を同行させて呉れた。

晝食に隨分御馳走になつて溫泉を出たのが十二時半、裏山をそろ〳〵登つて簑ノ河原に出る。輕快な出立ちの男女五六人づゝ群をなして、下りて來るのを見る。背中に筍を重さうに背負つて居る。此等連中は、五色や新五色に居を構へてゐる、筍取りの連中である。高倉山を右に搦んで、背丈が五六尺に及ぶ、U字形の藪を切り拔いた道を白土（ハクド）の小屋迄進む。澤にかゝつた橋が腐り、崩れさうになつて居るので、苦心して進むと、竹藪が一面に、家形山に續いて居るが、此處迄筍取りは來てゐない。二時頃青木山小屋について善七に會ふ。

かくて自分は又懷しい小屋に來た。この小屋への訪れは、此度で何度目であらう。學生生活を終へて了つた自分には、もう過去の夢として、追憶されて、もう今迄の樣に度々來られないであらう。

小屋に別れたのが三時頃であつた。夏道を登ると竹藪が兩側から迫る、善七は取らねば損のやうに筍を取つて行く。雜木林を通る。闊葉樹を少し混じた栂等の森林であるが、マカンバが目につく。處々に大きな澤が急流をなして居る。道ははつきりついてゐるが、二抱へもあらうと思はれる大木が、雜作もなげに、打倒れて居る。崩雪であ

らうか。毎年の例だが、積雪ではないらしい。此地方は風が強いため、雪は枝葉に止らない。大根森の裾に踏み込むと、下生えの灌木にシャクナギやウラジロが花を咲せて、迎へる。

高湯道に合して、暫くして五色沼へ顔を出すと突風が霰をふくんで押返す。思はず眼鏡を外す。沼を廻つて一切經山に登る。盆栽様の灌木の中に、ウラジロやシャクナギが笑つてゐる、一切經山の頂上より、鎌沼目がけて下る。東大顚、昭元、中吾妻の山々が黑く、その中に殘雪が點在してゐる。

矮樹を横切つて、無理に下れば、鎌沼の右の小徑をたどつてゐた。美しい沼の佇ひ、東吾妻の遠望、なだらかな山足、おのづとゆっくりして了ふ。この平和な沼は、夏でも變りないと云ふやうに、殊に沼面が濃い水色でないのが、周圍の木々に影響される故もあらうが、來る夏をよそに、沈滯の色を續けて居るやうである。それにその周圍に生えてゐる背の低い笹が、少しも青々しくないのは、その景色を益々助長せしむるものである。東吾妻を見ても、どこを見ても、黑い木が並ぶのみで、萌え出づる青さは益々見當らない。沼を廻ると、大きな雪田がある。これを過ぎて、鷲籠山(カゴヤマ)稻荷山(イナリヤマ)への道に分れて森林を下ると谷地平へ出る。

栂の根を、ステップに利用した處々ぬる〳〵の道を下る。黑い森林が、萌え出づる六月をよそに、又秋でも春でも、何時でも同じ恰好をして、森林自身の內的感覺、何んの變化も、色合ひも見せずに、時季をよそにして、それでも太古を語りたげに、聳立して居る。

森が開けて、川がせゝらぎを立てゝ迎へる。水溜りにオニバセウが白い花を咲かせてゐる。人聲がする。小屋の

廻りに、岩魚釣りが大勢來て、魚を火に焙つてゐる。七時であつた。我々もそれから夕食の用意に取かゝつた。

朝から降雨で、夜中魚釣り連中が騷ぐので眠れず、雨水が屋根から漏れる、焚火がいぶる。小屋は相當不愉快である。この魚釣り連中は、信夫郡のものは勿論のこと、安達郡からも來て居るので、米、味噌を背負つて來る所を見れば、相當岩魚も居るらしい。

午後四時頃、小降りになつたので、小瀧を見に、善七と共に出掛ける。小屋の前の澤を下つて、暫して大倉川の本流に合する。降雨のためか、此の邊の河原は水が溢れてゐて、廣く淺い緩やかな流れを形作つてゐる。飛石のやうに、散らばつた、ステップに程よい石の上を愉快な氣持ちで飛んで行くと、間もなく拳大の石が早い瀨をせき止めんとして流れに逆つて、川床に奏てゝ居る。更に下ると、廣い川原になつて砂礫の床を川水が相當に急ぐやうに流れて行く。淵になつて兩側が斷崖になつて行方を防ぐので左岸を相當高く登つて下ると川の面目が一新する。

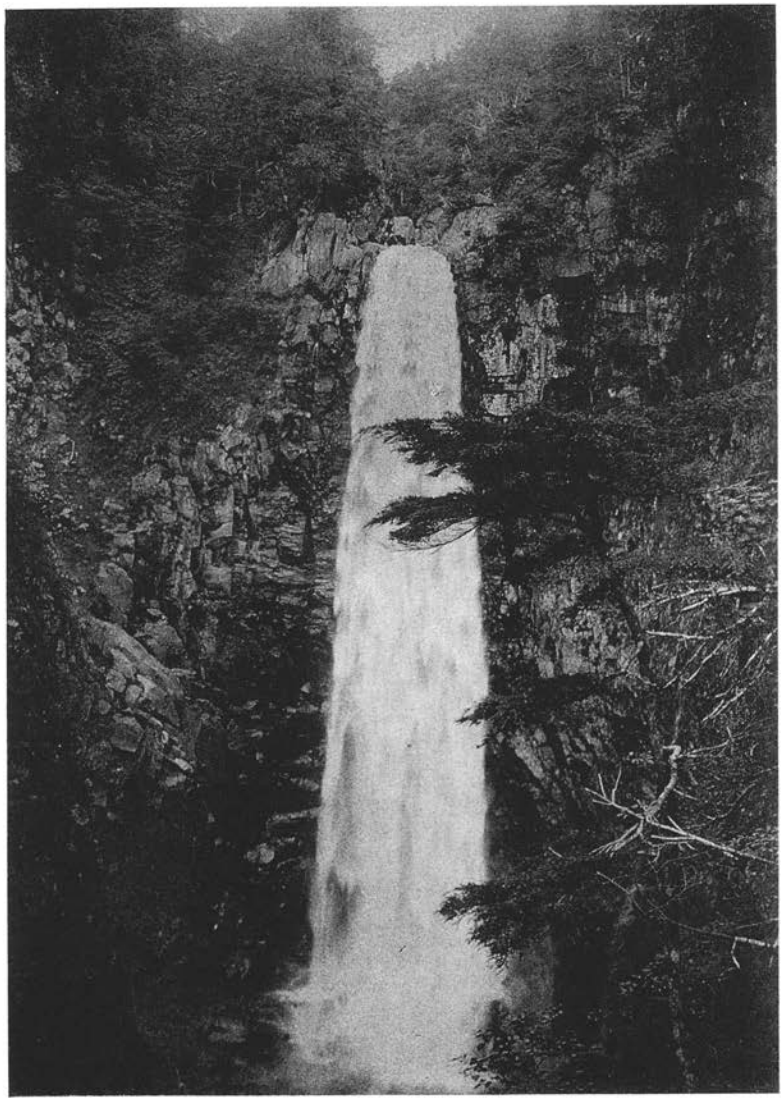
今迄のやうな、平和な谷地平の延長と云ふやうな氣分はなく、大きな岩石がゴツ〳〵して居て、河面の勾配も強く、水逆まきて滑を作り、景色自ら怒氣を含み、流は凄性を包んで下る。水聲は警笛に似てゐる。左岸コースは驕て前進不可能の箇所のため、山に登つて下る。瀧の下に出る。川原が廣くなつてゐるが、川の流れの樣子は前と何等變らぬ。と見ると小徑が下つて來てゐるのが見える。鷲籠山稻荷から來て小瀧の方へ行くものらしい。それを廻ると、左手の山の中に笹を分けてドン〳〵入つて行くのが分る。森林は閉けてゐるが、身丈程の笹が、葉に水を持つて、豪雨よりもひどく、我々の身體を濡らすので閉口する。到底避け得られない苦しみである。登つたやうに見え

ても、搦みながら登るので、身體は濡れるし、どこへこの小徑が導いて曳れるかも分らないので、引返して河原に出て進む。岩登りが一寸あつて、何氣なく進むと、小瀧の落口に達する。急に削り落された岩が足をすくませて了つた。一體この瀧の落差はどれ位か、一寸想像がつかない。恐る〳〵木につかまつて覗き込むのだが、落口の角で、水が白くなつてゐるのが見えるのみで、瀧壺などは見える筈はない。遠く下の方は、木々が小さく見える中を、白い流れが蛇のやうに見えて居る。一體、こんな處に、こんな瀧が實在するかと疑つた。

小憩すれば、降雨又漸く烈しく、下ることを、斷念して、そのまゝ前來た道を歸つた。すつかりぬれて、衣服は次の日の正午迄乾かなかつた。歸つて魚取り連中に話すと、獵人がその中に居て、小瀧は大瀧の三倍の落差がある事を告げた。でも水量は段違ひださうだ。

クヮッコウ鳥が朝早くから起すが、今日も雨天である。午後二時頃雨が上つて、善七が筍取りに、附近を漁つてゐる間に、鶯籠山稻荷へ通ずる徑を、一寸見に行く。小屋前の流れを渡つて、窪地を渡ると、徑が切つてある。相變らずのツガの森林で、下生への笹がひどい。鬱々たる谷地平の一線を劃せる上に、烏帽子、昭元の山々が見えてゐる。

それから小屋に歸ると、半時程たつて、善七が始めて谷地平を歩いて見たと云つて歸つて來る。二人で中吾妻へ行く道を見つけに、谷地平の方を歩いて見る。小屋の前の澤を下つて、出合から、上流に登つて行く。緩い流れが兩岸をひたしてゐる。左岸より右岸に渉ると一條の土が光つて、徑らしいものに見える。その徑を下つて見ると、



大　倉　瀧　　田部正太郎氏撮影

中吾妻から出る溝のやうな澤に入つて居る、占めたと思つて元氣で行くと、小屋掛けの跡のやうな廣場があつて、藪を衝いて登つて見たが、登り得る形跡はない。察するに、小屋建設前岩魚取りの小屋掛けの場所で、幾日も此處で頑張つて居たらしい。小徑を上流に行くと、すぐに見えなくなり、再び左岸に渡つて廣い河原を歩く。川向ふに、中吾妻から流れ出ると思はれる急流が見えてゐる。その急流を所狹しと、木が生えてこれも駄目らしい。

一町程にして家形五色沼の方から流れる川と、東大嶺よりの川とが出合つてゐる。此處は烏帽子邊よりよくスキーで下りて來る處で、前者を右俣、後者を左俣の澤と我々仲間で云つて居る。右俣の水量は左俣のそれの二三倍である。左俣に小徑がついて居る。ヤケノママに通ずと札に書いてある。これを進むと一町餘にして、徑が消えて無くなる。二間の崖を登ると、廣い谷地があつて、緩かなスロープをなして、細い花が處々にある間に、オニバセウが君臨してゐる。中吾妻の黑い尾根が遠く尾を引いて、ゆったりした心地である。徑を失つて探す。笹を切つたそれらしいものを見付けて、出合に戻り、右俣を登つて、靑い淵に岩魚が木片の樣に浮いてゐるのを見た。

此邊は私が昭和元年スキーで始めて下つて來て、これを谷地平であると思つた處で、その廣々として川原も廣いし、中吾妻、烏帽子等の山々は、あくま和やかで、水量も多く、嚴冬に河床の奏音のため、すっかり賦せられて居た處である。

右俣の澤を登る。水量は仲々減じさうにもない。この邊は雜木である。引返して崖を登ると、谷地平になる。晴天の日の谷地平は今日が始めである。平を圍む總ての山々が見える。

強い日光が綠色の芝生樣の草を照して、矮樹の申合せたやうな形の影が、幾つもその上にくっきりと、尾を引いて、此處の大小の沼もオニバセウの花が咲いてゐた。平はじぶ〳〵である。

小屋に夕方着いた。空は夕燒けである。我々は二日降られたので、もう一日の滯在の米量が殘されてゐるのみで、明日を樂しみにしてゐる。今日の小屋は、我々のみの占有で、皆歸つた。筍やニンニクの料理が相變らず續く。小屋の前の小石の上に寢ながら、中吾妻に日が隱れて、前の川面が漸く暗いときに、東吾妻の尾根續きの地肌が、美しく黃味を帶び、それが木の色と同じになるまで、氣長に見て居た。

何んと云ふ靜かな處であらう。

澤の水音が聞えるのみで、小鳥も鳴かない。

今日は始めて晴れる。拭ふた如き天氣である。小屋を六時に出て谷地平に上り、原を横切つて、崖を下つて、出合から左俣に入つて、笹の處々、切つた跡を目當てにどん〳〵進んだ譯である。始めこの道は左俣について登り、中吾妻と東大嶺との鞍部にとりついて、中津川を下つてゐるものとのみ思つてゐたが、それは全々見當違ひであつた。始め昭元の方へどん〳〵行つてゐるやうに思はれてゐたが、一度黑い栂の深い森林に入つて了ふと、四圍の山々の形態、風貌等は殆んど分らず、枝葉の隙より漏れ入る日光で、大體の方向が分る位であつて、その下生えの熊笹の切分けも不充分極るものであるから、それに注意して進むのみであるが、直接に中吾妻の北三角點〔一九一〇・二米〕の少し北寄りに向つて、すぐに切られてゐるやうである。

この中吾妻に登る道に、處々何千坪あるか分らぬが、大きな谷地が展開する。緩いロスープが長く續いて、こんな大きな谷地が地圖にも表はれて居らず、誰れにも訪れられないのをかこつ事もなく、平和の沈默を續けてゐる。

でも、この谷地から一歩森林に入れば、永久に明るみに出られない樣な氣持であるが、尾根迄の中に四五度、左手から右手に去る澤に出會はす。その時に北が開けて、始めて東大嶺の奥ふかさ、昭元の頑張りを見せつけられるのである。此等の澤は雪で埋められ、ノドをうるほす水量も充分にある。

熊笹が尾根迄の七八割通りベッタリに續くが、それから先は急に無くなる。それでも、灌木が煩はして、八時頃漸く尾根に達す。尾根近くは立木が相當倒れてゐるのがあり、七月も近い今日未だに、處々斑に積雪があつた。此處は相當に高い處らしく、東大嶺に通ずる北尾根はづっと落ちて行くのが見える。尾根を下つて、中津川の方へ入ると、下生えが忘れたやうに、全々なく、小徑が今迄よりは、綺麗についてゐる。暫く下る。森が開けて、北方が見えて、善七と佇む。西大嶺が見えて、東に西吾妻から、人形石に連つてゐる、尾根が見える。その尾根が殘雪を以つて、美しく燒き、尾根の上を徑が、走つてゐるのが白く見える。西大嶺の南面の森林が立派に見えてゐて、處々雜木も混つてゐるらしい。去年の今頃、西大嶺に立つて居たのだが、今日此處から西大嶺を見てゐる。西吾妻の出張ばりが、中津川の流れを追つてゐるやうでもあるが、中津川が追れもせず、只深い森林がべったりにあるのみで、それから流れ出る澤も、流も見えない。

徑を下れば又暗くなつて了ふ。連日の雨に祟られて、もう米もなく、今日は是非硫黄製煉所へ下らねばならぬ。

又元通りに小屋へ下る。十時に小屋についたが、途中中吾妻へ直接登るやうな道があるので登つたが、すぐになくなつた。

午後になつて小屋を出て、鎌沼に出て、それから製煉所へ出た。製煉所の夏は丁度地獄のやうな處で、硫黄の臭ひ、吹き出る煙、黄や赤に燒けた土。そして汚い小屋から、頭が一様に硫黄のためか眞赤になつた鬼のやうな男がブッキラ棒に立つてゐる。でもやはり、里の人、都の人より一層に、親切に、丁寧に、道を教へてくれ、米を頒けて呉れる。時に三時、幕ノ湯まで、一里八丁の下り道、二三尺幅の路を歩いて、四時前につく。

東吾妻の東を廻り、高山との間を下る。兩側は笹藪で、筍取りの連中が澤山にゐる。「森林を縫つて徑は急ぐ。」

幕ノ湯で、筍取り連中に占有されて、先へ行つて泊れと、番人の老人が云ふ。此の時、下手に道を聞いた爲め、道を迷つて、時を過し、温泉でその日泊る。一澤の村へ行く筈であつた。

次の日、幕の湯の疎末な温泉に六時頃別れて、相ノ峯の峠まで、今までと同じやうな笹の生えてゐる道を歩む。峠邊に小屋掛けがしてある。大きな始めて、綠の林を見た、山毛欅の木が生えてゐる。峠から吾妻湖がチラッと見える。峠を越えると今までの針葉樹が全々なくなつて、山毛欅のやうな綠の木が、枝を交へてゐる。下生えの笹もあまりなくなつた。小倉川迄の急な下りを終へると、急な流れが迎へる。川を渡つて上ると、それからはづっと下りで、山毛欅の森林をぶら〳〵と歩くとクスの木やその他の雜木林になつて、それから殖林地帶のやうな立木を下

ると、林が開けて、廣い下り目の芝草に燃えるやうな、廣原が續いて、蕨が一面に生えてゐる。六七軒の家がある。カバヤヂと云ふ名の木地小屋である。中吾妻の山足が廣い野原に碎けて、千草の花を咲せてゐる。中吾妻、東吾妻が南方に頑張つてゐる處など、一望の內にある。

一澤についたのが八時半、村童怪しげに見返り、鷄の生あくびに里心を感じ、久方振りで手に入つた煙草を手に、秋元湖へ遊びに行く。大倉川を渡つて、秋元湖のなごやかな、打ち寄せる波もない、湖面を眺めてゐる。小瀧で荒れた水が、湖に入るときは、ソット遠慮して。何んの音もない湖。村の子供が大勢カジカコをひいてゐる。湖邊に午前中費して了ふ。

午後、この平和な湖、村それから山々に別れて、暑い峠を越へて、木地小屋驛から汽車に乘つた。

あとがき

以上の紀行の如く、私はスキー以外のどの行にも、徹底的に降雨に祟られて了つて居るが、未だに計畫して成功しない澤渡り、卽ち大倉川下り、中津川下りである。それから仕事が忙しくて、未だ實現されない西大巓よりの早稻澤スキー行である。三つの面白さうなコースが取殘されて、時々幻覺と憧憬が私をかつて危く吾妻に走らしめんとしてゐる。

初夏の豊後の山旅

竹内亮

前がき

私は初夏の高原の趣を忘れかねて、本年（昭和四年）五月三十日から六月七日に亘り、久留米より豊後の日田に入り、杖立川の上流杖立（ツエタテ）温泉を一瞥して豊後玖珠郡に入り、九重山彙中の一峯涌蓋（ワイタ）山及びその北方に近く横はる萬年山の熔岩臺峯を登り、ついで由布院の温泉郷に入つて福万（フクマ）山の一部池ノ臺に登り、一旦別府に出て前後二回に亘つて鶴見岳及びその北方の諸峯幷に西方の高原を踏破した。

以上登つた山々の内涌蓋山だけは曾遊の山であるが、今度は未踏査であつた北側を上下し、更に中腹を巡る路の一部を辿つて、多年の希望の一部を滿たすことが出來た。萬年山は辻村氏（日本地形誌）も指摘された様に實に標式的な熔岩臺峯で、前萬年の熔岩臺を庇とし一千米以上の高度を以つて卓子狀の山姿を東西に約四粁の長さに横たへる様は實に一大奇觀且つ壯觀である。この山は古くから奇峯として知られ、豊後國誌には「高二里餘　周廻八里餘　四面絶壁如截　上平衍一里餘　有池魚多　躑躅滿山云々」の記事がある。

由布院は由布岳の西麓の盆地の温泉郷で、景勝を以て知られ、特に避暑地として近年大いに認められて來た地である。この地を根據として登り得る山々は、由布岳、鶴見岳等を初めとし、城ケ岳火山、福万山等があり、陸軍演

習場のある日出生(ヒジウ)臺高原へも遠くはない。私は今度は唯一泊して、翌日の午後は別府に出てしまつたので、充分山岳踏査の時間を持ち合はさなかつたが、福万山の一部の池ノ臺を登つて附近の山々の眺望にふけることが出來た。由布岳は先年一度登つたことがあるので、今度は割愛したけれど、鶴見岳へは別府から二度登り、しかも第二回目には北方のガラン岳から尾根づたいをして、全く別様な趣を體驗することが出來た。

以下少しくその山旅での見聞を記して見たい。旅行中參考に使用した地圖は陸地測量部發行の五萬分の一地形圖中、森、湯ノ平、宮原、大分である。

一　杖立より寶泉寺溫泉へ

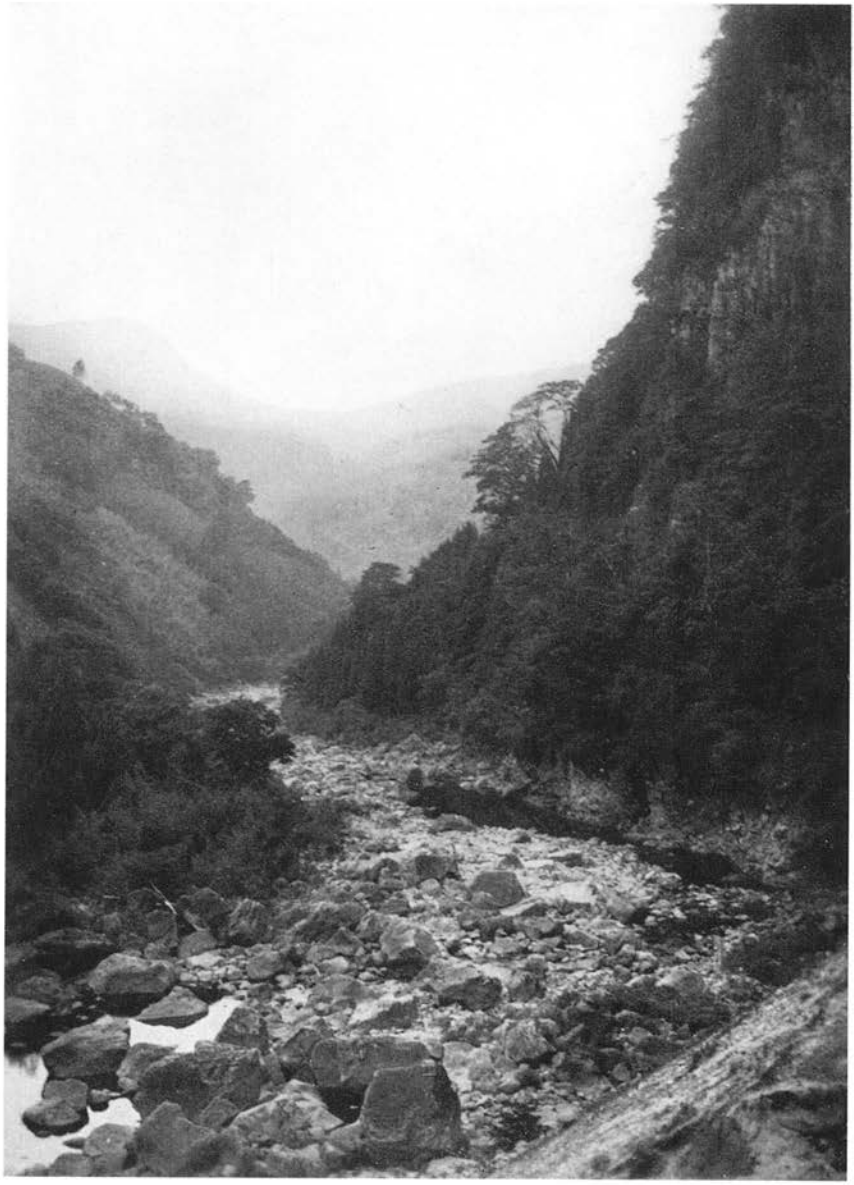
五月三十日。久留米で汽車を降りて午前八時四十分發の日田に向ふ乘合自動車の客となつて、雲の低い空模樣を氣にしながら耳納(ミノウ)山下の坦道をドライヴしたわけなのだが、車がトラクターを客用に仕立てた丈の大變なしろもので、とても座席にジッとして居れない位不愉快なひどいゆれ方をしたのにスッかり閉口してしまつたが、約一時間の苦行の後今度はボロ車ながら客用のフォードに乘りかへさせられてヤット一息ついた。午前十一時日田に着き、午後十二時二十分頃又乘合自動車で日田を發し、杖立川の溪谷を縫つて上流の杖立溫泉に向つた。今度の車はシボレーだつたので大分乘心地もよく、どうやら杉の造林美しい峽谷の景色を觀賞する丈の餘裕もあつた。由來日田の地は古くから林業地として知らるゝ處であるが、この杖立川の沿岸はその最も重要な一中心をなすものである。

午後二時頃杖立溫泉に着いたが、峽谷の急斜の中腹につけられた縣道から下に、流れをさしはさんで雜然とならし

ぶ見すぼらしい溫泉宿を見ては、初めの豫定では此所に泊つてもと思つた氣持も失せて、空模樣はもち直ほしさうだし、日も未だ高いしするので、そのまゝ右岸の直上に廣がる萬年山の南方の高原を横斷して、玖珠の谷に出ることにきめて行を急いだ。

杖立から約二キロを肥後の小國への道を南行して、左に急斜を横切る小徑を登り、秋原(アキバル)から田原(タバル)を經て龜石山(カメイシ)(九四三米)を左にしながら、水々しい綠の葉をひろげたワラビの多い草原の緩斜面を上つた。それを登り切ると、若葉の美しいクヌギの林を前景として、吉武山(ヨシブ)(九二七米)が聳えて來る。龜石山の東を廻つて谷に下り、更に登れば吉武山の麓に續く高原が北方萬年山麓へと廣々と展開する。迷ひ易い細い路がゆるやかな起伏のある草原を縱横に通じて居たが、私は萬年山を目あてに成るべく直線的に草原を横切つて進んだ。東方九重の山々は亂雲の中であつたが、西方は明るく晴れ渡つて、高原は西日に照らされて居た。未だ鶯も雲雀も郭公も鳴き續けて居たし、時々ほとゝぎすの聲も聞かれた。この邊の村人が駄と總稱する牛馬の放牧の群のいくつかを追ひこして、前方の約九〇〇米許りの臺地の頂に立つた。臺地の下は淺い廣い谷になつて居て、萬年山はその谷一つを距てゝ、その全容を折柄の西日を斜に受けて延々と横はつて居た。私はしばらくは我を忘れて卓子狀の怪奇な山容に見とれて居たが、やがて一しきり萬年の山側が明るくなつたと思つたのをキッカケに、急にたそがれはぢめたのにせき立てられて、一氣に下の谷に下り、小徑を東に取つて行程を急いだ。

高原が盡きる處に溫泉があつて、ジメジメした凹地には水蘚が多く、中央に小池があり、水中にはジュンサイやヒルムシロが生え、水邊には涉草の類が生えて居た。附近は歩く度に振動する浮島狀の地帶で、一歩は一歩水蘚か



杖立川の上流　　竹内亮氏撮影

らにじむ冷たい水の中に足首迄も埋まつた。斯樣な濕地は、この東に更に二個處許りあつて、狹い溪流によつて互に連絡して居たが、いづれも池などはなくて稍規模の小さいものであつた。

愈々玖珠の谷の斜面にかゝる處に牛番小屋が一軒あつて、後の崖からは冷たい湧水が滴たり落ちて居たのに充分に渴を醫して、ほとゝぎすの鳴音を後にしながら、最早スッカリ暮れた坂路を急いで下つて行つた。幾度か路をさへぎる牛群に驚かされながら、松の木立から杉の下暗に移り、やがて相狹(アイハサン)間の部落に出て、約二キロの路を玖珠川沿ひの道路に出で、更に東に入る小徑を飛び交ふ螢に氣をとられながら、寶泉寺溫泉の泉屋旅館についたのが午後八時半頃であつた。

二　涌蓋山の北尾根の登降

五月三十一日。早朝欄によつて東方を望むと、ツツジの植込み美しい庭を距てゝ、前方の丘の農家の屋根の上から、涌蓋山の美しい圓錐の頂部が覗いて居る。初めの豫定では今日は萬年山へ登るつもりで居たが、かく間近かに涌蓋山を望んでは矢も楯もたまらなくなつて、今日は涌蓋山へ登ることに決めてしまつた。

さてこの寶泉寺溫泉と云ふのは、南山田村の玖珠町から肥後の小國へ通ずる道から東へ數町入つた丘陵の間にある小溫泉場で、泉屋、湯元屋及び橋本屋の三軒の溫泉宿があつて、いづれも各別な浴槽を持つて居る。この內泉屋は他の宿屋より少しく離れて入口の方に位置し、自から高等旅館を以て任じて居て、宿の人の話では地方の自炊客は餘り歡迎しない樣な口振りであつて、夏休みには東京の學生さんも避暑に見えるといふのが大變な自慢らしかつ

た。しかし室や待遇等は餘り感心もしなかつたけれど、瀧をなして注ぐ豊富な清澄な湯はうれしいものであつた。かゝげられた分析表によると鹽類泉で、神經衰弱症や胃腸病に卓效がある由で、別に頑固な神經衰弱症で殆んど醫師に見はなされたといふ人の全快感謝狀がかゝげられて居た。

午前八時輕裝して宿を出で、湯元屋、橋本屋の前を通つて、近道をして山越えに串野に出で、森の後の清冽な流れを渡つて地藏原高原へのゆるやかな坂路を登つて行つた。路の兩側は新綠のクヌギ林で何とも云へない軟かな美しさが續く。林がつきて草原に出ると間もなく涌蓋の全容を望む形勝の地の一本松の下の峠の茶屋に辿りつく。茶屋は數年前こゝを通過した時分には未だなくて、何のかゝはりもなく樹蔭に涼を求めたものであつだが、今の樣に茶屋が出來てしもうと、今日は無人でしめてはあつたけれど、何となく氣おくれがしてこゝを素通りして、右手の草原の丘を登つて午前十時四十分、鞍部を距てゝ中岳（一〇一〇米）の丘をすぐ前に望む處で可憐なハルリンダウの花咲く草間にリュックサックを下ろした。こゝは中々景勝な位置で、南に涌蓋山の圓錐の全容を仰ぎ、北には遠く大岩扇山（六九一米）小岩扇山（六四〇餘米）、寶山（八一六米）等の美しい熔岩臺峯が續き、その左手には萬年山の壯大な熔岩臺が横はつて居る。東はすぐ下が地藏原高原で、一隅に大きな貯水池が望まれた。九重の主要部や由布岳一帶は、薄雲に包まれてこゝからはよくは見えなかつた。約二十分許り休んで後、南に急斜面を下り、ワラビの多いカシハの疎立する草原を、涌蓋山の北側の斜面のズット西寄りの尾根を目がけてゆるやかな傾斜を登つた。野火に燒けた黑松の疎林をぬけて淺い谷に入り、右手の斜面から尾根にかゝつてヒタ登りに登つて行つた。地藏原から這ひ上つた高原名物の野火の燒跡はこの邊一帶をなめて、谷の闊葉樹林を殘しつゝ尾根許りを傳つて上に燒け

進んで居た。九重山彙の植物景觀に於て草原が多いことについての原因は、この野火の害による第二次的なものがかなり重大な役目をして居るらしいことについては、今度の登山の觀察によつても大いに了解する處があつた。登ること約三十分、十一時四十五分に山腹を一周する巡視路に出た。氣壓計によると一一八〇米を示して居る。この邊から大分時候の後れて居ることを示し、フモトスミレ、キスミレ、ミツバツチグリ、バイカイカリ、キンパウゲ等の花が未だ盛りであつた。アケボノスミレは花は既にすんで居たが非常に多く生じ、下方に生ずるのに比して全形が小さく且つ葉が非常に厚いのを見た。登るに從つてミヤマキリシマやイハカガミの褥狀群落が美しい花をつけて居て、最早頂近いことを示して來た。小笹の斜面をふんで十二時五十分頂上の東部に出た。頂上は可成廣い草原で南北に狹く、東西に長い平地をなし、東と西とに各々小祠がある。頂は今や春の最中で、小笹の間にはミヤマキリシマやイハカガミの花が滿開し、キアゲハが微風にもてあそばれながら飛んで居た。遠くは春らしいうす雲が立ち罩めて近くの星生、三股の峯々さへハッキリしなかつた。

午後一時三十分こゝを辭して西部に移つた。こゝは直下に硐湯（ハガノユ）、岳湯等の溫泉を近く望み、その先は肥後の小國一帶が廣々と續いて居た。晴れ渡つた日であれば、大阿蘇の全觀を恣にすることが出來るのであるが、今日はその望はなかつた。少しく西側に下ると一面にイハカガミの御花畠で、ミヤマキリシマを混じ仲々に美しい。こゝから斜面を北側にからんで登路に合し、下山の途についた。萬年山一帶が白雲に包まれたと思つた間に、最早こちらの尾根も冷たい風と共に白い霧がかゝりはじめたが、間もなくそれも晴れた。午後二時五十分山腹の巡視路に合し、谷を大きく迂廻しつゝ東にまはり、森林をぬけて草原の斜面に出た。こちらの斜面の草原はススキやアザミの類が

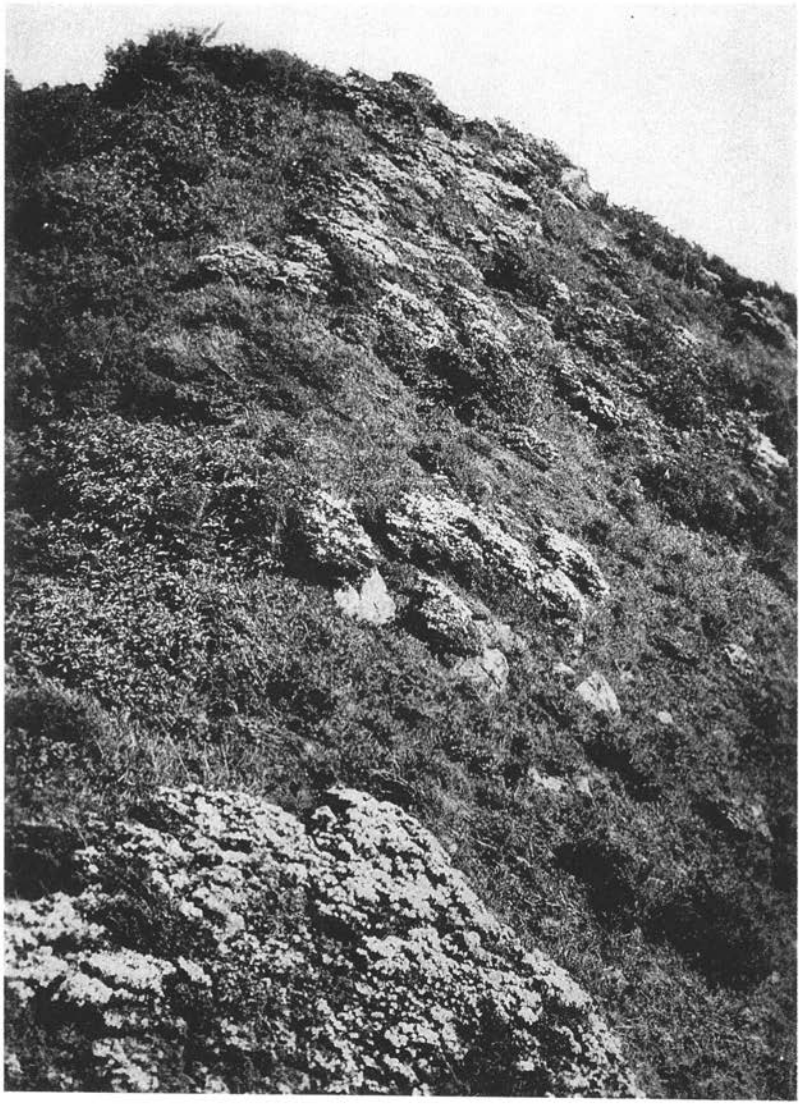
多く、初めの登路とは大分趣がちがつて居て、草間にはヒメウマノミツバやサクラスミレ等が見えて居た。三股山を望む邊で、電光狀の細徑が下の落葉闊葉樹林に導かれるのを見て、その路を降つた。森林は可成伐木され、下にはシヒタケの栽培が行はれて居た。こゝの榾木の置き方は私が昨年豐後の酒呑童子山での草原で見たの（本誌二三年二號）と同じ方法で、密に立てならべて短冊狀に集め、斜面に多く並列させてあつたが、森林内なので上に小枝を蔽ふ樣なことはしてなかつた。

森林が盡きると草原になつて、地藏原の部落が間近く望まれた。防火線に沿つた小徑を西に辿り、更に草原を横切つて淺い谷を對岸に越し、中岳の東端の鞍部に出たのが午後四時二十分であつた。

こゝから下に開く谷沿ひのとかく消えがちな小徑を辿りながら、朝通つたクヌギの間の坂路に合し、串野に出て泉屋へかへりついたのが午後五時二十分であつた。夜は宿屋の前の植込みの間を飛び交ふ無數の螢の美しさに夜の更けるのを忘れて見入つた。

三　萬年山

六月一日。晴れ渡つた朝であつた。今日は餘分な荷物は一まとめにして人夫に豐後中村驛に屆けさす事にして午前八時四十分泉屋を出た。一昨夜通つた路を逆に相狹間に向ふ。小國街道から西に小さな峽流に沿つて、杉の造林地を右にして路が通じて居た。相狹間の部落附近で、溪流を埋めて一面に咲いて居たミヅタガラシの白花は、朝の日を受けて眼もくらみさうであつた。小流の左岸の山裾の杉の下路を、彼これ一キロ許りで黑猪鹿への路から分れ

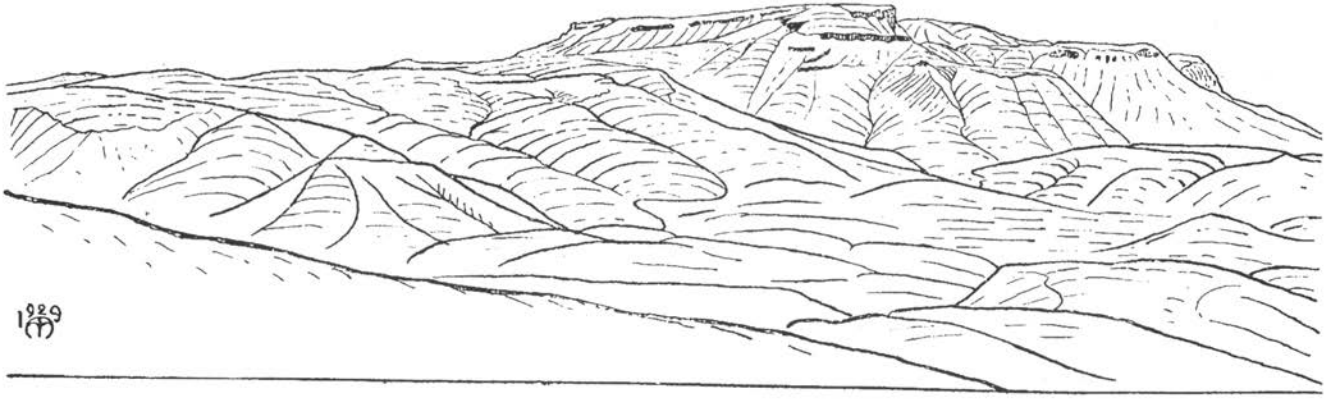


ミヤマキリシマの群落　　竹内　亮氏撮影

て左の小徑をとつて爪先上りに登る。眼界が開け初めて相狹間の方を顧みると、谷一杯の美しい杉の木立を前景にして、涌蓋山の圓錐がコバルトにかすんで高く美しく聳えて居た。萬年山の主峯は見えないが、この邊で俗に前萬年と呼ばれる主峯直下の九〇〇米内外の臺地の一部の南側の急斜面が懸崖の黑斑を見せて、頭上を壓して聳えて居るのを右にしてゆるやかな路を登つた。一帶は新綠美しいクヌギの疎林で、木立の斷間は水々しいワラビの綠が一面である。登るにつれて木立は疎になつて草原續きになり、萬年山の大卓子狀の主峯が見え初めると、間もなく地圖に八二五米の獨立標高點の記號のある下園部落に至る峠の頂に出た。こゝには今一すじ吉武山の方から前萬年の頂面を横切つて玖珠町にこえる小徑が交叉して居るので、十文字と云ふ名がある處である。非常に眺望のいい處で、綠色美しい高原つゞきの北は眞近に萬年山の主峯が延々と横たはり、涌蓋山は一きは美しく南東遠くそびえ、吉武、龜石等の平らたい丘が南西の一端を限つて居る。ゆるやかな起伏の高原には、遙々と小徑が通じて居るのがいくつも見え、放牧の所謂「駄」の群が遠近に望まれ、空には雲雀の歌が高く、クヌギの木立には郭公の鳴聲が斷えなかつた。

折よく「駄」の見廻りに來たらしい村人に路をきいて、眞近くそびえる萬年の主峯に向つた。ゆるやかな斜面の草原を横切つて小さな谷沿ひの小徑を辿り、その源流迄さかのぼつて岩の多い一しきり急な草原の斜面を攀ぢると、低い岩壁の斷續する急斜の下に出た。一寸した岩をよぢると最早上は萬年主峯の平坦な頂面で、間もなく一一四四米の最高點に出たのが午前十一時五十五分であつた。一等三角點の石標がある。

この地點は頂面の東端に近い處であるので、西の方は隨分遠くかすかに望まれる程である。平坦で幅も中々廣く、



九重山彙の涌蓋山より北西に萬年山を望む

三百米位はありさうで、最高點の近く丈でも可成な廣さの運動場がいくつもつくれさうに見えた。一帶の草原でミヤマキリシマの小さな株が點生し、丁度花盛りで非常に美事であつた。一等三角點がある丈に、展望は中々大きく、玖珠、日田及び肥後の阿蘇諸郡の山々が望まれるらしいのだが、遠くは雲にかすんでよくは見えなかつた。北の山麓には萬年山の支峯の格で、伐株山(六八五米)の奇峯がその平な頂面を見せて居た。草原性の頂面の端は急に岩壁に移つて、岩上にはリヤウブ、ヤマグルマ、ツタウルシ、イヌツゲ、イヌビハ、ガクウツギ、スノキ等の森林が見られ、岩かげにはモミヂカウモリが多かつた。

食事やら、スケッチやら、撮影やらに意外にひまどつて、午後一時下山の途につく。平坦地を少しく東に行つて、南側の岩壁の切れ目の草原の急斜面の小徑を下の前萬年の臺地に下り、十文字から登つて居る小徑を辿つて玖珠町方面に向つた。直上には萬年山全峯の東端の百米に餘る大岩壁が柱狀の骨組嚴かにそびえ立つて、人を威壓するかの樣であつた。

前萬年の頂面は地圖でもわかる樣に高さは九百米少しであるが非常な美事な平坦面をなし、三に分れて南西から北東に並んで居る。私は路のまゝにはじめ南西の平坦面に下り、且淺い谷に下つて更に中央の九四一米五の三角點が地圖に記してある最大の平坦面の西の一端の約九百餘米の地點に登つた。この邊一帶はミヤマキリシマが非常に多く、特に東側にかけて殆んど全地紅を呈する程の壯觀を呈して居た。こゝから路は急に谷側を下りはじめ、杉の造林地をすぎて間もなく谷底の平坦な草原地に移り、更に實に美事に伸びた赤松を混じた杉の林に導かれた。森林を通して寶山の寶珠形の山が高く聳えはじめると、間もなく粟野の部落に出た、時に午後三時三十分であつた。こ

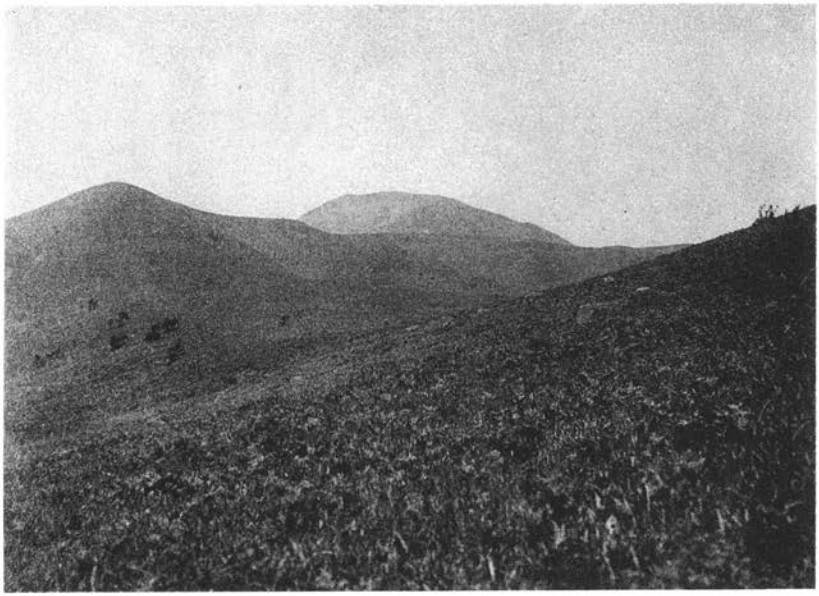
ゝから玖珠川沿ひの縣道に出て、時々疾驅して來る乘合自動車の砂塵を浴びながら、約五キロの道を豐後中村驛についたのは午後五時十五分であつた。

午後六時廿八分發の大分行の終列車に乘り七時半頃北由布驛に下車し、約六町の道を湯ノ坪の紫明館に入つた。氣味の惡い程清澄な溫泉に汗を流して、夕食後は由布川の流れに沿つて飛び交ふ名物の螢の美しさを賞した。

この宿屋は向側の日の春と共に湯ノ坪區にかける一流旅館で、建築に一工夫がしてあつて三四室づゝ一團をなし一團毎に稍隔離される樣につくられ、いづれも各別の廊下で湯殿と連絡して居るので、家族的滯在客等には眞に好都合であると思つた。私がついた時にはすぐ宿料の程度をきゝに來たので、規定の中庸をとつて三圓といふことにしたが、食事等は餘り感心しなかつたたけれど、他の夜具や浴衣等は大變淸潔であり、室內の調度等も相當吟味してあつた。それに今一つ私のうれしかつたことは、非常に閑靜且つ涼しいことで、夜の更くると共に蛙聲のみさえて何等の雜音もなく、冷氣は身にしみて、六月はじめだといふのに厚い夜具が少しも苦にならなかつた。

四　由布院より別府へ

六月二日、早朝眠覺るなり直ぐ三階の大廣間に登つて見た朝の由布院盆地は初め名物の霧に包まれて居たが、やがて次第に霧が晴れはじめる頃は、首の痛くなる程の大きな仰角で聳ゆる由布岳の肩から朝日の光がさしはじめた。朝食には未だ暇がありさうであつたので、東の方の由布山にズット近い嶽本の金鱗湖に行つて見た。これはかつて由布院盆地が湖水であつた頃の名殘として殘された、湖とは名ばかりの小さな池で、由布川の水源をなして居る。



（上） 池ノ臺の尾根より福万山を望む　　竹内　亮氏撮影

（下） 池ノ臺の池と雨乞岳（右）及び城ケ岳　　同

周圍には溫泉が湧き、一隅に杉木立があつて神祠が見えて居たが、何となく周圍が雜然として居て、金鱗湖の名を聞いて想像して居た美しさはなかつた。

午前九時輕裝して福万山に向つた。飛岳（九二四米）の麓から日出生臺への道路を辿る。南方に城ケ岳（一一六八米）、雨乞岳（一〇七四米）の一群が近く聳ゆる右手には、思ひがけなく九重山彙がなつかしの姿を連ねて居た。杉木立を左に赤松林を右に、爪先上りの坂路を登れば、間もなく草原の臺地になつて、左手は福万山のスロープが逼り、前方には立石山（一〇五九米）が聳え、右手には由布岳が例によつて高く高く天空を摩して居た。若杉部落で路に分れて、左側の竹藪の間の細徑を登つた。竹藪の陰には最早花はすんで居たがスミレが非常に多く、ナンザンスミレ、アフヒスミレ、ナガバスミレサイシン、アケボノスミレ、ケマルバスミレ、コスミレ、シハイスミレ、アカネスミレ、ナガバタチツボスミレ等殆んどこの邊に產する種類の大部分を網羅して居た。竹藪を拔けると緩な草原のスロープになり、やがて傾斜が一しきり急になつて、間もなく岩の突出た約七百米許りの尾根の一端に辿りついた。ナダラカな臺地狀の尾根は、ワラビが一面で、その向ふに福万山の頂部がのぞいて居た。こゝから福万山の頂へは容易に行けさうであつたので、先を急いで前方の約千米許りの一峯を目あてに登り、その頂についたのが午前十時半頃であつたが、福万山頂へは未だ往復二時間位を要する樣に見えた。今日は午後の汽車で別府へ出る豫定であるし、その前に宿屋で少しく荷物の整理をする必要もあつたので、福万山頂への望みをすてゝ、南方に近く頂上に池を湛えて居る池ノ臺を經て下山することにした。

左に由布のスバラシイ尖峯を仰ぎながら、シロバナスミレやハルリンダウ等の花のチラホラする急斜面を下り、

やがてミヤマキリシマの美しい花の多い平坦地に出て、間もなく池ノ臺の池邊に來た。

池ノ臺は約千米許りの臺地で、一寸した凹地をなし、中央に小さな淺い池を滿えて居るが、五萬の地形圖には凹地の記號だけで池の記入はない。池は略圓形で遠くで見ると水がキレイに見えたが、近よつて見るとナマぬるい濁つた水であつた。池を周つて凹地全體に亘り、帶狀に植物生育相の劃然たる變化が見られたのも興味があつた。卽ち最外周はワラビの多い普通の草原で土壤の腐植質の量も少なく、水分含有量も少ない乾いた感じがするが、池に近づくに從ひ土壤中の腐植質の含有量が增加し、水分の量もズット增して、內周ではほゞ飽和狀態となり、殆んど全部腐植質許りの堆積となる。植物の種類もこれに應じて變化し、外周にはキンポウゲ、ムカゴゼリ、チドメグサ等が生じ、次にアヤメを主とする帶が續き、その內周はスゲ屬植物が多く、北海道で所謂ヤチ坊主をつくり又ニガナ、ミヅオトギリ、アヤメ等を混じて居り、その內側は水蘚が多く水邊迄殆んどシャウブの純群落となり、猶幾分ニガナ、ミヅオトギリ、アヤメが見られた。又水に浸たる處には、ホシクサの一種が多く生じて居た。植物の生育狀態や土壤の性質等から考へると、この池の水面は期節的に廣狹がある如く、又水深が淺いので水蘚層の浮島狀的生長は見られなかつた。

午後十二時廿五分池邊を辭して、臺地狀の尾根を南に向つて下り、草原から赤松の疎林下の急坂に導かれ、杉木立をぬけると間もなく由布院盆地の乙丸部落で、北由布驛はこゝからすぐであつた。別府へ電報が打ちたいと思つて驛に行つたが、公衆電報の取扱ひをしない許りでなく、すぐ近くの郵便局にも電信の設備がなく、公衆電話による外ないと聞いて局に行つたが、日曜で午後は取扱はないとの挨拶に局の電話以外に電話のない由布院のことなので、

大いに困惑の狀を示した處、局長も氣の毒がつて局專用線によつて別府と連絡してくれ、用を達すことが出來た。小さなことだつたが、この時の局長の好意は私には此上もない嬉しいものであつた。

驛から宿迄の一キロたらずの田圃道は、高原地とは云へ、さすがにタマラナク暑かつたが、一浴して汗を流して欄により、樹陰の涼風を迎へた氣持は又格別なものであつた。

午後四時十四分發の汽車に發車間際にかけつけたが、大分迄の約二時間は實に退屈極まる厭な道中であつた。それにこの線の列車には便所の設備がなく、乘客は驛の短かい停車時間を利用して驛構内で用をすませ、間に合はない人はデッキからすますと云ふ風で、しかも誰もこれを怪しむ人もないと云ふ仕末であつたのは、田舍の人の無頓着とは云へ、流石に滑稽な樣でもあり、氣の毒でもあつた。

五　雨の鶴見岳

六月五日。溫泉に惠まれた別府の背後を周る障壁は、南東高崎山（六二八米）から起つて、北西ガラン岳（一〇四五米）の半圓を畫いて聳え、別府側に急斜面を向けて居るが、この半圓の北半は鶴見岳からガラン岳に至る稍大起伏の山地であるのに反し、南半は高原性でゆるやかな波濤狀の丘地が起伏し、志高湖（シコウ）の樣な池がこの間に湛えられて居る。別府からこれ等の山地や高原への登行は、歩いても一日程であるが、殊に最近別府由布院の乘合自動車が鶴見、由布の南麓を通過し、定期に運轉して居るので、これを利用すれば著しく便利である。

この日早曉鶴見の頂は晴れては居たが、雲稍低く天候大いに憂ふべきものがあつた。しかし思ひ立つたことなの

で運を天に委せて午前八時別府の宿を出て、流川通りから乙原への山路をとつて行つた。路は間もなく別府市水道貯水池を下に見て、約三十分で乙原の瀧の下に出た。この瀧は約百米の懸崖に二條となつてかゝり、甚だ清麗な感じのする瀧である。右に登つて瀧の上に出で、間もなく傾斜のゆるやかな淺い谷の草原に出で、登りつくせば鶴見岳を正面に見る尾根に出た。尾根の防火線づたひに右に黑松の造林地、左に草原を見ながら少しく南に行き、細徑を求めて黑松林内を横切り、志高湖邊に出た。これは湖とは名許りの水の淺い汚ない池で、低い丘陵にとりかこまれ、池邊は牛馬の放牧場になつて居た。しかし湖邊に立つと由布、鶴見が北西間近く聳え、非常に景勝の地であつた。

由布の頂には怪しい笠雲がかゝり、右に支峯オシカ岳（約一二二〇米）を控えた鶴見の山腹には雨雲がしきりに去來し、先程から少しづゝ降りはじめた雨も、細徑を別府、由布院間の道路に沿つた鶴見登山口の火男火女（ホヲホメ）神社の石鳥居の前に出た頃は、可成ひどい降りになつて居た。鳥居をくぐつてしばらく登れば、森嚴な杉木立の奥に火男火女神社の社殿があつた。今年は社殿の修築が完成して數年前來た頃とは打つて變つた壯嚴な神域となつて居た。社殿の傍の營林署で建てた指導標によつて、裏のヤマモミヂの多い森林下の路をヂックザックに登り、それを登りつめると草原性の豪地となり、鶴見の主峯のスロープが雨雲に包まれて行手をふさいでそびえて來た。間もなく主峯のスロープにかゝつてヂックザックの路を雨にぬれながら雲霧の中を登つた。露岩が多くなり岩上にはミヤマキリシマの花が美しく咲くのを見て少しく登れば、稍平坦な地に出たが、その先の小高い地點を登れば一三七五米の頂であつた、時に午後十二時半。頂は草原性で草間に三等三角點の石標があり、處々に露岩が横はつてミヤマキリ

写真 竹内 亮 江藤 穣

沼 井 田 と 池 の 蓼 ノ 池

シマの花が美しかつたが、北東側にはヤシャブシを主にした森林があつて、非常な急斜面をなして居た。雨がひどいので數米先さへ見えがたく、眺望など以ての外のことであつた。雨の中で立ちながら雲食をすまして、急いで細徑のまゝに北西側に下つた。しばらくはミヤマキリシマの花の美しい急斜面で、露岩の上には未だ花には早いがミヤマキンバイが多く見られた。急斜面が終ると稍平坦な草原となり、更に落葉闊葉樹林の被ふ佛頭との接觸點の尾根に出た。こゝで小徑は二叉し、一は西に、他は北東に下つて居たので、試みに後者をとつて樹林下の急坂を下つたが、しばらくで谷の源頭らしい處で硫氣の臭氣の强い崩壞地に出て止まつてしまつた。雲霧が深いので何もわからなかつたが、鶴見岳の硫氣孔のある處がこゝであつたのだ。路がなくなつたので、仕方なく引返へして前者の路をとつて行つた。しばらく尾根を傳ひ、やがて急斜面を南側に下り、黑松の造林地に沿つた草深い小徑を辿つて、午後二時四十分鶴見岳と由布岳との裾合地の戰川と由布川との分水界をなす地圖の八二六米の地點に出た。

この前後から雨は幾分小やみとなり、時々日ざしさへ見えたので、このまゝ由布院道路に出て、乘合自動車をとらへて別府に歸へるのも興味がないと思つて、急に新らしい計畫を立てゝ、こゝから北方に戰川に沿ひ塚原の高原に出でガラン岳の鞍部をこえ大迂廻をして明礬溫泉に出て別府に歸へることに決めた。

由布岳の北麓塚原部落附近は、海拔七百米の坦々たる大高原をなし、西は日出生臺に續き、東は內山、ガラン岳の西側のスロープに及んで居る。中釣、塚原等の部落の附近には少し許りの水田や畑地もあるが、大部分は綠なす大草原のひろがりである。晴れた日高原をとりまく山々の姿は、いかに壯麗に仰がれるかは、想像するだに心のおどるものがあるが、この日は雲厚く山々をこめ、雲間から高原へ悠然と引き下ろされた山々のスロープの綠なす曲

線の美しさが又一入であつた。

中釣の上方で右塚原溫泉と記した指導標を何氣なく見すごしたまゝ左の路をとつて、後で右をとらなかつたことを悔いたが致し方のないことであつた。卽ち右を行けばガラン岳の爆裂火口趾の下の塚原溫泉（地圖には溫泉の記號のみがあつて名は記してない）を經、ガラン岳の南の花棚峠をこして明礬溫泉或は別府に通ずるのだが、左の路はガラン岳の北の臺地を大迂廻して明礬溫泉に出るのであつた。

中釣から約一キロの間は非常に平坦な臺地で、それがつきると淺い谷に下り、再び爪先上りの路となり再び平坦な路で、ガラン岳の北方を迂廻して行く。この邊から大變ひどい雨となつて少しも遠望がきかず、まだ四時前といふのに陰暗として夕暮の如く、しかも先程馱馬をひいた數人連れの村人が明礬の方からこして來るのと可成はなれてすれちがつたきり人一人來る氣配もなく、雨は益々ふりしきつて地圖をひろげて位置を按ずることも出來ない仕末に、大變心細くなつたが勇を鼓して進んだ。小さな堀割を通過すると路は急に下りはじめ、草原はやがて赤松やクヌギの林地に移り、畑地が開けて間もなく明礬溫泉につくことが出來たのが午後五時であつた。雨は益々ひどく今は肌迄スッカリ透してしまつて、靜止して居たら寒さに堪え切れないので、乘合自動車の來るのを待たずに雨の中を別府に急いだ。豪雨の中の約三里の路は途中でスッカリ暮れて別府の宿についたのは午後八時に近かつた。

六　ガラン岳より再び鶴見岳へ

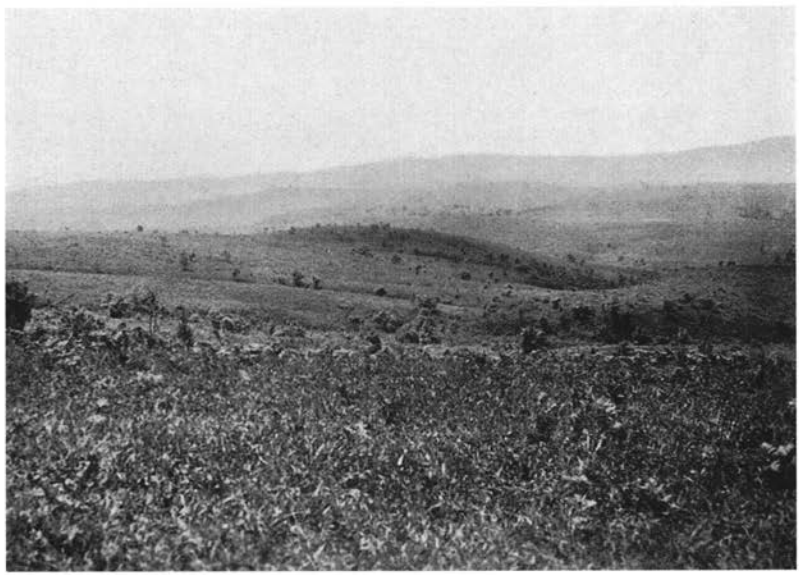
六月七日。先日の鶴見岳より西側の高原を明礬に出た時に、ガラン岳から鶴見岳への縱走の興味を覺えたので、

今日はそのコースをやることにした、午前十時半に乘合自動車の客となつて明礬溫泉に向つた。鶴見岳一帶の山々には白雲が去來して居たが、海側は奇麗に晴れて天候の惡くないことを示して居た。午前十一時廿分明礬溫泉の入口で車を降り、少しく戻つて小橋を渡り、左に入つて山路にかゝる。小さな地獄の傍から高臺地の草原を横切り、少しく下つて大平山を前面に見る處で別府から花棚峠への路に合した。こゝから少しく登ると、大きな爆裂火口趾らしい黃褐色の岩の露出した懸崖を上にした白茶けた土砂の斜面にわら葺屋根の小屋がたくさんならんで居て、別府溫泉湯の花採取場との立札がしてあつた。こゝから先は路は急に登り、午後一時ガラン岳を右にして花棚峠の頂に出た。幸に霧は晴れはじめて遠近の山々は由布を除いて皆漸く頂を出しはじめて居た。

峠は海拔九百餘米、石コロの多い草原地である。北に近くガラン岳が聳え、南は內山へと尾根がつゞいて居る。先づ防火線沿ひに北方ガラン岳の頂に向ふ。西側に巨大な爆裂火口が物凄い口を開いて居る下に、塚原溫泉の建物のあるのを見ながらゆるやかな斜面を登り一時十五分頂上に立つた。山頂一帶は平坦な草原で、僅かの起伏があり、處々に淺い凹處が見られる。最高點は露岩の重疊した處にあつて、上に五坪許りの平地があり、三等三角點の石標があるのみで他に何もなかつた。眺望は中々廣いが特に花棚峠の彼方に續く內山、佛頭、鶴見の尾根つゞきを一眸に收め得るのに甚だ形勝の位置にある。一時四十分頂上を辭して一旦峠に戻り、內山へと向つた。はじめしばらくは尾根の防火線づたひであつたが、尾根がせまくなると防火線がなくなつて、細徑が灌木の間を斷續する。東面は概して非常な急斜面で、處々に懸崖や崩壞地があり、大部分は落葉闊葉樹の密林であるが、西側は傾斜がズット緩で、樹林と草原とが交雜し、下方は先日通つた塚原一帶の大草原に及んで居る。約一二〇〇米の高度邊迄はやゝ急

に登るが、それからは殆んど平坦になり、草原の間にヤシャブシ、サハフタギ、コバノミツバツツジ、リヤウブ、シロザクラ、ゴマキ等の叢林が斷續し、處々藪くゞりをやりながら三時二十分内山の一二七二米の山頂に立つた。こゝは小さな岩の隆起で、南には佛頭(約一三五〇米)と鶴見が手にとる樣に聳えて居た。こゝから非常に急な下りになり、三時五十分舟底と稱する鞍部に下り、更に急斜面を登ること約十餘分で佛頭の北の一支峯約一三〇〇米の地點に辿りついた。西には由布岳が依然として頂を厚い雲に包んで近く大きく望まれた。この邊から佛頭の主峯の北半部にかけ、西側は一面にミヤマキリシマの群落で、折柄の西日を受けて滿開の花叢は一入美しく照り輝やく許りであつた。佛頭の主峯から鶴見岳へかゝる鞍部迄は終始灌木の藪で、通過には可成骨が折れた。

鶴見の主峯にかゝつて五時四十分再びその頂に立つた。先日の雨にひきかへて、今日は遠く迄も晴れ渡り、西日を受けた山頂の影は山麓に大きく引かれて居た。近くは由布岳、城ケ島及雨乞岳遠くは九重山彙を望み、別府の市街も指顧の間にあつた。約十分を山頂に費やし、急いで下山の途につき、火男火女神社の傍の森林で薄暗の内にしばらく植物採集をしてからは、半ば駈足で由布院道から堀田溫泉への間道に入り、別府に急いだけれど、別府の町に入つたのは、鶴見の頂に晩く迄殘る殘照も全く消えた午後九時前であつた。(四・八・二〇稿)



(上) 北方より望める鶴見岳　　竹内　亮氏撮影
(下) 万年山南方の高原　　同

神流川雜藁

高畑棟材

神流川は利根の貫流烏川の支川であって、其下流の鬼石町附近には、小藤博士の研究によって、倍々その眞價を認められるやうになった、彼の有名な三波石（秩父青石）を產するし、又中流から上流へかけては、地質學者の所謂山中地溝帶を形成してゐることによって其名夙に世に著れてゐる。

然るに蓊鬱たる深林に蔽はれた水源地の幽谿は、附近に是といふ程の峻岳が無い爲めと、交通の不便といふことなどに禍ひされ、近頃まで一般登山者の興味を唆る迄には到らなかったが、荒船、兩神、甲武信岳などの方面から觀た水源地附近の低い乍らも蒼古な山容や、いやに小皺の多い、いはゞ紛糾極まりないとでもいふべき、谷筋の姿に心を牽かれる爲めにか、一部の登山者の間には幾何か注目されて居ったらしく、本誌第十六年第三號（奥上州號）に「晩春の神流川上流へ」續いて第十七年第一號に吉岡氏の「神流川雜記」が發表されてから間もなく、大島氏なども、その熱愛してゐた荒船、神津（カウヅ）牧場から歩を進め、此水源地を繞ってゐる上信國境の山々に沿うて逍ひ歩かれたやうである。

私が此地方へ足を蹈入れた抑もの始めは、大正二年四月上旬父や伯父の一行に追蹤して下仁田から磐戸、鹽ノ澤峠を經て濱平に到り、殘雪の大神樂澤を中途まで遡って引返し、歸路は万場を經て鬼石町附近の溪流に三波石を賞

し、新町驛に出た時であるが、其頃の此みなかみの佇ひは實に靜寂な、武陵桃源の境とは恁うした處でもあらうかと思はれるくらゐな幽境であつた。そして其當時の子供心にも、大神樂澤の小尾根から望んだ、殘雪豐かな淺間の山容は、今尙ほはっきりと腦裡に刻まれてゐる。

然し大正九年の晩春、私が再び同地を訪れた際には、土工らしい者の姿を多く見かけたので不吉な豫感に襲はれ、此幽境の行末を想ふて可なり憂慮したが、それは單なる杞憂に終らず、大正十四年十月に、奥秩父方面から三國山を踰えて神流川本谷に下られた霧の旅會會員の小高秀一氏に據ると、此幽玄な水源地にも遂に慘虐な「自然破壞」の魔手が伸びてしまつたやうであるが、如何に人煙稀少を誇る桃源境も、恁うなっては其末路や推して知るべしである。(霧の旅第十五號會員通信欄參照)。

偖て此神流川水源地附近は、陸測五萬圖(十石峠及び金峰山)を見ても判る通り、實に小皺の多いややこしい處であるから、細かな山澤の名を覺え込むのは勿論容易な事では無からうが、せめては其重立つたものだけでもよいから知つて置きたいものだと、二度目の遊行(大正九年)の折には、能ふ限り所謂土民測量(土地の人から附近山澤の名稱其他に就て聞き質すこと。)に努めたが、確めて置きたいと希ふ山澤に就ては、里人の稱呼や意見が區々であつたので、大した收穫も無く歸京した。

ところが全く偶然の機緣から水源地の古繪圖(原本)を手に入れたので、同地に就ては多少の知識を得た故、是に基いて少し許り書いて見ることにする。が然し此圖を主とし、陸測五萬圖を從として記述せんとする私の圖上談山は、勢ひ古繪圖に忠實ならんとするの餘り、其處に種々な矛盾が生ずるかも知れないが、是は何分諒承あらんこ

とを豫め御願ひしておく。

而して古繪圖に先立ち、手近に在る二、三の古書等を渉獵して、神流川に關する記事を拔萃して見るのは、强ち無益なわざでもあるまいと信ずる。

先づ神流川の古名を索めると、續太平記に感納川、武田三代記に神奈川、豆相記及び和漢三才圖會に神野川、國史略及び逸史に鉋川、管窺武鑑に神名川、岐岨日記に甘奈川、回國雜記にカミ長川、河越記にカミノ川。そして現今の神流川といふのは關東古戰錄に出てゐる。

古名の詮索は此位にしておいて、次に『利根川圖志』卷一の利根川全圖（三枚表）を見ると、其附記に

神流川ハ甘樂郡濱平ノ山中ヨリ出デ南甘樂郡十石峠横見峠砥山杖立ヲトケ山大峠西東御荷鉾山等ノ溪流ヲ幷セ北武藏國秩父郡ノ境嶺志賀坂峠赤岩峠坂丸峠坂峠土坂峠ノ諸水ヲ幷セ下テ上武二州ノ境ト爲リ三波川ヲ幷セ漸北流シテ烏川ニ合ス。

『上野國志』には

神流川。濱平村ノ山中ヨリ出武上ノ界ヲ過今里村ニ至テ屈シテ北流シ緑野郡淨法寺ノ東ヲ經テ那波郡角淵ニ至リテ烏川ニ入ル此川石美ナリ。

『上野名跡志』卷三には

○山中　神流川水源　三波石

南牧ノ南ノ山間東西十里許ヲ山中ト云。神流川ハ濱平村ノ山中ヨリ出ヅ武藏志料信濃地名考等ニ信州佐久郡金峰

○神流川雛菊（高畑）

山ノ東ニ三峯アリ、千隈川荒川神流川ノ水源ナリ神流川ハ東北ニ分ルヽト云（信濃ノ地ニ發テ上野ニ出ルカ）後上野志上野名跡考ニ神流川ハ甘樂郡濱平村ノ山中ヨリ出武藏上野ノ堺ヲ過今里村ニ至テ屈シテ北流シ綠野郡ニ出ツト云此今里村ノアタリ水涯ニサンバ石トテ奇石アル也。後上野志ニ三波石或ハ三巴石或ハ三番石一番二番三番三ツノ大石アリ數四十八神流川ノ上今里萱蕪村ノ水旁ニアリト云。神流川モ甘樂郡ヨリ出レバ甘樂川ナルベシ。云々。

また明治十九年九月出版の内務省土木局編纂『六十五大川流域誌』第壹區利根川流域烏川（本文第三頁）の條には

神流川（南甘樂郡猶○稽の誤植なるべし。高畑。原村ニ發ス○河線二十里）

と出てゐる。頗る簡單ではあるが、流程を示したものは此書の他には見當らなかった。

因に改正上野國全圖には、十石峠の東側の黑川（神流川支流）水源と覺しきものに「神流源」と傍記してあるが元より正鵠を得たものではない。又『新篇武藏風土記稿』秩父郡卷七十七には、

神流川。水源ハ郡ノ西信濃上野ノ三國堺ナル山谷ヨリ出テ上野國甘樂郡山中領ト號シ村落凡二十ケ村ノ内ヲ東流スルコト十里許、夫ヨリ本領ノ北邊ナル矢納村ト甘樂郡護（讓の誤？高畑）原村ノ間ヲ二里許モ郡界ヲ流ル此邊マテヲ土人ハ稱シテ三波川又ハ神流川ト呼ケル夫ヨリ北流シテ兒玉郡上阿久原村ト上州綠野郡鬼石村トノ間ニ注キテ神流川ノ名アリ。云々。

とあるが、是を見ると神流川と三波川とを混同してゐるやうである。

偖て愈々古繪圖に移るが、これは美濃紙十六枚を繋合せたものに描かれ、縱は四尺餘横は六尺餘、正德四年に稽

原村に於て作製されたものであるから、彼の「黒部の祕密圖」(登高行第參年參照)の如き、作製年代不詳の歎きを見ずに濟むのは難有い。卽ちこの正德圖(便宜上斯く呼ぶことにする)は、圖の右下に流麗な行書草書で、

繪圖之通山內相違無御座候　以上

正德四年午五月

山中楢原村　名主　伊右衛門

濱平　御鷹見　庄兵衛　同　甚兵衛　同　伊右衛門　同　安右衛門

此度御代官樣山內御見分被遊□鄕上御吟味之上御留メ山境ト百姓山境御定被遊候ニ付則境判仕候向後御留山大切相守可申候。以上

正德四年午九月

楢原村枝鄕濱平

御鷹見　庄兵衛　同　甚兵衛　同　孫右衛門　同　安右衛門

惣百姓代　三右衛門、同　彦兵衛、同　助之丞

楢原村　名主　治郎右衛門

と明記してある。而してこの正德四年を、日本歷史年表に據つて調べて見ると、

正德甲午年。人皇第百拾四代中御門天皇御宇、將軍德川家繼(紀元二三七四年西曆一七一四年)

と出てゐた。卽ち本年(昭和三年)から遡ること二百十四年。藤田家譜に徵して當時の甘羅(樂)郡邑主は、藤田英

賀なる人であることが判った。

そして正德圖は彼の有名な正保圖よりも六十年近く新らしいものであることが判り、尙ほ此の正德圖の最初の持主が楢原村の名主の治郎右衞門なることは、同圖裏面に「上州楢原村濱平、持主黑澤治郎右衞門、四枚之內」と記されてあることによって明瞭であるし、特に四枚之內と明記してあるからには、當時同圖を四枚作製して代官、名主、御鷹見、惣百姓代が各一枚宛を保管したものであらうことは想像に難くない。

次に正德圖に顯れてゐる山名を揭げ、以て臆測交りの圖上談山を擅にしてみる。

船　艫（高岩ヨリ四百間）
高　岩（蟻ケ峠ヨリ高岩迄九百間）
蟻ケ峠（神流川水元）
三　國（蟻ケ峠ヨリ三國迄千百四拾間）
棒切峠（三國ヨリ六百間）
魚留峠（棒切峠ヨリ五百四拾間）
鵬　峰（魚留峠ヨリ千五百六拾間）
葡萄峰（鵬峰ヨリ四百六拾間）
薇　萱（葡萄峰ヨリ五百六拾間）
諏　訪（薇萱ヨリ千百四拾間）

松木尾根　（諏訪ヨリ五百貳拾間）

先づ三國からはじめるが、是は陸測五萬の金峰山圖幅に在る獨立標高點一八二八・二米の三國山卽ち三國峠のことであって、可なり古くから知られてゐる割合には、上野國志其他の上州に關する古書には徵すべきもの尠く、唯纔かに高橋周楨著『上野鑛泉誌』濱平鑛泉の條「近傍勝區」に、

三國山。西境ニ聳ユル高山ニシテ信濃武藏兩國ニ跨ルヲ以テ此名アリ南ニ大蛇坐山北ニ嘯山アリ共ニ眺望佳ナリ

と出てゐるのを探しあてたのみである。然し飜つて『信府統記』を見ると、

三國山。武藏上野信濃三國ノ界ニテ卽チ峰通ヲ境界トス是ヨリ落合梓山村出口道迄ノ間山中國境知レス此三國山ハ蟻ケ峠ヨリ辰巳ノ方。

また『信濃國地誌略』上卷佐久郡の部に、

三國嶺ハ梓山村ニ面起シ、西ハ高天原山ニ連リ東北ハ武藏上野ノ國界ニ跨ル、故ニ三國嶺ト稱ス。

而して本誌第十一年第一號（秩父號）所收『武藏通志』國司嶽（コクシガタケ）の條下には、

三國山（ミクニ）。高五千五百尺西は同上（前文を受けて單に同上とあれど同上とは卽ち「信濃梓山村に界す」のこと也。高畑）北は上野南甘樂郡楢原村に界す三州に跨るを以て此名あり字猿市より上る十八丁以上同村（大瀧村のこと也。高畑）中津川に屬す。

武藏通志に至って、初めて其高さが示されてある。また『新篇武藏風土記稿』秩父郡古大瀧村の部には、

三國山。御林山ノ內ニテ武州秩父郡信州佐久郡上州甘樂郡三國ノ界ナリ柄本ノ西七里餘ニアリ。

同じく「中津川」の部には、

三國山。居村ノ西四里許ニアリ卽チ上信武三ケ國境コノ山ノ頂ニアリ信州佐久郡梓山ヘ通フ路スシナリ。

尙ほ『武藏演路』秩父郡の部には、

三國山。信上武三州ノ界也。

といふ至って簡單な記事があった。渚平ではこの三國山を小三國（コミクニ）、奥秩父の甲武信岳を大三國（オホミクニ）と俾稱する山は、前記の奥上州號（四八頁）で述べて置いた。

三國の西方に蟻ケ峠といふのがある。金峰山圖幅の三角點一九七八・六米の峰がそれであることは、本誌第一秩父號所載木暮さんの「奥秩父の山旅日記」五六頁末行に明記してあるので知るを得たが、信府統記の記事だけでは一寸その位置を判定し兼ねる。卽ち同書は、

蟻ケ峠。これい峠ヨリ辰巳ノ方上野國ニテモ同名。

といふてゐる。蟻ケ峠の西北方獨立標高點一九七〇米の峰と覺しきものへ、正德圖は高岩と冠してゐる。元々正德圖と陸測五萬圖とは、しっくりと符合せぬ上に、里人の言頗る曖昧であるから、慥にそれとは斷定し兼ねるが、大正九年に私を諏訪山へ導いて呉れた案内者の高橋福松が、「高岩は椽平の窪の奥（いり）にあるで」と言ってゐたことから推測したものである。船艙は「高岩ヨリ四百間」といふから、高岩の北方の一八二〇米の標高を有する峰（十石峠圖幅の三角點一六三九・四米の峰の西南方に在るもの）であらう。

前記三國の北方一六四〇米の圖を有するのは棒切峰、其東北方一五二〇米の圖を有するのが魚留峰に該當する。

鷹峰（ミミヅクミネ）は十石峠圖幅に「秩父大瀧村」とある其秩の字の北方一六八〇米の峰（万場圖幅に跨る）であらうと思ふ。而して万場圖幅の三角點一六五八・一米を中心とする二、三の尾根を、葡萄尾根と總稱し、其中の一峰を葡萄澤ノ頭と稱へるやうに聞いてゐるが、それが一六五八・一米の峰に該當するかどうかは不明である。正德圖は一つの峰を描顯し、それに葡萄峰と冠してある。

以上八つは上信又は上武の國界をなすが、以下の三つ即ち薇萱、諏訪、松木尾根は全く上州に屬してゐる。

此三つのうち諏訪山の位置は五萬圖に明記してあるし、其記文は前記奥上州號に掲げて置いたから、茲では敢て蛇足を加へぬ。正德圖の薇萱なる稱呼はどの尾根に附けられたものか、里人の間にも異說が多くて推測に苦しむ次第であるが、正德圖を基として是を十石峠圖幅に求めると、どうやら諏訪山から東南へ派出された尾根に附けられたものらしく思はれる。松木尾根は五萬圖の諏訪山三角點から西南へ走る尾根の總稱で、尾根の末端が神流川本谷に臨む邊りに、死小屋といふ餘り芳しからぬ小字名が附いてゐる。

因に前記奥上州號で述べて置いた御巢鷹山（正德圖には鷹巢山となつてゐるが里人の多くは今も御巢鷹山と敬稱してゐる）とは、諏訪山北方の岩尾根の或特定の場所を稱するのであつて、特立の一峰ではなく、正德圖には「鷹巢山。立（縱）三百間上横三百間下横四百間立二百拾間」と稍々丁寧に傍註が施してある。また鷹巢山（巢鷹山）の如何なるものであるかは、新篇武藏風土記稿秩父郡の部に出てゐる。

巢鷹山。山ノ名ニアラスソノ昔巢鷹ヲトリ獻上セシ山ヲ云今モ年々ニカナタコナタニ巢ヲカクレハ土人見出シ次第ニトリテ獻上セシコトトナリヌ

といふ簡單な記事によつて、其概略が判る。

大神(甘)樂澤は此岩尾根から發源してゐる。是を曾て奥上州號で、股引澤（股引澤とは私の聞違ひであつて正德圖を一覽するに及んで物引澤の正しい事を發見した故茲に訂正しておく）の水源の様に記したのは全く私の大きな錯誤であつた。

偖て試みに富士見十三州輿地之全圖を取出して檢すると、三國山から十石峠の間に磯峠、尾倉岳、コレイ峠などいふのがあるが、尾倉岳を除いては信府統記にも其名が出てゐる。尤も十三州の磯は蟻の誤で、蟻ケ峠の正しいことは同圖よりも遙に古い正德圖を見れば直ちに了解することができる。

尾倉岳といふのは十石峠闊幅の小倉山に他ならず、同山に關しては大島氏が詳細なる記文「小倉山」を、本誌第二十年第一號（秩父號第二）雜錄欄に掲げて居られるから、それを參照されたい。また序乍らコレイ峠といふのは、信府統記に「これい峠。峰通國境十石峠ヨリ辰巳ノ方上野國ニテモ同名」と出てゐるものであつて、秩父の古禮山の様にサハギバウシ（コレッバ又は山ガンビョウとも云ふ由）の方言「コレ」から導かれたとかいふ稱呼であるや否やは調べ漏した。十石峠闊幅でいふと、群馬縣多野郡上野村字中ノ澤から、長野縣南佐久郡南相木村三川に到る小徑が、上信國境の凹所（獨立標高點一七〇五米）を踰えてゐる其凹所に附けられた峠名であるが、現今では殆ど荒果ててゐる由を、大島氏は「小倉山」で「現今通行者絶え路痕なき程なり云々」と述べて居られる。私もそれと同じ意味の話を濱平で耳にした。

次に水流其他に關し、正德圖を主とし、是に里人の話や私の貧しい經驗知識等を織交ぜて、少し許り述べてみる。

それには順序として先づ濱平に言及するが、同所は十石峠圖幅を見ても判る通り楢原村最奥の部落であつて、正德圖を見ると人家が七軒（神流川左岸に五軒右岸の大神樂澤が本流と落合ふ附近に二軒）描いてある。現今ですら人家僅に十餘戸の僻陬であることから推測しても、正德圖に描かれた戸數は眞正なるものと見て差支へあるまい。同所の神流川右岸に、現今では鑛泉宿（經營者、高橋藤十郎）が一軒ある。此宿の事は既に奥上州號に略記して置いたが、其後『上野鑛泉誌』を見ると「濱平鑛泉冷」として左の記事があつた。

(1) 泉質　鹽類泉（分析溫度未詳）

鹽素、最多量。那篤母倔、多量。加倔母、少量。加倔叟母、稍多量。麻倔涅叟母、稍多量。硫化水素、少量。游離及和合炭酸、少量。

固形物總量　七・七七

(2) 效　能

胃弱。慢性胃腸加答爾。血液不良（下略）。

(3) 沿　革

開基未詳十九年（明治）八月楢原村高橋彦平鑛泉規則ニヨリ許可ヲ得テ營業ス。

(4) 位置氣候

南甘樂郡ノ西南部楢原村字濱平ニアリ群山四圍ヲ環擁シ神流川ノ水源三國山ノ東麓ニ位シ山水奇絶風光明眉殊ニ空氣清涼幽邃ノ地ナリ。

(5)　近傍勝區(略)。

因に泉質は鹽類泉とあるが、先年父が二合壜に詰めて歸京し、是を然る專門家の手に依つて分析させた結果に見ると、硫化水素や炭酸類を最も多量に含有してゐたやうであつた。

この濱平から神流川水源迄の間に於て、正德圖に委しく流程の示してある澤は左の七流である。

神流水元　(ふたの澤落合ヨリ九百八拾間)

ふたの澤　(水元ヨリ落合迄三百四拾間)

棒切澤落合ヨリ七百貳拾間

棒切澤　(水元ヨリ落合迄六百四拾間)

魚留澤落合ヨリ六百四拾間

魚留澤　(水元ヨリ落合迄千九百四拾間)

鵰澤落合ヨリ三百六拾間

鵰澤　(水元ヨリ落合迄二千六百間)

大蛇倉澤落合ヨリ四百四拾間

大蛇倉澤　(水元ヨリ落合迄千九百六拾間)

葡萄澤落合ヨリ六百六拾間

葡萄澤　(水元ヨリ落合迄二千四百間)

死小屋ヨリ是迄六百八拾間

此他にも流程不明の澤の名が五つ六つ擧げてある故、夫等をいちいち拾ひながら行くと、先づ鑛泉宿の傍に落ちてゐるのが井野澤（五萬圖の鑛泉記號と溜平の平字の間を過て本流に注ぐもの）。鑛泉が湧出すといふ積りか、今では湯ノ澤と俗稱してゐるが、元より正鵠を得たものではない。其直ぐ南方の虎王神社（五萬圖に神社記號あり）の傍で本流に注いでゐるのが大神樂澤（一に大甘樂澤に作る）。虎王神社から仰ぎ見えるトヤノツムヂ（三角點九七六・二米）の西南方の家倉（岩記號ある獨立標高點一二五八米の峯？）から發してゐるのが江戸澤（現今では井戸澤或は井ノ澤に作る上州訛イ（キ）とエの混用に基くものならむ）といひ、前記の松木尾根から岐れて、虎王神社の鎭座する處まで山脚を伸して來てゐるのが大多尾根。江戸澤の落口を右に見乍ら稍々遡ると小徑は本流と少し離れ、それと同時に右岸の大きな岩の横手を行く樣になる、五萬圖にも出てゐるが正德圖にも明記してある長岩といふのが是である。樹深い左の崖上から瀧の樣な小澤が落ちてゐる、五萬圖はともあれ正德圖には水線記號は在るが名は附けてない。長岩から少し行くと小徑は五萬圖では本流を渡つて左岸沿ひについてゐるが、私は是は知らない。現在は江戸澤落口の少し上流で右岸に移つてから暫くの間は、其儘の右岸沿ひである。而して五萬圖の本谷の本字の北側の、本流が少し曲つてゐる其曲り角（右岸）へ松木尾根の岩壁（五萬圖の一三〇〇米附近に岩記號あり）から急奔してゐるのが手水澤。手水澤と本字との間で手水澤の南十數間の處に流れてゐる小澤が物引澤であつて、先年私は此澤から諏訪山へ登つた。本字の南方で本流と落合つてゐるのは火打石谷である。而して正德圖の火打石なる峰を五萬圖上に索めると、どうやら三角點一四四四米の峰に該當するらしいが、高橋福松は此名を知らぬらしい。江戸

澤と火打石谷迄の間を板小屋澤と俾稱する。五萬圖の本谷の谷字の附近(右岸)を大渡と稱し、左岸には可なり立派な澤が注いでゐるが、正德圖にも其名は示してない。イリの窪の下流に當るからイリノ澤とでも稱したいが、江戸澤の近くに、入澤といふ至って短い有るか無いかの小澤が存在する以上、此名はちと附け惡い。

本流は此邊で大きく曲る。そして松木尾根の西側に沿うて本流に注いでゐるのがオノクボ澤(正德圖おの久保澤に作る)、オノクボ澤と松木尾根末端の死小屋の岩記號との間の對岸(左岸)で本流と落合ってゐるのを犬遣谷と稱する。續いて同じく左岸に挾岩といふ小字が在るが位置は不明。

丁字小屋といふ小字は、諏訪山の西微南の標高線の數字一三〇〇と記した邊りから下流へかけての稱であって、同名の澤はこの標高線數字附近から發して本流へ注ぐ傾斜の急な、極く短い小澤である。雨後の二、三時間は水も流れやうといふ程度の澤であるが、其對岸(左岸)に押出して來てゐるのは、上信國境の船舘から分派された三角點一六三九・四米の岩尾根を盟主とする深林美事な尾根であって俾稱クヒノクラといふ。奥上州號所載木暮さんの「利根川水源地の山」に、「オヒは顯れるクヒは隱れることで、卽ち隱顯する意味であるから」(一二三頁三——四行目)とある故此クヒノクラといふのは或は「隱れ岩」の在る尾根とでもいふ意味の方言ではなからうか。正德圖を見ると此尾根の先端が神流川本流に臨む邊りに、栃久保といふ小字を示してある。また栃久保の西微南に方る平(五萬圖でいふと一四八〇米乃至一五〇〇米附近)は菅平(スガダヒラ)と呼ばれてゐる。

丁字小屋から少し遡ると左(右岸)から一つの澤が顯れる、正德圖を檢する迄もなく、一見直ちに葡萄澤であるといふことが判る。往年陸地測量部の一行が濱平からの神流川遡行に際し初めて野營した澤であるとは、當時一行の

驥尾に附したといふ福松の話であった。葡萄澤の右岸の小棚といふ小字は、五萬圖の諏訪山の南、岩記號の下の標高線數字一五〇〇と在る邊りをいふ。

大白谷は鵬峰の西方、五萬圖の獨立標高點一三七六米の尾根から本流迄の間を云ひ、名の如うな大きなものでは決して無いが、對岸(左岸)の標高線數字一〇〇〇とある邊りで本流に注いでゐる大蛇倉澤は中々立派な澤である。五萬圖には何故か岩記號を省略してあるが、此澤の發源地には大蛇倉(正しくは嵩ならむ)といふ美事な岩壁が峙(そ)り立ち、高岩も是も諏訪山方面から良く望むことができる。正德圖にも赤味を帶びた御納戸色で塗上げた、見るからに物凄(?)い岩が描かれてある。尙ほ此「大蛇」と「倉」との關係に就て、本年(昭和三年)六月十日、霧の旅會創立十周年記念大會で、木暮さんが『山名に就いて』といふ講演をされた折、兩神山に關する山名考證の序に非常に有益な且又趣味の多い解釋を施されたが、玆では割愛しておく。この大蛇倉澤が本流と落合ふ附近には、水岩穴といふ小字がある。

大白谷から更に本流を遡ると、間もなく左に鵬澤が顯れる。鵬峰の南側に發源し、西流して本流に注ぐのがそれである。元は實に幽邃な澤であったが、今は昔日の俤を見る術もないであらう。

此澤の合流點と略相對する左岸に、どっしりと迫って來てゐる尾根は、高岩から分派された俗稱「椽平の窪」であるが、正德圖には此名は見えない。尙も進むと神流川は竟に二つに岐れ、左は支流の魚留澤、殆ど直角に右に折れるのが本流である。本流を少し遡ると左から棒切澤が合流する。三國山(三國峠)へは此澤を登るのが順路であるし樂でもある。

本流は軈て又二に岐れる。金峰山圖幅を見ると、同圖「多野上野村」の「多」「野」の間を過り、更に「上野村」の野字を差挾んで左右に岐れるが、左は支流の「ふたの澤」で是は三國に發源し、右卽ち蟻ケ峠の東側に位する御幣平（ゴヘイダヒラ）（蟻ケ峠より東に位する國境上凡一八二〇米の所から北へ向って派出された尾根（「多野」の野字「上野村」の村字の左傍を走つてゐるもの）の或地點の稱）から發するのが、神流川の源泉である。正德圖を見ると、御幣平「神流川水元」の傍に、「水元ヨリ蟻ケ峠迄七百貳拾間」と記してある。

因に正德圖の御留メ山といふのは、東は葡萄峰、薇賣、諏訪山を經て松木尾根に到り、同所から更に死小屋迄（同圖には松木尾根ヨリ死小屋迄八百三十四間と示してある）を限り、西は船艦から始めて、犬遣谷（船艦ヨリ犬遣谷迄二千九百四間）に終る尾根を限りとし、其以南卽ち上信及び上武の國境に到る間の山谷を總稱したものである。

以上で、正德の古繪圖に基いた神流川水源地に於ける山谷の概況は、一先づ述べ終つたが、自から實査せぬ個所も多いこと故、思違ひや臆斷も少くはないであらうと思ふ。同好の士の御叱正を得れば幸である。

（昭和三年八月稿）

（附記）――正德圖は「鵬」をミミヅクと訓ませてゐるが、漢和大辭典、言泉、國語大辭典其他を渉獵しても、ミミヅクに該當すべき如上の漢字は索め得なかつた。

双六谷を中心として

冠　松　次　郎

其一　コグラ谷から笠ケ岳へ

内容　船津まで　廣河原まで　コグラ谷を上る　笠ケ岳登山　打込谷を下る

船津まで

八月十五日。午後六時五十分上野發、翌十六日午前六時五十分富山驛着、同八時三十分篭津驛、同十時五十分船津着。

北陸線の能生、梶屋敷間が、この十日の豪雨の爲、所々に大きな崖崩れがあつて、線路が埋沒されたり押し出されたりしたので汽車は不通となり、この間は汽船の連絡によることになつた。

十五日の朝上野驛へ行つて見ると、十六日午前中に開通の見込としてある。

私は十五日の夜行で發つのであるから、十六日の曉方能生附近にかゝることになる、僅のことで汽船の厄介になるのかと思つてゐたが、夜になつて又上野へ來て見ると、「能生梶屋敷間只今開通す、十五日午後四時」としてあるのを見て殊の外喜んだ。

高崎あたりから寢込んで、長野と直江津で一寸目を覺ました。それから糸魚川までは、夢の中を汽車が走つて行

つたので、能生も梶屋敷も意識せずに通過してしまつた。

十五日の夜から大雨で、十六日の晝近くまでは雨は斷續した。

然しその割に、黑部川も、勿論片貝川も、早月川も水は隨分少なかつた。

右手を見ると濃密な山雲は搖蕩して、大きな山の裾合に、黑部峽谷は深くつゞまつてゐる。

午前七時に富山驛へ着いた頃には小降りとなつたが、笹津線へ乘かへ、汽車が動き始める時分には、又梅雨のやうな雨は根强く襲つて來た。

笹津からは自動車へ乘り換へて、飛驒路へ、神通川の峽間を曲折して行く。

笹津から延長される汽車、富山から高山を經て岐阜に連絡する鐵路は、笹津から越飛國境の猪ノ谷まで開鑿せられてある。この鐵道が出來れば、高い交通費を拂ひ、種々の不便を忍ばずに、飛驒の山川を巡遊することが出來るやうになる。

猪ノ谷で自動車を乘換へて、富山縣のものから岐阜縣のものに乘じて、午前十一時に船津町についた。

神通川筋も水力電氣は盛である。蟹寺、猪ノ谷の大發電所の外に、跡津川にも、高原本流の奥にも宮川にも、幾ケ所かの發電所が建てられてある。そして双六谷もそれ等の電力會社の興味の焦點になつてゐるのも是非はない。

私は船津へ着いて驚いた。この春の大火で、大部分類燒したと云ふことは聞いてゐたが、舊時の有樣と變り果てたのを、まのあたり見ると誠に氣の毒に堪えなかつた。

あのしっとりとした、頑丈な清楚の家並と道路をもつてゐた、山國の町家と云ふ氣分の溢れてゐた町は烏有に歸し、トタン家根のバラック式の家が軒を並べて、まだ建て揃はない有樣も、悲慘な面影を宿してゐる。主要な部分が全滅になつたことを思ふと、莫大な損害を蒙つたのに違ひない。

茂利（しげり）と云ふ宿屋へ投じて、そこで待ち合せる筈の人夫のことを聞くと、まだ來てゐないらしい、私は二階へ上り中食を使つて休息してゐた。

天氣は漸く上つて、强烈の眞晝の日射はトタン屋根に反射して、風まで生溫く、中々蒸暑い。

午後二時になつて辨二と忠太郎がやつて來た。今朝の大雨で出發が後れた爲、御待たせをしてすまなかつたと申譯を云ふ。

私は來がけに、神通川の水の大きいのに驚いた、赤く濁つた激流を見て、源流地の飛驒では餘程降つたに違ひないと思つたが、實際高原川の上流では非常の豪雨で、燒岳から「出し」（押し出し）が出たので、水は眞赤になつてしまつたと、辨二達は云つてゐた。

辨二は船津に親類があるので、出來ればその方の用達をしたいから、今夜は船津へ泊つて欲しいと云ふので、時間がほしかつたが、さうすることにして、米、味噌の調達を命じた。

廣河原まで

八月十七日。午前七時船津發、同七時三十分中山（この間約三里半、自動車による）、同九時五十分金木戸、午後一時釣橋に

○双六谷を中心として　冠

よって左岸にうつる（途中中食を認む）、同六時廣河原小屋へ着泊。

起きて見ると雲が多い、然し朝燒がないので大したことはあるまいと思つた。

今日は是非廣河原まで行きたい、早く双六谷へ入りたいと云ふ考へで、船津から双六谷の入口の中山の駒止橋まで、自動車を別に仕立てゝもらつた。そして午前七時に船津を發ち七時半には中山につき、橋の袂で車を乘り捨てゝ金木戸に向つた。

自動車の車掌も運轉手も、路傍に車を片寄せて、少し魚釣りでもして遊んで行かうかと云ふなり、かくして持つて來た釣竿とびくを持つて谷の方へ降りて行つた。暢氣なものだ。

東京なら科料ものだらう。私等が道を通つて行くと、彼等はもう下で石傳ひに大きな淵を目がけて糸を投げてゐる。

午前八時十分前橋の手前にくると、人家の傍に簡單なカゴ渡しが架かつて對岸に道が通じてゐる。この邊では向ふ三軒は谷の彼方になる、自分の畑へ行くにも、知り合へ用たしに行くのにも、近道にこのカゴ渡しを用ゐてゐるのである。

閑寂な谷筋の道は、人家があつても一向に人の氣配はしない。たまに小兒が二三人遊んでゐるのを見ても、山のやうに草を背負つて來る人達を見ても、それはこの谷の自然の一點綴で、谷を繞る風物のリズムとよくなじんでゐる。私等の頭の中からも都會で慣らされた紛々の氣がうすれて、山や谷の悠々たる氣分が身に浸みて、何となく打くつろいでくるのが何よりも嬉しい。

淙々たる瀬音に交つて、蟬の鳴聲が時雨のやうにそゝいでくる。

下坪谷を對岸に見て、尻高橋を渡つて行くと、八時三十分盤の石のある所に出た、氣のせいか先年より綺麗になつてゐるやうである。それから山吹の谷の處で休み、暫く行くと道はだら〳〵上りとなり、人家の傍に道標がある。

右　金木戸へ十七町

左　山吹　牧場　森茂へ通ず　一里五丁

だら〳〵登りはやがてひた上りとなり、闊葉林の茂みの上から、額をけづつて金木戸の部落が見える。そして午前九時五十分に、私等は金木戸へ出た。

昔平家沒落の後、何處からともなく落武者の一團が双六谷へ流れ込み、この金木戸に居を定め、頑丈の柵を岩山の間へ造つて、追手のくるのを防いだと云ふ、その時、この柵ならば金木戸のやうで大丈夫だと云ふた。それが今の金木戸の名を殘したのだと云ふ。傳說に過ぎないが、然し溪谷に向つて櫓のやうに乘り出してゐるこの山丘は、飛道具の少ない昔は可なりの要害であり、隱遁所であつたに違ひない。

人家が七戸？　養蠶が主ななりはいで、その間暇や手の明いてゐる者は山仕事をしたり、畑などを耕してゐる。

金木戸から奥はまた暫くは急な登りで、草山が斷續してゐる。往年こゝを通つたときから見ると路傍の木が延びた爲、日蔭が深くなり、餘程樂になつたが、それでも草いきれのするこの道を、强い日に照りつけられると可なりこたへる。

金木戸から少し登ると對岸から大きな谷が入つてゐる。地圖の葡萄谷である。土地の者は右手の山峽からくるも

のを葡萄谷、左手を深く落ちてくるものをウサギヅノと云つてゐる。この二つが合流して本谷へ入るのであるがどつちも可なり大きな澤である。

双六谷も金木戸から上流は金木戸川であつて、土地の者は勿論、信州の者も、越中の者も双六谷と云はずに、單にこの谷全體のことを金木戸と云つてゐる。

午後零時五分清水のある處で中食を使ひ、三十分程も辿ると道が二つに岐れる。そこに道標がある。

左　中俣山北俣山

右　廣河原双六岳

右のは私等の行く道で、左のは以前廣河原に通じてゐた舊道である。左中俣山、北俣山としてあるが、この道筋を中俣川へ出て、中俣山や北俣山へ上つたものは稀である。

金木戸川右岸のこの道は、今では非常に荒れて、松ケ谷から先は、フカドウ(深洞)の橋、中俣川の橋が落ち、道も崩れて通る人はない。

曾て小島烏水氏が通つた道で、私もその後一度この道を廣河原へ出たことがある。

道はやがて川に向つて急な降りとなり、曲折してつけられてある。

深い谷底に釣橋が見えて來た、午後一時、それを渡つて左岸で休み寫眞をとる。溪谷は俄然雄大となつた。

橋から又急峻な登りとなつてゐる。暫くの間喘ぎながら登り、脚下を顧ると金木戸川の美湍がきらめいてゐる。

そして松ケ谷の落口は森林の中から奔川となつて瀉ぎ込んでゐる。

もう森林はどこを見ても素晴しい。谷近くは濃密な闊葉林に埋めつくされ、尾根上に近づくに從つて針葉樹は蓊鬱としてゐる。

松ケ谷の一つ下手の尾根が、國有林と民有林との境界ださうである。對岸の林相がその邊から俄然立派になつてゐるのを見てもうなづかれる。

以前來たときに、右岸を金木戸から松ケ谷に出たとき、私は自分の辿つてゐる道を押し狹めてゐる喬木林を見、四周の壯麗なる大尾根の森林の美しさを仰ぎ、双六谷の幽邃は松ケ谷より始まると云ふ感に強く打たれた。それは矢張國有林の有難味である。原始的の幽深を保存されてゐる美林、双六谷はそれ丈でも素的である。

松ケ谷のすぐ上手、僅かに半町程の處に、深い割れ谷が入つてゐる。フカドウ(深洞?)であつて、本谷から五十米突程も高い處で、鮮翠の奥を一大瀑布が直下してゐる。

水量は隨分多く、瀑の高さは十數丈もあるだらう。銀青色に光るその懸水を包んで、樣々な形をした綠葉の綾は、日本畫にある深山の畫趣にふさはしい。

この谷は上方へ行くと著しく右方に折れ込んで可なり大きな流域をもつてゐる。五萬分の一圖幅では、尾根の斜面になつてゐて、澤筋の曲線を落してゐる。これは水線を入れてもよい位ゐ深い谷である。

約四十分も登ると傾斜が頓に緩やかになり、峠道のやうな處を行く。上流を見ると、金木戸川の流は遠く走つて、深林は深林と重り、尾根を尾根に跨つて、その上から北俱岳(上ノ岳)が、やさしい輪郭をゆったりと延ばしてゐる。

深い藍鼠色に冴えた山の姿、それはこの谷へ入つて初めて見た遠山の色調である。

もう渓谷を通じ、森松を渡つてくる風は涼しくなつた。そして尾根の横を谷から二百米突前後の處を迂回して行く道は、概ネ水平道になつてゐるので大した登りはない。

午後二時十分小谷へ出て、氷のやうな水を汲んで第二回目の中食をとつた。

同三時十分道標のある處に出る。

右上方　八丁坂を經て下佐谷　廣河原双六岳へ

左　尻スワリ造林小屋を經て北俣　打保　廣河原へ

この附近には、小澤が三ツ程あつて、それを皆尻スワリの澤と云つてゐる。急な山阪が中途でたるみ、窪になつてゐるので、辷つても尻がスワルと云ふのから、この附近を尻スワリと名づけてあるさうで、四年程前に伐採した跡を造林したときの、造林小屋がある。

四時四十分その傍を拔け、尙暫く登りを行くとこの道での一番高い所へ出た。

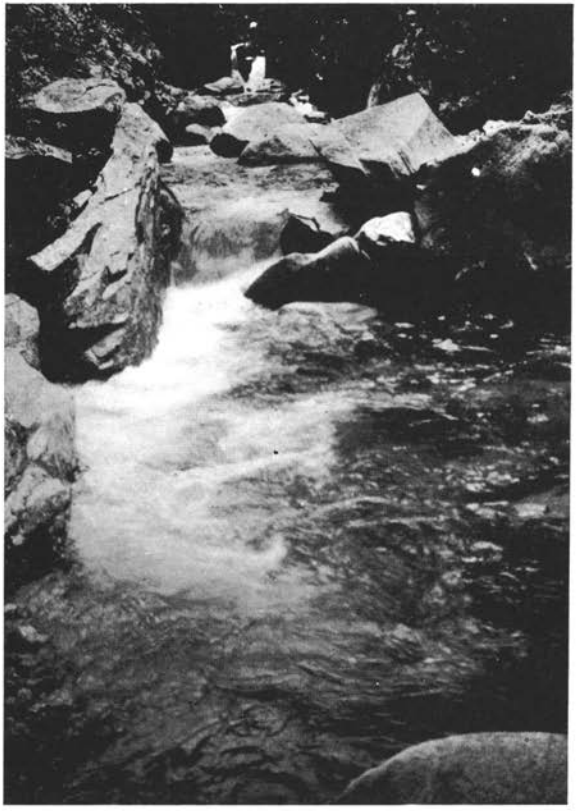
對岸の深林の底から、中俣川の落口が水を吹いてゐる。四時四十分に中俣川への歩道の分岐點に出た。

打保に通ずる中俣川の歩道は、本谷に向つて急激な降りとなり、籠渡しで對岸にうつり、中俣川、北俣川を縫つて登つてゐる。

私達の行く廣河原への道は、尙尾根横を廻つて緩い下りをつけられてある。

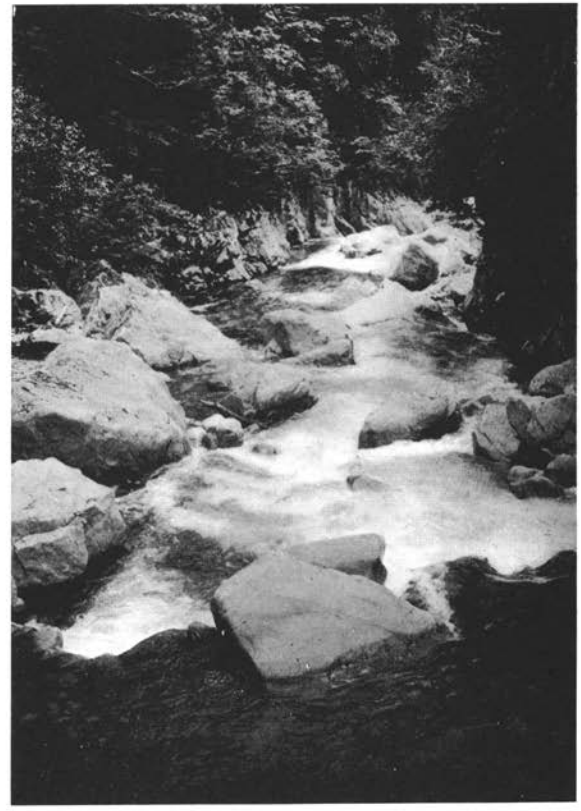
山は益々大きくなつて、森林は底しれぬ幽深さをなしきた。

八丁峯からくる途に合して、本谷に向つて斜に降り、なだらかな山阪の闊葉林の底を分けて、廣い川邊の平に出



コグラ谷の廊下

冠　松次郎氏撮影



松ケ谷上手の釣橋より下流

冠　松次郎氏撮影

た。そこには廣河原小屋が、この春新らしく建てられた大きなものが林の間に見え、その窓から煙が盛んに騰つてゐる。

小屋についたのは午後六時で、大阪營林局の人が二人、人夫七人程でそこで滯在してゐた。

小屋の一隅に陣どると、湯が沸いてゐるから御入りなさいと云つてくれる。こんな深山へ入つて、第一日から入浴とは、あまりに贅澤な巡禮の振舞かなとは思つたが、汗にまみれた身體は何より入浴が好物と、喜んで浴槽につかり、暮れて行く森林、夕靄にむせんでゐる溪聲、夕星の光りの靜な色を眺めながら、入り加減の湯槽の中でうっとりとした。何しても有がたいことだ。

十八日。雨時々晴。廣河原小屋滯在。

昨夜あんなによい月夜であつた空は、今朝起きて見ると、鱗のやうな長い雲が谷の上に集まつて、日が出始めると、朝燒が凄々しい色を流してゐる。

午前七時頃には、もう山峽を罩めて細雨はしと〳〵とかゝつて來た。

天氣になり次第出發しようと思つてゐたが、空模樣は中々よくなりさうもない。

今日はコグラ谷を笠ケ岳へ登る豫定であるが、こんな天氣ではとても、この難コースを行くことは難しからうと辨二が云ふ。

打込谷の方ならたまには人が通るが、コグラは金木戸での惡い谷で、今日迄登れないものとして、黑淵より奥へはだれも入つたものはない。中途の廊下は雨天ではどうしやうもないから、今日は一日滯在して、不用の荷だけ、

先へ打込谷の小屋へ運んでおいて、明日コグラを登らうと云ふ。

午前九時過になると、辨二と忠太郎と二人は、天幕其他の二三日間は必要のない食料だけを持つて、歩道を上流の方へ上つて行つた。

流石旱りつゞいたこの地方も、十五十六日の豪雨以來、谷は著しく濕氣を帶び、さなきだに森林の濃密の金木戸川の水量は、非常に增したばかりでなく中々減水しない。

谷通しならば一所に打込谷まで行つて見たいと思つたが、谷はとても行けないと云ふので思ひ止まり、雨の晴間を見て廣河原へ降り川の滸をぶらついて見る。

廣河原からコグラ谷の落口附近までは金木戸川では一番川瀨の靜かな、闊々とした處、山勢もこの附近だけは緩かであつて、滸には川楊が美しく、下流の山隘に立迷ふ雲の間から、日射を受けた尾根や森林の色調は、日にきらめいて絢爛たる綾を織り出してゐる潺の波光と相映じて、快闊明媚の風光を展べてゐる。

寫眞は二三撮つて小屋に戻り、午後になつて歩道を上流の方へ辿つて見たが、コグラ谷の出合附近まで行くと、ザンザ降りに遭ひ、愴惶として又廣河原の小屋へ戻つてしまつた。

午後五時になつて二人は歸つて來た。魚を釣りに本流に下つて見たが、水が大きいので、途中から又歩道へ上つてしまつたと云ふ。それでも七八尾の岩魚を楊の枝に提げて來たので、私等はそれを鹽燒にして夕餉についた。

廣河原の小屋は間口二間半、奥行五間程のもので、唐檜、椹、澤グルミなどの大きな丸太を合掌に組んで、四隅には柱のない屋根形のもので、非常に具合がよく、背後の森林で風を遮つてゐるので暖かである。後にあつた舊の

小屋は今では物置に使用してゐる。

今日も又森林の底を逆ってくる清澄な水で沸した、風呂へつかり、持參した浴衣を着て、小屋の爐邊に打くつろいだ。

夜になると氣候が大分締つて來たので、明日を樂しみにして、借りた蒲團に寢袴の上に横になつて、ぐっすりと寢込んでしまつた。

コグラ谷を上る

コグラ谷は陸地測量部五萬分一燒岳圖幅の小川原谷である。

この谷の名をどうして小川原と付けたのか、その出所は不明である。本流への落口附近にはやゝ磧はあるとしても、双六谷の支流中最も岩壁の多い、嶮岨な谷で、まだこの谷を溯行したものはないとされてゐたし、源流地に上らなければ川原などは殆ど見られない位であるから、小川原の宛字の不適當なのは云ふまでもない。

田中菅雄君の云はれた通り、クラを岩場の意味にとるならばそれでよいのであるが、何れにしても小川原と云ふ名は、實を去ること甚だ遠い。

さうかと云つて小倉谷と呼ぶことも、據り處があれば兎に角、適當な宛名であるかは疑問である。それ故私は暫くコグラと云ふ假名を用ゆることにする。

私は五萬分一の圖幅を見て、小川原谷と云ふ名が何となく組し易いやうに思はれるのと、その流が相當の延長を

もつてゐるので、惡い谷と思はず、漫然と笠ケ岳へ登るのに、最もよい登路だと思つて入つて見た、處がだしぬけに嶮惡な岩場が殆ど踵を接して現はれて來たので少なからず驚いたのであつた。然しこの谷はすばらしい谷であつて、恐らく双六谷支流中最も雄峻であり、變化に富んだ美溪であつて、殊に最も我意を得てゐるのは、谷筋を登りきつた處が笠の頂上になることであつて、從つて源流地からの眺望も亦頗るよい譯である。

双六谷方面から笠ケ岳へ登るものは、コグラ谷と打込谷とは是非一度訪れなければならない程、興味ある溪谷なのである。

八月十九日。午前六時五分廣河原小屋發、同六時二十五分、コグラ谷出合、同五十分發、同七時十分コグラ谷の釣橋、同七時三十五分黑淵、同七時五十分黑淵發、八時五分磧へ降る、同三十分第一ワル澤落口、同九時三十分第二ワル澤落口、同十時五十五分——同十一時四十分イシゴシ岩屋（中食）、正午川原小谷（ゴヤ）落口、午後〇時二十分ヒコハチ谷落口、〇時二十分五廊下に入る、同二時右岸支流の大瀑布の前にて戻り左岸を高く廻る。同三時十分漸く川瀨に下る、谷快闊となる、同四時二十五分コグラの大瀑布、同五時十分本支流瀧となつて合流する下、同六時上の石小屋へ。

今日は幸に晴れ模樣である、亂雲は谷上に相當にかゝつてゐるが、その間から碧空は高く澄んでゐる。氣候も前日より引き締つて氣分は甚だよい。

雨後の溪谷、夜來の雨に身振ひした森林の姿はその精彩は身に迫つて來るやうだ。

無爲に過した一日の滯在に、退屈しきつた私等は、午前六時五分に廣河原の小屋を發つて、歩道を、溪流を眺めながら、森林の底を潜るやうにして、上流に辿つて行つた。

日射を受けてゐない川瀬、朝靄のからんで行く川面は初秋の寒さをさへ感ぜしめる。

廣河原の處で嶋のやうになつてゐる洲がつきると、又暫くして森林の茂つた長い洲は川瀬を二つに分けてゐる、それがつきると青淵となり長瀞となつて、コグラ谷の落口につゞいてゐる、それ迄は闊い川瀬つゞきである。

廣河原から二十五分程でコグラ谷の落口につき、本流に降りて三脚を立てる。

この落合で本流は著しく左折し、その曲り目へコグラの水は奔流となつて落ち込んでゐる。

本流はこの下暫くの間は美くしい瀞流となつて、低い壁を繞つて楊、ミヅネ、白樺などの闊葉樹は水面近くにまで茂りつゞいてゐる。美くしい傾斜をもつてなびいてくる上流の瀬も、その森林も中々よい。こゝで本流に別れるのを惜しいやうな氣持がする位だ。

寫眞の爲に二十五分程費して、それからコグラ谷の左岸につけられてある歩道を上つて行く。

一丁ばかり森林の下の石高道を辿ると、右岸へ向つてくの字なりに丸木を横に束ねた橋が架かつてゐる。その上を渡つて對岸の崖側を暫く上ると、道が二つに岐れてゐる。尙崖側を上つて支尾根に達する左方の路は、廣河原から打込谷の小屋に通ずる歩道であつて、右方のものはこの谷の數丁上流にある黑淵を見に行く道になつてゐる。

私等は右方の道を崖側を辿つてコグラ谷の奥へ入つて行つた。脚下を見ると、巨岩の入り組んでゐる中を奔逸して來た流は、大きな淵を造つてゐる。コグラの青淵である。

道は崖側を二三十米突の上りとなる。針葉樹の多いこの谷は、もう栂、黑檜、五葉などの喬木が鬱々として茂つてゐる。溪流は瀧津瀬を爲し、巨岩の間を奔放してゐる中々壯大な谷だ。

コグラの落口から四十分程で黒淵の上へ出ると、そこで上流への道はつきてゐる。それから谷底に向つて下り、最後に岩壁の懐を廻つて、黒淵の落口の上に出た。

ガッシリとして大岩壁の上に森林は茂り、その岩壁によつて立て廻された正面から、約十五米突の瀑布が奔落してゐる。その下の釜が丸い三十米突程の淵となつてゐる。それが有名の黒淵である。

この淵も以前はもつと深く、色も黒色を帶びる程凄いものであつたが、大正九年出水の爲に土砂や岩石に埋められて舊時の壯觀を著しくそがれてしまつたさうである。

今では瀧の落ちてゐる處の外は、底の石がよく見える程淺く、その色も碧色となつて、黒淵と云ふ程の凄さをもつてゐない。

然しこゝは双六谷での一名所であるばかりでなく、未だに旱魃(ひでり)つゞきのときになると、土地の者は、雨乞にこの淵にくる、靈驗は新たかであつて雨は忽ち到ると云ふことである、そしてこの淵の主はやはりその例に洩れず龍であるさうだが、今から幾年か前にそれは死んでしまつたと云ふてゐる。

七時五十分、黒淵から崖上に戻つて、約三十米突程の高廻りをつゞけて、又川瀬に降りた。それから川通しになる。

黒淵の上からはもう道は全くなく、人の入つたことのないと云ふこの深谷は、徒渉とへつりとが唯一の溯行の方法である。

左岸から瀧となつて落ちてくる小谷の落口に出る、それは第一のワル澤と辨二が名づけた處で、私等はその落口

の石の上に腰を下して暫く休んだ。

谷は上流に於て直ちに狹まり、兩岸から巨岩は大塊をなしてせまく錯交してゐる。

惡場を避けて左右に徒渉をつゞけて行く中、左岸で行き詰まつた。約二十米突の岩場で水から二米突位の處の足場を選んで行くと、一ケ所壁の垂直に落ちてゐる處へ出た。直經三寸長さ一間半程の流木を拾つて來て、先の壁の凹に突込み、それを足場にして、辨二が先づ渡り、僅か四五寸の壁の襞へ身體を托して荷物を送り、先の石の上におく、私等はそれから身輕になつてその不安定の一木橋を渡つて、壁をへつりぬけ、右岸にうつり磧に拔け出して休む。午前九時である。

それからは川瀨はやゝ闊くなり、第二のワル澤が同じく左岸から瀧の如くになつて落下してゐる。

本流の奥から瀧が見えてゐる。兩岸が岩壁に圍まれて高く、流れは深いので、右岸にはい上り一廻りして磧に降りた。午前十時二十五分。

それから腰を沒する徒渉が始まる。生憎と小雨がかゝつて來た。

森林の間から駒鳥の聲が漲つてくる。この旅行初めて聞く美音である。

磧へ下りつくと川筋が大分よくなつて、私等はイシゴシ小屋と云ふ岩屋の前に出た。冬期獵師達が泊り場にするので、この上の支流を辿つて降りてくるのださうである。

岩屋の前の磧に焚火をし、身體を暖め、茶を入れて中食をとる。天氣が大分よくなつて、日が谷へ射し込んできた。

午前十一時四十分又上流へ溯り始める。これから數丁の間は谷筋が穩で廣い。

正午右岸から大きな谷が入つてゐる。川原小谷（カハラゴヤ）と云ふので、落口は小さな瀧となつてゐる。それから二十分で左岸からヒコハチ谷が入つてゐる。

そこまでは川中を石を縫ひ、水を渉つて行けたが、この谷の出合から上になると、俄然溪谷は狹隘、深刻になつてくる。森林も白檜が大分交つて、幽凄の感を强める。

數十歩にして本流は瀧となつてゐる。ロープを出して左岸の壁を約六米突上り、それから急崖を可なり上つて、瀧と釜とを脚下に見て、その上手まで廻り込んで磧に下ると、行く手は更に細い峽谷となり、美しい廊下狀となつてゐる。そしてその突き當りから二條の瀧は奔出してゐる。午後一時五分、一寸よい氣持の處であつた。

谷通しは行けない爲に少し戻つて、角岩の壁、その逆層の面を、幾度か努力してロープに縋つて漸く十二三米突も上り、瀧を避けて崖側のよい處を選んで磧へ下りた、約二十分を費す。

顧みると私等はもう何處を見ても、削壁と巨岩と奔流とに取り圍まれてゐる。

森林は鬱蒼として谷上の空を蔽ひ、又時雨模樣になつた谷の空氣は、夏とは思へない程うすら寒い。

可なりの水量をもつてゐるこの谷は、狹くなつた爲に、水は棒の如く纏まりくねつてくるので、徒渉も可なり難澁になつた。

奔流を縫つて行く中、一ケ所巨岩と巨岩との間が距りがあつて先へうつることが出來ない。足場を選んでゐる中に、幸ひ岩の間にY字形の流木の挾まつてゐる處を見出し、その突端に足をかけて僅に先の岩の上に飛び移つた。

勿論荷は別々にして運んだので、午後一時四十分そこを過り了つて又溯行をつゞけた。

午後二時、行く手の峽間を壓して、右岸の支流が一大瀑布となつて奔落してゐる。そのシブキの裡から本流にも瀧が見える。頗る壯觀である。愈々コグラの中心に來たなと思つた。

支流の瀧高さ五十米突が、非常の水量をもつて右岸の壁頭からその破れ目を離れて本流へ躍り込んでゐる。その樣は奇拔でもあり、亂暴でもある。辨二は四十間位あると云つたが、百五十尺以上は確にあると思つた。

本流の突き當りの瀧の處で谷は左に折れ込んでゐる。この附近がコグラ谷で最も壁の高い狹い廊下である。

支流の瀑布の前で、高廻りをしやうと思つて間誤ついてゐる中に、そのシブキで旅服は濡れてしまつた。これさへ越せばと云ひながら、先へ立つた辨二はその瀑の前から十數間ばかり戻つて、左岸の蒼崖の急斜面を攀ぢて、五十米程はい上つた。あまり上りすぎると谷からそれて尾根へ出てしまつては大變と横に廻り、笹藪、森林、崩崖の嫌ひなく、その間をへつって行く。

天氣は又沈鬱になつて、山雨は盛に降りそゝいで來た。

雨に濡れるのと、雨滴を帶びてゐる藪を潜るのと、林の雫を浴びるのとで、身體は濡れそぼれる。足元は益々すべり易くなる、一番の惡場で雨の爲可なりひどく虐められてしまつた。

高廻りの峠であるらしい處まで登りついて下りにつき、下を覗くと生憎本流にはまだ一つ瀧がかゝつて、壁が立つてゐる爲下れさうもない。

又横に崖側をへつりながら行くと急峻な草崖の横に出た、雨後の草坂は非常に辷る。危險な處だけステップを切

り漸く林叢に達し、徐々に下りとなり、遂に磧に向つてロープで下つた。時に午後三時十分。

降つた處は瀧の上で、そこからは不思議と溪觀がすつかり變つて來た。今迄は暗く狹かつた立體的の窮谷は、急に闊く明るい平面にのびた壯快の谷となつた。岩層は花崗岩の堅剛から硅岩の白茶色に變り、地形も川床の色彩も、水の流動する樣なども變つて來た。かうなると谷渉りは益々興味が乘つてくる。

下流のヒコハチ谷からこゝまでは、岩場通しで私等は呼吸もつかずに歩きつゞけた。豪雨と悪場とで身體の疲勞を覺える位いであつた。私等はこの高廻りに一時間十分を費したのであつた。

天氣は又一しきりよくなつて來た。

もう悪場も今の廊下で終りになつたものと大いに喜んで、緩い川床を溯つて行くと、幅廣の六米突程の瀧の下に出た。右岸を廻つてその上に出て一丁程行くと、同じやうに幅の廣い瀧は二段になつて瀉下してゐる。左手の藪をからんでその上に出ると、谷幅は俄然闊くなつて、兩岸の山勢は更になるくなつた。

そして川瀨は硅岩の一枚の大岩磐で形造られた緩傾斜の板のやうなその上を、淺く走り流れてゐる。茶味を帶びた白い川床は到る處に壺の如く浸蝕せられて、珍らしい溪趣を爲してゐるに氣づいた。

天氣模樣は益々よくなつて、上流の谷も、空も森林も、もう美しい斜陽を一杯に含んでゐる。淺水の中を、脛まで漸く蕩す位の清川の中を、溯つて行く氣持よさ、氣輕さは、廊下跋渉の骨折を償ふに充分であつた。

低い、丘のやうに重つてゐる溪側の岩の上には、大文字草、リンダウ、梅鉢草、兎菊などが草地を爲して、腰を下して休むのに恰好な處は處々に現はれて來た。私はもうこつちのものだと思つた。

やがて流水は瀧となつてゐるが、瀧から落ちる水の壓力の加はる處だけが刳れて瀧壺となり、それが山刀で割つたやうに細く、ヤゲンのやうな形をして細長い釜淵を爲して、周りの淺水の中を一筋竪に藍色に淀んでゐる。一寸した處だが奇觀である。

谷はそれからは又右へ右へと曲つて行く。

午後四時二十五分、當面に一條の大瀑布を見る。高さ約四十米突、コグラ谷での大瀑布であるばかりでなく、双六流域で最も高大な瀑の一つである。すばらしい水勢でそして壯麗な姿態をしてこのまとまつた瀧は、谷の突き當りに一大水柱を懸けてゐる。その前まで近よつて、瀧壺の釜を見て私は驚いた。その狹さ、その色の黑さ、これはさぞ深いことであらうと思つたのである。

瀑布の打込む處だけが倚麗に刳れて小さい釜を爲してゐる。深さが非常な爲、その釜の色は藍黑色を呈してゐるのである。

川床が白色で廣く周圍が快闊なだけ、この釜の色は目立つて凄い。これこそコグラの黑淵であると私は思つた。小さな丸い釜の水は溢れて、周圍の闊い川床に漂り、それが淺流となつて靜かに走つて行く。珍らしい溪趣だ。黑淵のやうに岩壁と森林とに圍まれてゐないだけ却つて面白味がある、そして奇拔である。私はこの瀑をコグラノ大瀑と名づけておいた。

廊下を拔けてからは、大きな瀧はないものと思つてゐたらこの大瀑布に遮られて、私等は又右岸の崖をはい上り、可なり高い處で藪を分けて、瀑の上に廻り込んだ。そして又川中をのみ溯つて行つた。

谷は尙右へと曲つて行く。行く手に又大きな瀧が現はれた。左から入る大きな支流と本流との出合で、兩方とも霧降式の可なり壯大な瀧となつてゐる。そして水量は中々多い。

もう五時十分である。朝から可なり努力しつゞけて來た私等は、この瀧を見て少しうんざりした。もう隨分瀧も上りあきた。それに日暮間近い今頃まで、とりつぎに大物に出られては辟易せざるを得ない。今夜の泊場が氣にかゝつて來た。

眞直に入つてゐるものは、打込谷との境の大尾根からくる可なり長大なものであつて、右方からくるものが本流である。

瀧の下に出て、二つの瀧の間の階段狀の岩崖を上りきつて藪に入り、本流の瀧の上で磧へ下りた。その時には既に午後五時四十分であつた。

仰げば左の尾根上に、鷹ノ岩巢の岩骨は近く聳えてゐる。

もう水は著しく減じて來た。流を縫つて急いで行くと、行く手に又二十米突程の懸瀑が見える。又瀧かと思つてゐると、辨二は左の藪をかき分けて崖を攀ぢて行く。約十五米突程も上ると私等は大きな岩の懷に出た。

そこがコグラ上流の岩小屋であつて、冬稀に獵師の泊る所で、この春三月、田中菅雄君と辨二とが深雪の中を搜し廻つて漸く見付けたものだと云ふ。

私は旅囊を下して岩屋の一隅に座を占めた。今日は大分疲れたので動く氣にもならない。

天井はよい具合に、岩が平に冠つてゐるが、僅か二坪位の岩窟で、それより一歩踏み出せば、前は崖なので至極

コグラ谷の上流

冠　松次郎氏撮影

コグラの大瀑

冠　松次郎氏撮影

窮屈である。

可なりの難コースで疲勞してゐるにもかゝはらず、人夫は急崖を藪に切り開けを造り、川まで水を汲みに下りたり、米を磨いだりした。

そして近所から焚木を集めて、皆落ちついて焚火の傍に集まつたのは黄昏近くであつた。

霧が深くなつて何處も見えず、ゼニトリ、ミソサザイが小屋の廻りに囀つてゐるだけで、四邊は森閑として物寂しい泊場であつた。

夜半目を覺して見ると空はすつかり晴れ渡つて、滿月は八丁峯方面の尾根上にかゝつてゐる。私は岩屋で横になり、澄みきつた青空、明月の光りを眺めながら、櫓の上で寢てゐるやうな氣でまどろんだのである。

笠ケ岳登山

八月二十日。午前八時コグラ谷上の岩小屋發、同八時四十分約二十米突の瀑布二つを通過、同九時二十五分支流二つ合流する所、同十時二十五分谷愈々狹し、支流へ入る、同十一時五十分笠ケ岳頂上、正午笠小屋。

曇、濃霧、夜に入りて雨大に到る。

午前四時に起きて見ると、昨夜あんなによい月夜だつたのに、今朝はまるで曇つてゐる。そして濃霧は何處を見ても山稜を蔽ひ、雨こそ降らないが、隨分陰鬱な天氣である。陽氣は暖かで可なりの高度に遮蔽物の少ない處に泊つてゐたのにもかゝはらず、寒さは餘り感じなかつた。

夜明頃から小鳥は泊場の周りを囀り廻つてゐる。天氣模樣が惡いのでゆっくりして、午前八時岩屋を發つた、崖側を流へ下り、それから昨日の夕方脅かされた瀧の處まで溯り、その左の藪崖を上り、一廻りしてその上流に出た。

少し行くと大きな瀧、二十米突を越えてゐるものが直下してゐる、然しもう水量はさすがに少くなつた。

八時四十分藪を縫つて瀧の上に出ると、川床は又白い一枚岩の上を淺く流れてゐる、溪側の丘の上にはミヤマ大根草、白山風露、チングルマ、ツガザクラなどが咲き亂れて、偃松も現はれてきた。

午前九時五分、上流に二つ瀧が寄り添つて落ち合つてゐる。右からのが本流であつて、私等はその方を上つて行つた。

上流の開けた谷奥からは、偃松の尾根、笠の頭につゞく山脊が、霧の下から覗き込んでゐる。

森林は矮くなり、溪流は小さくり、荒寥たる源流地らしい情景は到る處に見出さるゝやうになつた。

九時二十五分支流が二つ同じ位置で本流に合してゐる。そして本流の奥には又瀧が見えてゐる。奔流は瀧の如くヤゲンのやうな谷底を貫流して、石崖のやうな岩場をはい上つて行くと、低い壁は谷の兩岸を劃つてつゞいてゐる。私等はその上端を辿り、兩岸を縫つて上つて行つた。

四圍は、ミヤマナナカマド、ハヒマツ、ミヤマハンノキの世界だ。それから白樺の。

そして今迄跳梁してゐた白檜の大森林は、もう遙か下方に谷を埋めて波打つてゐる。

十時二十五分、谷が非常に狹くなつた。そして上流は赭色の崩崖に包まれた狹い深い荒れ谷となつてゐる。私等はもうよからうと思つて、そこから左方の支流へ入つて行つた。

偃松の中の小溝を辿つて行く中に、密叢の中に入つてしまつたが、漸く洗れて草地に出ると、間もなく大破片岩の崩坂の上に出た。そしてその上を足場のよい處を選んでひた上りに上つて行つた。

この大破片岩の崩坂は、登るに從つて急傾斜となり隨分長くつゞいてゐる。それもその筈で、そのつくる處が丁度大笠の頂上になつてゐるからである。

霧が深く、その濃淡の潮は絶えず山頸を繞つて、四面朦朧として何物も見えない。二千五百米突を越えてゐる處であるから、若し天氣であつたなら、よい展望が貪り得らるゝのであつたが、生憎見ゆるものは霧ばかりで、すぐ間近にある笠のピークすら全く五里霧中である。

午前十一時五十分漸く笠の頂上の東寄の一角に登りついた。そして小笠の懐にある笠小屋へついたのは丁度正午で、山上の寒風に追はれて、身を縮めながら小屋の中に潜り込んだ。

焚火にあたり茶を入れて中食を使ひ、爐邊に安座して落ちついて見ると、何となく重荷を下ろしたやうな氣にもなつた。

夕刻から外面の風は強くなつた。霧は益々深く、雨は時々小屋の羽目板を叩いて通つて行つた。

夜に入ると大雨は猛然と降りそゝいで、その雨間に涓滴の音は寂しく軒端を傳ひ、霧は天地を蔽ひ、強風は間歇的に山上にうなつてゐる。

明日の天氣はあやぶまれる。然し食糧を少ししか携帶して來なかつた私等は、どうでも打込谷を下らなければならないのである。

○双六谷を中心として　冠

打込谷を下る

八月二十一日。曇、夜風雨。

午前九時五十分笠小屋發、同十時十分コグラ打込兩谷の間尾根の鞍部附近から打込谷へ下る、同十時四十分瀧二つを下る、十一時十分本流に合す、午後〇時十分左岸より小澤入る、磧で中食、〇時三十五分發、一時より徒渉始まる、同一時二十分オクヌケ澤落口、二時二十分セトの入口、最初(上から)の大瀧、三時四十五分仙人淵の瀧、四時十分上のカゴ渡し場、同五時打込谷の小屋着泊。

朝起きて見ると雨は歇んだが、霧は山上を一杯に罩めてゐる。

午前八時頃から外が明るくなって來たので出て見ると、上空は霧の裡から青く霞んで、霧がハゲるに從って碧空はだん〳〵擴がって行った。やがて大笠の絶巓は狹霧の綾の中から突兀として延び上って來た。

急ぎ寫眞器を携へ、頂上に登って見たが、部分的に霧は晴れてきたが、濃密なその潮流はまだ中々さっぱりとはとれさうもない。

双六谷方面の累嶂が美しく現はれて、その山坂や森林溪谷が糢糊として霧の綻れから見えて、黑部谷を蔽ふ雲海が遠く連らなり、日は既に下界を照してゐることは分った。山頂は又濃霧の幕に閉され、とても急には雲外の壯觀を恣にすることは難かしいやうだ。私はあてにしてゐた笠ケ岳頂上の展望を失つたことを殘念に思つた。然し已むを得ない。

双六谷打込小屋より見たる中俣岳(黒部五郎岳)　　冠　松次郎氏撮影

深山時雨だ。下界は晴天つゞきなのに、山上は連日濃霧の幕がとれない、山上殊に高い山々の頸から上、二千五六百米突から上は霧雲は中々晴れ上らうとはしない。

此頃の天氣では谷旅はまだよいが、山上の行樂には全く都合が惡い。

然し谷の旅でも、天候がしけてゐる爲か、水が多く、本流は徒渉が困難であって、その爲に行程さへ變更しなければならなかったのである。

遂に寫眞一つ撮らずに小屋に戻り、支度をして午前九時五十分出發、小笠の頸を搦んで、コグラと打込との間に出てゐる尾根を二十分程降り、可なり下ってゐる鞍部の一町程手前から、擂鉢の側面のやうな斜面を、打込谷に向って、ザレや草地を縫って降って行った。

暫く行くと、ザレや草地の大斜面であった源流地も、何時の間にか幾つかの小さな藪尾根と分れ、私等は石溪の底を水の走ってゐる小溝の中を下るやうになつた。

午前十時四十分、小瀧がとりつぎに出て來た。藪がうるさい爲に、瀧の横を岩づたひに下り、十一時十分に本流と合した。

硅岩の層はコグラ谷を横斷してこの谷へも入つてゐるらしく、こゝにも暫くの間その白茶色の岩層は淺流を爲して板の如き川床を造つてゐるが、コグラのものに比して遙に小規模で、やがて又花崗岩の溪谷となってつゞいてゐる。本流は奔川と小瀧との連續であるが、まだ水量は甚だ少ない。

谷上をなびいて行く亂雲の下から、雨が少し落ちて來た。

十一時三十五分、左手からミヤマハンノキと草藪とを押し分けて谷が一つ瀉入してゐる。顧ると本流には幅廣の瀧が立派にかゝつて、天上は壯快に開けて源流地の面白味は漲つてゐる。

午後〇時十分右手から小澤が入つて、その下の磧で私等は辨當を用ひ、そこ〳〵に又流水に隨つて下つて行つた。水量は大分ふえて來た、これから徒渉が多くなると云ふのでワラジをはく。午後一時。

うす日が谷に射し込んで來た爲に溪流は閃めき始めた。下る方にばかり氣がとられて知らずにゐたが、私等はもう何時の間にか森林帶の中を歩いてゐたのであつた。溪側はミヅネ、白樺、唐檜、白檜の密林になつてゐるが、白檜が最も多い。双六谷流域には何處を見ても落葉松が皆無なのは不思議でもあり、少し物足りない氣持がする。

午後一時二十分オクヌケ澤と云ふ小谷が右から入つてゐる。間もなく左からも小溪は入つて來た。そして水量は大分多くなつた。

午後一時五十分、これからが惡くなると云ふ。二時二十分右手から二ノ澤と名づけたものが、岩壁の間を瀧となつて迸つてくる。下るに從つて谷は益々雄峻となり、鬱々たる森林の腰を繞つて大岩壁が兩岸から錯立し、そこからは川床が急に斷落して、谷筋が左折して見えなくなつてゐる。突き當りの大岩壁の中を、竪に一筋のワレ谷が入つてゐる。その中を崩壞の爲薙ぎ落された大木の殘骸が、算を亂して逆茂木のやうに谷を埋めて落ちかゝつてゐる。谷はこゝで窮まつて、今迄の明るさに引きかへ、何となく暗い凄い感じをさへ起させた。

右岸の崖を上り、岩壁の横を森林の下を縫つて、丁度谷の曲り目に落ち込んでゐる支流、一ノ澤と名づけたものに入り、それを横ぎつてから、ロープで滑岩の横を通つて、やゝ廣い岩場に出て本流に向つて立つた。

直ぐ前は大きな釜で、本流には打込上流最初の大瀧、それが二段になつて奔落してゐる。隨分水量がある。右岸から谷の折れ目へ入つてゐる谷、私等が今横ぎつた谷の落口も瀧となつて本流の釜に瀉ぎ込んでゐる。實際打込谷を下降して以來、初めての壯觀である。私もなる程打込谷はよいなと思つた。

辨二は打込の廊下だと云つてゐた。然し廊下と云ふ程、壁は高くなく又直立してもゐなかつた。

迫門(セト)とかノドとか名づけるのはよいと思つた。

左折してから、谷は惡く、水は深くなり、もううつかり徒渉も出來なくなる。

兩岸からは、溪水に洗ひ出されて美くしく晒れた花崗岩が、累積せられ錯交して溪水はその中を深くうねつてゐる。

森林は兩岸に高く連なつてゐるが、谷水を蔽ふ程の濃密に跳梁してゐない。岩の色の明るい水の色の鮮かな、そして充分に日光を受け入れてゐるこの谷は、可なりの豪快さをもつてゐる。コグラ谷の幽凄に比して面白い對照を爲してゐるので、双六谷から笠ケ岳への登山路として、どっちも優れたコースである。私はこの二っの美溪を辿って、その溪谷の深邃と豪快とを心往くまで味はったことを喜んだのである。

然し勿論打込谷の方が遙にとりっきがよく、そして愉快な谷であった。コグラは早く拔けなければと思ひ、打込谷は寧ろゆっくり遊ばなければと云ふ感じをさへ與へた。

もうこれから下流は川通しであって、巨岩を傳ひ、兩岸を縫ひ深い徒渉をして行くことになる。三十分程下ると谷は又狹まって斷落してゐる。右岸の崖側を上り、谷から六七十米突の高さを、森林の下を廻って行くと途中で細

徑に出會つた、この路は上の歩道からすぐ下にある仙人淵を見る爲に切り開けたもので、谷底から約三十米突の崖上でつきてゐる。こゝから歩道通しを打込谷の小屋へ下ることが出來る。然し私等は溪水について行くことにした。

すぐ下にはすばらしい青い大淵が、池のやうに擴がつて美くしく光つてゐる。私等は切り開けの終りから、崩崖を、林の中のぬかるみをづり下りて仙人淵の前に出た。この淵に落ち込む瀧は第一のものより高くはないが、淵は兎に角打込第一の闊さをもつてゐる。この瀧の上にも更に大きな瀧がかゝつてゐるのであるが、そこ迄は私は下らずにしまつた、こゝで打込谷第二第三の大瀧が落ちてゐるのである。

もう三時四十五分になる。朝遲く出發した爲に何となく氣がせはしない。

暫く行くと瀧津瀬の下が巨岩に馬蹄狀にかこまれて釜となり、奔潭は白熱化して沸きたぎつてゐる。右岸の壁の襞について僅かにへつり、尙左岸について巨岩を傳ひ、徒渉をつゞけて行くと、谷下はやゝ闊くなつて、カゴ渡しがそこに架けられてある。

私等は漸く打込谷の上のカゴ渡しの處へ出た。それは四時十分で、そこからは左岸の歩道に入り谷下へと下つて行つた。

すぐ下手左岸から支流が入つてゐる。そして谷は又狹まつて奔川の連續となつてゐる。森林の間から、大瀧の水を見、その咆吼を聞く。上流から四番目の大瀧で打込口の大瀧と云ふのがこれである。

もう暗いので大瀧の見物を明日に讓ることにして、歩道を下つて行くと、右手の森林の間から人の叫び聲がする。十九日に廣河原で別れた營林局の人が、打込谷の小屋へ調査に來てゐる筈なので、その人達と又泊り場を共にする

ことを喜んだ。

私等は午後五時打込谷の小屋へ辿りついた。小屋は谷から約百米突の左岸の崖側の僅かな平地を拓いて建てられた、この谷奥として上等のものであつた。

双六谷から笠への登山を終つた私等はこの小屋で又豪雨の爲に一日の滞在を餘儀なくせられた。

雜錄

○ラティモア氏夫妻招待會

（昭和四年九月二十日於華族會館）

ラティモア(Owen Lattimore)氏夫妻が滯京中であると云ふ事を知ったのは全くの偶然からであった。而もそれを知った時、氏等の滿洲への出發の日が既に數日の後に迫つて居た樣な次第で、萬事手が廻りかね、折角の會合も電話や速達でほんの手近かな人々の間に通知する事が出來たのに過ぎなかった。もっと早くからわかつて居たならば、幻燈でも使つた本式の講演會でも開く事が出來たかも知れないと思ふと殘念である。尤もこんな事は日本山岳會の仕事の領分を越えた事であるかも知れない。けれ共、頂きから頂きへ、又谷から谷へと渡り歩くものも、結極砂漠の中を彷徨くのと大して變りがないと思へない事もないであらうし、それに當然さう云ふ機會を作つて呉れるべき團體がこう云ふ人を素通りさせてしまふ樣な狀態である以上、こんな事もつい考へたくなるわけである。

北京からモンゴリアの砂漠を經てウルムチに至る千六百哩の砂漠の旅行、ウルムチから所謂チャイニーズ・トルキスタン(新疆)を横切つてカシガールに出、更にカラコラム峠を印度へと越したラティモア氏の旅行は一九二六年から翌年にかけて行はれたものである。氏は一九二八年十一月ロンドンのロイアル・ジオグラフィカル・ソサエティーに招聘せられて第三回の「アジア講演」をその地になした。此のアジア講演の最初の講演者たる名譽を擔つた人はかのサー・オーレル・スタインであり、第二回に招待せられた人はメトロポリタン博物館のアンドリュス博士であつた。「アジア講演」の第一回をスタインによつて開いたと云ふ事について何人も議論をする人はあるまい。又モンゴリアの探險に偉大なる貢献をなし、新生面を開いた人としてアン

ドリュス博士がその後を次いだと云ふ事も何人も之を首肯する所であらう。併し乍ら此の第三回の講演のために招かれたラティモア氏の旅行は前二者のそれと著しい對照を爲したものであつた。特にトラクターや自動車を思ひの儘に走らせそれに何百と云ふ駱駝の行列を作つた、謂はゞアメリカの財力と機械力とを存分に使つて行はれたアンドリュスの探險と、同じアメリカ人ではあり乍ら、此のラ氏の旅行とは恐らく正反對のものなのであつた。物々しい機具や、騷々しい機械はラ氏の旅行には一つも使はれなかつた。僅に九頭の駱駝とそれの駱駝使ひと、年來使ひなれた親讓りの支那人の僕とそれ丈けがラ氏の全部隊を形造つて居たのである。

「旅行者が探險家と稱せられるよりも寧ろ放浪者と稱せられるに適した樣な昔しの時代に屬して居る私は今の世の中では時代後れの人間である」と氏はロンドンでの講演の冒頭に述べて居る。併し又同時に「若し私が爲し得た仕事に何等かの値打があるとしたならばそれは要するに私の覺えた事柄が全て、何百年何千年も前に此の同じ道を歩いて居たと事實上同じキャラヴァンに混つて、あのアジアの大昔しからの道を辿つて居る、その間に覺えた事柄であると云ふ所から來るのである。事情は今も昔しも變化しては居ない。今日の旅行者も、昔しありしが如く、涸渴、寒氣、砂嵐、吹雪の前に脅かされ、又盜賊の襲來に脅えなければならない。キャラヴァンの男達も商人達も昔しと大して變つては居ないであらう。私の見、聞き、又感じた全ての事は殆んど殘らず二百年或は二千年前の異邦人も亦之を見、聞き、そして感じた所の物ではなかつたらうか。私は一枚の地圖すらも携へては居なかつた。こんな物は、その日〳〵の旅程のためには一文の値打もない。毎日々々に私が自分の頭を痛めた方向であるとか距離の問題は、又同じ樣に、曾つてマルコ・ポーロやリュブリュックのウィリアム等の心を惱した所の物であつたでもあらう。たゞ私が之等先人に對して持つて居た唯一の强味は私が自分の周圍の人々の言葉を解す

ると云ふ點であつた。それに私の毎日の生活全體が、食物も、着物も殆んど、彼等自身のそれと同じ物であつたのである。」とも述べて居る。實際此の人程ハムブルないで立ちでかゝる旅びに發つた西歐人は極めて少いに違ひない。さうしてこう云ふ意味での周到な用意と心がまへとがあつてこそ、砂漠に殘る言ひ傳へや風習を本當に理解する事も出來るであらうし、此の砂と氷の曠野を横切つて作られて來た昔しからの東西交通の要路の本當の意味を理解する事も出來ると云ふ物であらう。それにラ氏の旅行にはもう一つ大きな特徴があつた。それは元來此の旅びが人類發生の地を見出さうとか難しい名の前世紀の怪獸の卵の化石を何うしやうのと云ふ四角ばつた事業、乃至は砂の中に埋れたその昔しの寺院を發掘しやうと云ふ樣な目的を以てしたのではなくして、そも〳〵は、空のはてまでおし擴がつたその砂漠の中に彷徨つて見たいと云ふ、全く單純な而も癒す可らざる熱病にその端を發して居ると云ふ事である。ラ氏は實際どんな動機が自分をしてこんな病氣にかゝらせてしまつたのかを具さに私達に語つて呉れた。――ラ氏は此の旅行に出かける迄の數年を天津の商館に暮して居たのである――さうして又、一度砂漠に原始の香ひをかいだ者は一生その魅力から自由になる事は出來ないとも云つた。砂漠の夕燒や星や、その夜に燃え上るキャラヴァンの火を語る時、語る人の胸に猛獸がその故郷の森を想ひ、原人がその山間の生活を戀ひしたふ樣な、驚く可き熱情が湧いて居る事を私達は感じないわけに行かなかつた。やれアメリカの社會科學研究所の研究員であるとか、歴史人類學の學徒等と云ふカモフラージュの裏に、こう云ふ素朴な放浪者としてのラティモア氏を見出した事は私達にとつてどんな大きな喜びであつたらうか。食卓は、從つて、始めから全くの儀式抜きの亂取りであつた。講演でないからそこで語られた事柄は時間的にも空間的にも無秩序なものではあつた。勿論私達は今更らそんな一般的の事柄に時間を費す必要もなかつた。要するに斷片的に、併し印象的に色々の場面が描き出され、色々の

挿話が語られた。焚火を圍み乍らキャラヴァンの人達の物語る傳說であるとか、自然の脅威の間を縫つて生きて居るそれ等の人達の持つた信仰であるとか、風習であるとか、さては又天山連峰をかすめて飛ぶ雲のおとす蔭影の美しさ、雪の砂漠に取り殘され、又峠越しに氷河の中に敢えなくなつてしまふ澤山の駱駝の痛ましい物語り等、全く盡きる所がない。冬のさ中にシベリアのノヴォ・シビリスクから國境のチュグチャクまでたつた一人で旅びして來たラティモア夫人の旅語りも面白かつた。併し雪橇で土地つ子の間に混り乍ら此の旅行をしたその忍耐と勇敢さとに、更に又誇張も何もなく率直に物語る夫人の態度に、一同文句なく敬服した。

食後はラ氏の寫眞帳を圍んで又話しが續く。砂漠の眞中に築き上げられ而も今は全滅してしまつて居る一つの王國の話し、無事に砂漠を越すと自分の駱駝のたてがみの毛を一本拔いて神樣に献げると云ふキャラヴァンの習慣、ウルムチから奉天まで一つの電報を打つのに二ケ月かゝつたと云ふ無線電信局の話し、さては又ヘディンの探險隊に頭領をして居た今はもう白髮の老人の話し、そうして又、ロンドンに頑張つて居る大御所ヤングハスバンド老の消息等。

全く四十年前にラ氏と似た行程をとつて北京からラッサへと拔けたサー・フランシスこそは、ラ氏の旅行の苦しみと樂しみとを本當に理解し得た人であつたに相異ない。エヴェレストに酸素を擔いで行く等とは以ての外と今以つて頑强に主張して居る此の虎の樣な老人が、ラ氏夫妻を自分の子供の樣に可愛がつたと云ふ事は想像するに難くない。兩方とも所謂舊派の旅行者なのであるから。

支那に長く居た人だからであらうが、全く時間のたつのに無關心で、御蔭で私達は十時過ぎになつて刻限が來る迄、ラ氏夫妻を取かこんで、何やかやと話しをいひ出すの幸福を持つた。そして雨の中をラ氏と分れて歸つて來る時、今までまるで見當もつかない程遠く感ぜられて居るモンゴリアの砂漠であるとか、トルキ

スタン、天山等と云ふ物が全く親はしい物であるかの様に思はれ出して來て、何とも云へない程嬉しく思つた。

ラ氏夫妻は今滿洲にあつて年來の研究を進めつゝある。私は今再びアジア大陸の上にある此の二人の人の上に、感謝と親しみとを以つて、心からなる幸福を祈りつゝ、樂しかりし一夜の報告の筆をおく。

此の夜來り會する者、伊集院虎一、黑田正夫同夫人、槇有恒、松本重治同夫人、松方三郎、鳥山悌成、浦松佐美太郎、渡邊漸、以上會員會友合計十人。

「ラティモア氏の旅行については

The Royal Geographical Journal. Vol. LXXII. No. 6.; Dec. 1928. "Caravan Routes of the Inner Asia"　The National Geographic Magazine. Vol. LV. No. 6. June 1929. "The Desert Road to Turkestan" が詳しい。此の他に著書もある。」

（松方三郎記）

○西毛無山（大正十四年冬）

黑田正夫

秋の美しい日を實驗室に立て籠らなければならなかつたので、山を戀ふる心は日增にとつのつていつた。木枯が吹き始めて秩父の山にかぎられた空が段々と澄みわたつてゆく頃になつては、毎夕乘換を待ちつゝ夕陽のはいつてゆく西の空眺めてゐるとたまらなくなることが常となるやうになつた。

十一月の終に二日の休を得て麓の大方山にゆくことがやつと出來た。

この頃よく遊びに來てくれた大島永明氏と、妻とその友氷上清子氏との四人ででかける。東海道を夜行で下り、朝まだき駿河の大宮で下り、乘合自動車に乘つてゆけば次第に富士もかすかにみえ始め、獵にゆく人たちが途中で犬と共におりるころには桑畑の霜のおいた畝さへ鮮やかにみえるやうになつた。そして白糸の

瀑へよつた頃には初冬の朝日は輝やかしい瀧壺に光を投げてゐた。

横手澤の部落にはいる前富士を一枚寫生しやうと立止る。いつみても美しい山だ。生々しいその線もいつかは爆裂して跡方もなくなるであらう。小乙に老ふる日を思ふのはあまり慘酷である。しかし、とにかく美しい。

皆は先にゆくといふ。横手澤から狸沼にでてまつてゐることにして後にのこる。

横手澤の部落から左にはいつて芝川をわたり内野足方の部落の下から天子嶽の傾斜にとつつく。水力電氣の掛樋をこえ芝川に洗はれたと思はれる部落や田のある平地から少し上れば、平らな段をなしてゐる臺地になる。少しの雜木林とその境をなす杉の木立をぬけると小さな起伏をもつた、笹原に道はゆく。萱交りの小笹はよく刈られてそれを運ぶのだらう牛馬の蹄に掘られた道は、原の中をうねつてゆく。

何年かの前晩秋に草津から歸つて來たときが想ひ起された。こゝに似てゐるのか、初冬の和やかな日さしに同じ調子があるのか、とにかく、二人ののんきな旅人がねころがつて白樺の葉の落ちた梢眺めてた時が想ひ浮んで來た。

しかし今は、先へいつたはづの三人がいくらあせつても影もみせない。日は麗らけく照つて、透き通つた空は天子岳の黄ろく輝やいた尾根にかぎられて、澪を思はせる微風が枯れた小笹の上をかすめてゆく。穏やかな、美しい冬の日だ。耳之を得て聲となすとか、唯はぐれた友をあくせくと索してゐる旅人には、早くいつしよになつて思ふまゝのんきに享樂したいとあせるのみで、和やかさは反つて心をいらだたせる。富士の長くひいた裾とはちがつてゆるいなりに小さな起伏のあるこの野は、人をさがすものにとつては、美しかるべき曲線も反つて邪魔であつた。それでも狸沼に近づくに從つて曲率も小さくなつて、一望にはいる視野も廣ろく、路も多くに岐れて來た。小高いところに立つて行手をみたが、人のけはいもない。小笹の中を黑く

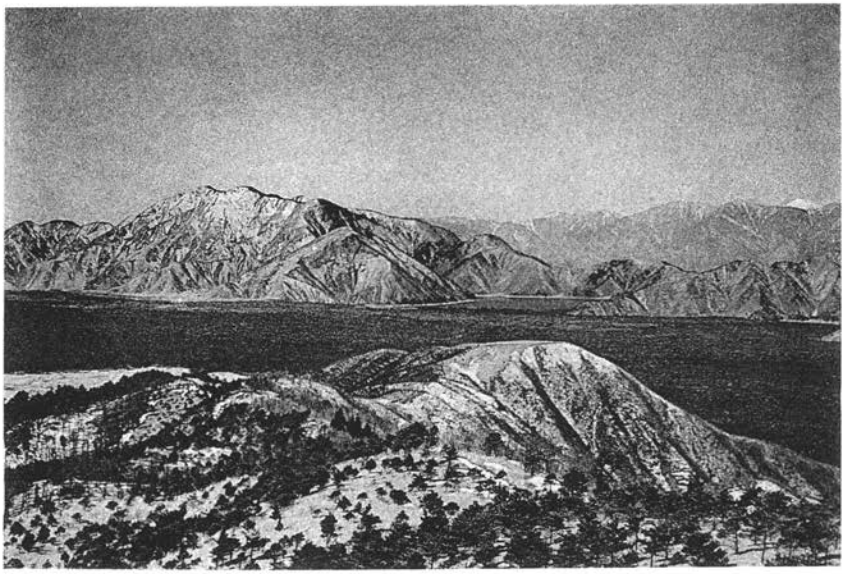
うねつてゆく路はいつ雨に洗はれたか、そのまゝ足跡もなく、きれいに輝やいてゐた。この道を先へはいつたとも思はれないので街道にひきかへし、行く人ごとに、來る人ごとに、訊ねてみて、散々知らない〳〵といはれた末やつと内野の部落のはづれの角の店で、もう二三時間前に通つたときき、裾野の中の道普請の監督に一時間程前に芝川わたつて狸沼にいつたといはれて、再、芝川を渡り、川に削りとられた崖をよぢて、狸沼にでてみた。しかし廣きその野に人影もない。どんなに失望したことであらう。

唯のんびりとした野には相變らず冬の陽は照り、その中央の葦に埋められた狸沼は、ゆるやかな尾根の下に廣がつてをる。よき日に來たものだ。晩春の葦の芽がエメロードに燃ゆる頃か、冬枯れのジョーンヌドルクルに輝やく今こそ、かゝる曠野を、沼を樂しむ時である。

しかし友を失ふた旅人はこゝでも、のんきに、心ゆくまで味ふことを許されない。一時といふので、乾いたパンを水筒の水でやつと一片のチーズと共にのみこんで、二度後を追ふ。

猪頭の部落を過ぎて、少しの上りを上れば、こゝも昔は沼だつたらうと思へる平たい薄野にでる。陽は尾根にさへぎられて、本栖の湖の上あたりには北の寒い白い空が、遙かに裾野をかぎつてゐる。友を追つて漸くに一つしよになれた頃には、夕陽は僅かに富士の頂に名殘を示してゐるのみであつた。この野をこえ、尾根を一つまはり、杉の森ぬければ、麓の部落が、靜かに山懷に包まれて立つてゐた。疲れはてた體にも今夜の宿してくれる大家の門の千木は珍らしく、ゆかしく見えた。

翌日も、晴れ渡つた冬の空が白く青く輝やいてゐた。いつの年か、木暮さんが上られたと聞いたこの西毛無の山。冬の日、富士を眺め、赤石山脈を望みたいと希つて、幾度の秋は去り、春を迎へたことであらう。あこがれて、夫を現實に見たとき、幻滅を感ずることもある。しかし、自然には、想像では及ばない美しさが



(上) 段和山より遠望したる大方山(西毛無山)右端の白雪は聖岳　山口成一氏撮影

(下) 精進パノラマより見たる大方連山の北面　同

ある。想ひがけない良さは、想像が大きければ、大きい程、尙更に深い。限りない懷しさが、滾々として湧き出して來る。麓の村から、炭燒に荒らされ盡した、峠道を、登りつめると、西側には尙深い黑木立が殘って、苔がふかふかと足に氣持がよい。やぶの多い山位に思って來たこの山に、こんなにも、よい森林を見出だしたことは、どんなにうれしいことだらう。その中を北に尾根に沿つて上れば、三角塔の殘つてゐる頂上は程もない。その東側は少し草原が開けて、その中に立てば、境の樹々には、氷花が、燦然と旭日に輝やいてゐるではないか。林の中にはいれば、黑い幹や梢をすかして銀白に輝やく嶺が、靑く澄み渡つた空に連つてゐるではないか。どれが、白峯であり、どれが、赤石であるといふ、山に親しい者にとっての興味も、此の場合、おゝ美しいといふ嘆聲に先立つことは出來ない。先、眼を射るその銀白の輝やき、靑碧の澄明、飽くこともなく見つめる。その次ぎに來る一つ一つの峯への親しみ。北岳の尖峯、間岳の大塊、と、一の起伏一つの皺にも、夫々の懷しさを浮べ、幼友達の眼元、口元に感ずる親しみと同じやうな感情が湧いて來る。

尾根を本栖に下りやうとしたが、竹に遮ぎられて果さず、麓の村にもどったのは、暮れやすい冬の夕方であった。こゝで、夕飯をすませて、夜行にと、再、裾野を白糸へと歸る。そこには、自動車が呼びよせてある。一日の山の疲れは、夜街道を歩くのに相當つらい。しかし、月明の裾野道、富士の姿は、空に溶けこむかとも思はれるやうに澄みわたって、長く引く裾は、全く美しい。この曲線は、この日本に生れたものでなければ、わからないのだ。雪と岩との氷河にはこのムードは決して求められない。それだからといって、女性的なりと、貶し去ることは出來ない。山が、魂は、千年の昔から、この曲線に培はれて來たのだ。この靜かな月明の富士の夜こそ、土佐繪を生み、浮世繪を生じたものでなければならない。誰か、油繪のみが藝術であるといひきれやうぞ。四人の男女は、默々として、各の胸に、各の想をこめて歩いていつた。語るべくも

なく、餘りに美しい自然に壓倒されながら。

○立場川と川俣川

吉田喜久治

信州から甲州にかけて、曠漠涯しなき山裾を擴げ悠々として甲府盆地に君臨する八ヶ岳の、かの雄大なる高原と幽暗なる森林にめぐむいくつかの幽澗、殊にその尤たる立場川及川俣川は、私達山仲間にても餘り知られてない靜閑境である。

勿論前人未到など云ふ程度のものではないが、近年著しき登山の隆盛に伴ひ、必然的尾根筋の俗化を免れざる今日に於て、如何に限りなき靜寂を籠めて、今なほ神秘を藏しつゝあるや、そこには登行者の日頃慕ふてやまざる、山々の抱く眞の孤獨寂寥の姿に接し得るであらう。

私は本年(昭和四年)五月上旬小閑を得て、友人大貫萬里氏と共に立場川俣兩谷を跋渉することを得た。以下簡單に當時の行程のみを略記して見やう。

立場川

立場川(タツバガハ)は釜無川の支流にして、水源は赤岳、中岳、阿彌陀岳の谿間に湧出するものである。

甲信國境近き中央線富士見驛より立澤(タツサハ)へは最近新道が拓かれてゐる。

驛を出て、左は鐵路に沿ひ、直ぐ立澤橋によつて鐵路を横切り、赤松の純林を切開いた赭土道を辿つて立場川畔に沿ひ、約一時間にして立場川の名を生む、立澤及羽場(ハバ)に通ずる分岐點に達する。

路はなほも右に立場の谷を瞰下しながら、奥へ〳〵と遡るもので、地圖にある小徑の符號に相當するものである。

私達は急ぐ旅でなかつたので、路を辿らず、河通し行くことにして、路に分かれ、立場川に西面した段丘地は、板屋根に石を置いた家などある、立澤を經て、岩石壘積せる磧を遡つた。

廣河原より下流の立場川は、流域に開墾せる耕地に引水せるため、水量少く、震災後に於ける丹澤山塊の玄倉谷や中津川谷のやうに河幅廣濶にして、水流は緩く河中を蛇行し、平凡な谷渉りであつた。

右岸は主として岩肌露出せる崩壊地であり、左岸は傾斜緩く、密樹に蔽はれてゐる。

圖にある小徑の符號は一六〇〇米突附近にて消失してゐるが、該路は一六〇〇米突等高線について河に下つてゐる。この下つた地點は廣河原と呼ばれる。

この邊りより谷は漸く狹まり、徑は左岸に移つて急激に細り、遂に踏跡となる。

獨立標高點二二四八米突の圖を有する隆起は、立場山と稱し、濃碧の密樹を繞繞して谷奥に聳えてゐる。

一九四四米突獨立標高點北下邊より、兩岸に壁が現はれ、小徑は押迫まつた谿底を右岸に左岸に渉りかへすやうになる。

濁流溢れて殆んど岸とすれ〳〵に漲溢し、河床に蟠踞せる岩石の上を乘越し、或は激突しては飛沫となつて散り、越え易き淺瀨もなく、徒渉に惱んだ。然しながらこれは雨後の一時的現象にて、平常は水嵩少いとの由である。はたして翌日は三分の一位に激減して、河中の岩石露出し、徒渉も膝の上を濡らすことはなかつた。

立場山西方の崩壊地は三又薙と呼ばれる。

西岳の北下、立場山麓に山小屋あり、宿泊することが出來る。小屋の傍より立場山への登路がある。富士見驛より小屋迄約五時間を要する。

小屋より右岸に沿うて行くと、徑は河畔に導く、此處より上流は徑は杜絶えるが、河中のよさそうなところを撰んで遡ればよいのである。

小屋の稍上手左岸に「要石」と呼ぶ巨岩あり、岩上を細流がほとばしつてゐる。

やがて水流は二分し、左は本流であり、右は擬寶珠岳(烽場)西北谿に生ずる烽場の澤である。

合流點を過ぐると、間もなく左岸に洞穴あり、風穴と稱してゐる。

立場川の所謂「大瀑」は立場山東下に位してゐる。瀑壺の前に巨岩がある爲に何處よりするも瀑身全體を窺ふことは出來ない。瀑の左岸に暗洞があつて、胎内くぐりと稱し、容易に通過することが出來る。

暗洞は瀑の上より數米突降りたるところにて二分し右は瀑の側面に出で、左は瀑を去る十米突の地點に出るのである。

私達はこの入口に氣付かざりしためと且大瀑は右岸の割目を上るとの由なので、最初に右岸を試みたるも、割目約二米突にて且氷結して、一個所棚を肩を借りて上り得るも、上部が手强きため斷念し、左岸の洞穴の入口を一つ距てた岩の鼻を試みて失敗し、致し方なく、瀑より數十米突戻つて左岸に、取着けそうな所を見出して、四米突程の立壁を友人の肩と手を借りて上り、上部は樹木を利用してザイルを使ひ、高廻りして瀑の上に降つた。

大瀑の上流に小瀧あり、流倒木など利用して殆んど崖側を捲かず通過することが出來る。この邊りにて阿彌陀岳南山稜の末端の岩稜が雲際に峻聳するを俯瞰する。

瀑場を過ぐると權現岳に生ずる小澤が數段の小瀑をなして落込んでゐる。墓瀧と呼ぶ。

阿彌陀岳南山稜の垂下せるところ、立場谷の核心をなし、溶岩を侵蝕して數十米突の深谿道を穿ち、削立せる岩壁の下部は殆んど冠つて、所謂廊下を形成し、雪渓の杜絶えるところ、瀑あり、深潭あり、急湍ありて岩根を洗ひ、河通し通行は不可能である。

この廊下の入口に右岸を一寸登つたところに大洞穴あり、大石室と呼ばれる。尙廊下は權現岳側を高廻りするもので、夏期はいざ知らず、殘雪深き五月上旬には、山脚に氷結せる個所多く、可成の緊張した高廻りであつた。ザイルは必ず携帶を要する。

高廻りを終えて、クレバスの連續する谷底を暫く辿ると、可成りの瀑に逢着する。この瀑は右岸を捲く。

私達は中岳阿彌陀岳の最低鞍部に上る豫定であつたが、濃霧のため見透利かず、二岐せる雪渓を右に採り、

赤岳南西面の雪渓を上りつめしため、雪を離れて壁に突當り、登高を阻まれて、急峻なる雪渓と壁に苦闘の末、赤岳の西肩より發する支尾根に取り着き、中岳に連互する山稜に辛うじて達することを得た。尙源流地には雪崩の出た跡があつた。

川俣川

川俣川の上流は、一名地獄谷と呼ばれ、盟主赤岳の胸深く刻み込まれて、險惡なる垂澤をなしてゐるのである。

私達は縣設大キレット小屋より本流に降つたので、源流地は雪渓を辿り、稍々降るに及んで、雪渓斷續するところ多く、二三度左岸の急峻な山脚を辷り易き陣竹と、凍結せる岩壁をへつることがあつた。

大キレットの澤が本流に合する邊りより漸次に崖側が開けて、ゆるやかな斜面には森林が打ちつゞき、岩塊が累々として谿底を充たし、水流は廣い磧の中間をゆるく流れてゐる。兩岸の所々に洞穴あり露營に適する。

地圖に頽岩の符號ある地點は、所謂「川俣渓谷」と稱し、奇岩怪石の錯綜せる谿澗を、川俣本流は到る處、岩に激して急湍となり、崖に逢ふては飛瀑となり、その落下せるところ紺碧湛ふる麗潭と化し、或は重く油のやうな靜となつて流れてゐる。

名勝地には山麓大泉村の手によつて、亞鉛板に墨書せる掲示がある。徑は主として右岸に通じてゐる。

權現岳東南谿に發する支流は、春小屋澤と呼ばれ、春小屋澤の本流に合するところ卽ち川俣川の名の存する所以である。

川俣には明治十四五年頃玆に移住して開墾に從事せるもの二三戸ありしも、皆轉退して其後居住者なし。

尙中央線小淵澤驛より佐久鐵道小海驛に通ずる未完線は、目下小淵澤方面より工事中にして、川俣右岸に停車場を設け、兩三年後同線完成の曉には人口の移住を見やうとのことである。

歸路は井出原を横切つて、東井出に出で、長坂驛に

出るもよし、川俣川に沿うて、原長澤、秋田村を經て長坂驛に出るのも大差はない。

ペンを擱くにあたつて、左に記錄を掲げ、參考に供する次第である。

記　錄

昭和四年五月八日。雨。午前七、三〇富士見驛。八、三〇下羽場立澤への分岐點。一一、三〇廣河原。午後一、三〇立場谷小屋。

九日。曇天時々降雨あり。午前七、一〇小屋。七、四〇烽場澤。七、四五風穴。八、〇〇—九、五〇大瀑。一〇、〇五蓑瀧。一〇、四〇大石室。午後一、四〇源流地二俣。三、四〇支尾根。四、〇〇赤岳中岳山稜。五、五〇大キレット小屋。

十日。雨後晴。午前六、三〇小屋。七、一〇本流。一〇、一〇古坂牧場入口。午後一、二〇川俣溪谷。二、三五川俣。六、〇〇長坂驛。（昭和四年五月廿日記）

○三國嶺下の櫻郷

無比の添景を得たる紅山櫻の美觀

大平晨

花といへば櫻、櫻といへば吉野山を聯想するのは、殆ど先天的我國民性となつてゐる。

日本一の櫻の名所はと問はば、直ちに吉野山であると答へるのは、三尺の童子も悉くとは言ひ兼ねるが、苟くも小學の門を潜ること數ケ年といふ兒童は、知らぬものが無い程、それ程著名な事實である。

關西には、尙櫻の名所として嵐山がある。これは吉野山櫻を移植したのに基くといはれるが、元來同地附近から、武庫川の沿岸大峯山あたりには、この種の山櫻が多いのである。

予は兩者の花時に屢々接したのである。嵐山には、桂川の溪流美、岩石美の添景はあるが、惜いかな規模小なる憾がある。吉野山は、其樹數の點に於て、其密生の點に於ては、全國無比であらうが、惜いかな、水石の添景を缺き、且つ其大部分は、人工的植栽に屬し、區劃餘りに井然として、雅趣に乏しい憾があるといへるであらう。

園藝變種所謂里櫻の植栽を以て、漸次名聲を博しつ

ゝあるもの、近時各地に續出する趨勢ではあるが、其景致其氣品の點に於ては、山水自然の添景を得た山櫻の自生的散在に比すべきものは無いのである。

日本旅行協會發行の『旅』第六卷第四號に「全國櫻の名所番附」といふを掲げ、大關として越後加治川をあげ、前頭の中には、越後小山田が見える。又同號「東西南北櫻花」の題下に、「小山田(ヲヤマダ)の櫻は、山を掩ふて、紅雲の搖曳するが如く、咲き亂れてゐる」と註し。又「登別は、北海道特有の紅山櫻が多いので、艶麗を極めてゐる」と書いてある。

小山田は、古來越の小芳野の稱があつて、菅名(スガナ)岳の一角より其山麓に亙り、野生及植栽に屬する巨木が可なり多い。三好博士によれば、彼岸櫻であるといはれる。花は白色、花瓣は頗る狹く、先端の切込が深い。若芽は概ね淡綠色を呈するが、微かに赤味を帶びたのもある。又花にも蕾の時には、極めて微かに紅色を帶びたのがある。されど『旅』の「東西南北櫻花」にいふ「紅雲の搖曳するが如し」とは、事實で無い。遠望李花の觀あつて、淋しみを感ずる。

加治(カヂ)川のは、延長三里餘に亙り、兩岸堤上に並列する樹數は六千餘。大正御大典記念の事業で、植附後まだ十數年ではあるが、植種は早咲吉野卽ち大吉野に屬し、樹性强健成長迅速、容易に大木となるので、發育優良なものは、幹徑旣に一尺以上に達するのが多い。この種は、花大形で、淡紅白色を呈し、花附亦豐富であるので、頗る壯觀を呈するが、唯遙かに飯豐山(イヒデサン)の支脈二王子岳の雪峯を添景とする外、全體の景致が單調に失するの憾がある。

予は臺灣に於て、其特有といはれる阿里山緋櫻と、霧社白櫻とを見た。前者は花色餘りに濃紅に過ぎて鮮麗味を缺き、且つ充分に展開せぬので、陰氣の感じがする。後者は花小形で、青白色を呈し、小山田のよりも更に淋しい。予はビヤナン鞍部附近に於ける、予が所謂ビヤナン紅櫻を禮讃した。其若芽の赤味を帶びた點に於て、其花の鮮麗な淡紅色を呈する點に於て、其花瓣の丸味を呈する優雅さに於て、少からず予が感興

を引いたのであるが、惜い哉樹數稍乏しき憾があつた。

我國の櫻花は、國花を代表すると同時に、又春花を代表する。從つて氣品高潔の中、生々たる陽氣を發揮する點に於て、吾人は謹んで謳歌を捧呈するのであるが、予は我越後三國嶺下に僻在する三國村三俣(ミツマタ)村附近の山側溪谷を飾る、自生の山櫻に於て、眞に櫻花禮讃の滿足を得たのである。

其品種は紅山櫻である。花葉同時に生ずることは、白山櫻即ち吉野山櫻と同樣であるが、花は大形濃紅である。されど阿里山緋櫻即ち緋寒櫻のやうに、濃紅に過ぎて、暗色に陷る缺點が無い。實に程良い鮮紅色で、光澤がある。殊に花梗太く短く强硬であるので、滿開に際しても、下垂せぬのが、如何にも勇ましい。枝は比較的太く伸び揚り、全體の樹振枝振は、花振葉振と相待つて、非常に雄壯な快感を與へる。若芽は苞や萼と共に甚だ粘る。

若葉は稍赤味を帶びるのが多いが、淡綠色の者もある。そして充分に成長すると深綠色を呈し、廣卵形で厚く、先端急に尖り、緣邊の鋸齒は、比較的粗大である、又支脈の凹入は著しい。花附頗る豐富で、老樹となると、滿枝の花叢は、殆ど若葉を蔽ふ觀がある。花色は可なり濃淡にも差があり、花瓣は概ね豐滿ではあるが、稀に細いのもあり、又極めて稀に重瓣のものや、一花六瓣といふ珍品もある。

地は清津川や二居(フタキ)川を擁する山側溪谷で、櫻はブナやナラ、カヘデを主とする闊葉樹林を點飾する。花時には、鮮綠滴るばかりのブナやカヘデの若芽と、奇しき灰白色を呈するナラの若芽に伍する、鮮麗極まる櫻花の紅雲は、更に白瀨碧潭と相映發して、眞に仙境花郷の感がある。

萠え出た新綠の美は、何人の目にも若々しい希望に滿ちた陽春の氣分を與へるものであるが、ブナの新綠は、特に鮮麗を極め、山側を彩どる其團々たる美觀壯觀は、正に新綠美の極致を呈する。多くの闊葉樹に先だつて開舒する、鮮麗極まるブナの新綠は、この地櫻花の添景として、特に禮讃せねばならぬ。

このブナの大觀を點飾する、紅山櫻の美觀を探らうとするには、萱附(カヤツキ)より舊道二居峠を辿らねばならぬがこの方面は、溪流美の添景を缺くので、往復道を異にするを要する。

花期は、五月中旬である。

二居部落を過ぎて、南に進むこと半里許り、沿道櫻樹も散點するが、左手高く山側肩部に蟠る一老樹がある、花色特に濃艶、樹姿亦雅致を呈する。元來この地方には、紅山櫻の自生が夥しく、幹徑二三尺以上のも多かつたのだが、近時細工物の用材とすべく、伐採されたのが多いとは惜い。

秋期清津峽谷を彩どる無比の紅葉美は、この紅山櫻の紅葉も亦一要素となつてゐる。

二居部落の東南に峙つ大源太山(ダイゲンダサン)、仙ノ倉山の頂上附近には、ミネザクラが多い。其岩壁に生ずる幾百年の老樹は、高さ僅かに一二尺、古色蒼然たる珍品がある花色淡紅、花瓣稍細い、果實は風味甚だ佳良である。

予は曾て、清津峽谷の紅葉美に對し、黒部峽谷と相伯仲すと、禮讃したのであるが、今更に、山水新綠自然の添景を得た、清津峽谷及附近山地の自生紅山櫻が飾る、仙境花鄉を紹介せんと欲するものである。

(昭和四年七月一日稿)

○平戸嶋の山々

竹内亮

平戸嶋は長崎縣北松浦(キタマツラ)郡に屬し、外交史上に又宗教史上に名高い平戸港のある處である。云ふ迄もなく平戸は古くは奈良朝時代から降つては德川時代の初めに亘り支那或は西歐諸國との交通貿易の要津であり、しかも長崎出島に和蘭商館が移される迄は商館はこの地にあり、今猶土塀(オランダ塀)に用水井戸(オランダ井戸)にその遺蹟を留めて居る。

私は昨年十一月廿七日福岡から汽車で佐世保に至り更に乘合自動車で肥前日ノ浦に行き十數分の發動機船の渡船で紺青なす平戸海峽を大黒島の青螺を右にして平戸に至り、翌廿八日は島内一の高山安滿岳(ヤスマン)に登つて

原始林相の美を探り、更に往時平戸の副港として榮え又明末史上に活躍した混血兒鄭成功の生れた川内(カハチ)浦を訪ひ、廿九日は自動車で島の中央を南北に縱貫する道路を沿道の山々を仰ぎながら島の南端に近い志々伎港に至り約半日を附近の植物採集に費やし、卅日は午前中平戸の史蹟を歴訪して、午後海路九十九島の絶勝間を縫ひ佐世保に上陸して汽車で福岡に歸つた。

島は南北の長さ約四〇キロ、東西の幅約八キロ、周廻約二八〇キロで沿岸の出入の多い島で、島内全部丘陵起伏し、平地少なく、河流にも大きなものが殆んどない。地質調査所の地質圖によると島の北及び東は玄武岩地で一帶の臺地をなし、西及び南は安山岩類の岩石から成り、山は孤立性で島内で著しい山は皆その側にある。

斯樣な地勢の島であるから山と云つても大したものもなく、安滿岳が島内第一の高山といつた處で高さ僅かに五七八米にすぎず、他はせいぜい三、四百米臺の山が高い部類に屬する程度のものである。しかしそれ等の山々は山形の奇拔なのが多く低い割合には可成美事なアプローチをもつものが多い（山の標高はすべて地質調査發行廿萬分一地質圖平戸號による）。

その内でも島の最南端の半島部に聳ゆる志々伎岳の如きは高さ三四七米にすぎないが、志々伎港から志々伎灣をへだてゝ對岸に望むと半島全體に裾をひろげ、山頂突兀として奇岩中天に聳ゆる有樣は中々奇觀であり、又壯觀である。山に十城別命を祀り、本宮（宮ノ浦）中宮、上宮の三社あり。遠近の信仰篤く、登拜者は多く志々伎港から舟で對岸の宮ノ浦に至り密林を穿ち、奇岩を攀ぢて山頂に達する。山は南直ちに外海に臨み展望甚だ開闊雄大であると云ふ。

志々伎港の東に近く濱岳がある。高さ二三七米、山勢溫和な草山であるが、その北にある佐志岳及び屏風岳は二峯南に相並び高さ前者は三六三米、後者は四三四米に達する露岩の多い草山で山容稍々富士に類し、しかも山勢甚だ峻削である。

佐志岳の北東には有僧都岳がある。高さ三五八米、

其の東に慈眼岳があつて高さ三九四米、共に頂面の稍平坦な根ばりの大きな草山である。

島の北端は要塞地帶に屬するが、そこには日岳がある。遠望も可成立派な臺狀峯であるが、山頂の眺望もいいとの事である。山麓に田ノ浦礦泉場がある。

次に島内一の高山安滿岳は有僧都岳の北約八キロ卽ち島の中央よりは稍北によつた西側にあつて、島内一の名にそむかず山勢中々雄峻なものがある。島内の地勢はこの附近一帶で最大の起伏に達し、島の中央縱斷道路もこの山の東部で、島内最高の峠である大越の峻坂を通じて居る。遠望に於ては安滿岳の主峯は南西から北東に稍々長がく平たく、その間三つの鈍い隆起があり、最高點は南西端にある。少しく南に廻つて望むと最高點の西側に國見岳の稱ある懸崖のあるのが見える。一帶の山勢は主峯を中心として概して平頂な高原狀をなして廣がり、谷淺く、水亦細い。山の中腹以上は蒼々たる常綠闊葉樹を主とし僅かに赤松を混じた原生の密林で、非常に美事であるが、山腹以下はスヽキの多い草原又は常綠闊葉樹の第二次的萌芽叢林で概して荒蕪の觀がある。森林をなす樹種は上木としてはシロダモ、アカガシ、イスノキ、シヒノキ、マテバシヒアラカシ、マツラニクケイ、サザンクヮ等でマテバシヒやアラカシは下部にアカガシやマツラニクケイは上部に多い。又赤松の美事な老木が多い。サザンクヮは山麓から山頂に亘り非常に多く私の行つた時は到る處にその可憐な白花を見た。樹下にはヒサカキ、ミヤマシキミ、ヤブムラサキ等の灌木や羊齒が多い。

山頂には白山比賣神を祀る神社があり、附近漁業家の尊崇篤く、毎年四月廿四日の祈年祭には遠近からの登拜者によつてにぎあふ由である。私が登つた時には平戸島の北に近い生月島の漁業家數人が西麓の春日から登つて、鰯網を新調したに就て豊漁の祈願に來て居た。この人達は拜殿から數町前の石鳥居前で履物を脫し、はだしのままで林下を通ずる蒼苔厚く蒸した石だたみ路をふんで參拜するのを見た。拜殿、正殿共に甚だ簡粗であるが、拜殿前の一双の石燈籠は安永七年に

時の藩主の奉納した由の銘があり、異彩を放つて居た。生月の漁業家の一人の話によると朝鮮近海に出漁の際歸航にあたつて最初にこの山の頂が水平線上に見えはじめるのが大變心强く、うれしいものだとのことであつた。

神社のすぐ背後は山の最高點で、西向した絶壁が深く、岩角にはウンゼンマンネングサ、イハヒバ、カタヒバ等の乾性植物の生ずるのを見た。最高點は東の一方はアカガシ、マツラニクケイ、ハマビハ、シャリンバイ等の密林で全く眺望がないが他の側は甚だ開闊雄大な眺めである。

登路は前記西麓の春日又は白石から山の北西側を登る裏山路にあたるものと、東麓中野から春日への路の中途から岐れて、山の南東側を白山權現の額のかゝつた石の一の鳥居をくぐつて、密林中の石磴をふんで登るのがあつて、中野から路程約四キロあり、普通の登路で表山路と云ふべきものである。私は午前七時半頃中野で自動車を降り、八時半頃その村を出て、一の鳥居に九時四十五分、頂上に十時四十分についたが、この時間は途中の道草を加えてあるから正味登り二時間半位のものであらう。

下りは路をかへて普通の登路でない南側の小徑をとり大越峠に下つたが、途中岐路多く迷ひ易く二三箇處では大分無駄足をふんだりして、峠迄一時間餘を費やした。（四・八・二六）

○新潟の親しき山々

藤島　玄

飯豐山と彌彦山とは、新潟の街に住む人々と云ふよりも、東方の飯豐山と西方の彌彦山とに圍まれた西蒲原郡、中蒲原郡、北蒲原郡、岩船郡の大平野に住んで其の山々の見える限りの人々には、心から限りなく懷しい山々なのである。

飯豐山は海拔七千尺、新潟、福島、山形の三縣に交界して盟主飯豐本山は、西方の重鎭大日岳と相對し中

間の御西岳を中心に南北へ重厚な主脈を堂々と張り、新潟市から直徑にして約十五里の距離にある。大江信濃河畔か又は海邊の砂丘に立つて望めば、北蒲原郡の蒜場山（ニルバサシ）（標高一三六三米）の雄勁な山稜の隆起から左に、豪壯無比な大日岳（標高二一一八米）の巨大な絶巓が、御西岳、飯豊本山を背面に隠して雲表に聳立し、北へと延びて急峻な北股岳（標高二〇二四米）となり、更に二王子岳の上に掉尾の雄峰杁差岳（インブリザシ）（標高一六二六米）を起して、終に荒川谿谷に落ち込む長大な連壁が紺碧の空に駢列する樣はなかなかの壯觀であるといへる。

尙ほ遠く東北方には、羽越國境の朝日岳連峰から以東岳や、日本海の波濤に浮ぶが如く突出した羽後の鳥海山の三角型の山影も望まれるが、餘程注意熟視しなくては見出すに困難である。

北蒲原郡水原町の齋藤木代枝氏が

飯豊に雪降りたりと云ひ捨てゝ曉寒く納屋に入りたる。と讀んだ歌は、實に遺憾なく蒲原平原に住める農民の境を現してゐるもので、例年十月二十日前にはもう飯豊大日連山の偃松や陣竹の綠は新雪で白く裝はれてしまふ。

幾日となく北國の沈鬱な灰色の空に閉込められてゐる山々が、白銀の肌をきらりと輝かす冷くも深く澄んだ朝、又は入日をうけて薔薇色に燃ゆる夕。吾等は手を休め足を止め、吾を忘れて暫くは大自然の壯嚴に打たれつゝも、一年が繰返す時の流れに、ふと永き炬燵の冬籠りを思ひ出すのである。

信濃川に流れる氷も絶え、雪代に濁りの增す春の水、三月も末になつて白魚糸魚捕りの漁師達が網引く頃になると、此等の山々は幾月振りで、豊かに雪（飯でない）を盛つた姿を鮮に現し始めるが、魔のやうに通り過ぎる吹雪にかき消されたり霞に朧ろとなつたりするので、焦燥だつ吾等は前衛の五頭山や菱ケ岳、又は二王子岳の雪を踏んで飽まで其神祕を覗はふと、ピッケルを磨きカンジキの紐を作るに忙しい。

四月も過ぎて五月となれば、飯豊連峰西面の豊富な

雪も、惜しい程目に見えて消えて行く、それに連れて殘りの雪が樣々形を代へて其度毎に少なくなつて行くのを眺めて、吾等の祖先は暖かい陽を浴びながら種子を蒔きつゝ、幾度もその目慣れた山の姿に見入つたことであらう。

彌彥山は海拔二千尺あまり、西蒲原郡の平原が日本海に盡くる處、海岸線に添うて南北に連り、西は海東は平野に圍れて、孤島の樣に聳立してゐる山塊である。新潟市からは直距八里、之を望むには長橋として名高い萬代橋の上が一番よい。

良寬坊で名高い國上山から北へと隆起して、彌彥山頂上御廟所の最高點は標高六百三十五米を超えてゐるが平である爲に、相對してゐる標高六百三十三・八米の多寶山を、新潟市より近い上に双肩を張つた山勢の颯爽たるものがある爲もあらうが、誰も初めは彌彥本山と見誤るのである。其の尾根は一旦低下して間瀨峠の鞍部をなし、再び崛起して標高四百八十一米餘の角田山となり、廣い家根型を成して、南方の多寶山と相對峙し、恰も蒲原平野を抱擁して日本海の荒い風波からかばつて呉れてゐるやうである。角田山の北の山脚は一旦日本海の中に沒し、四十九里の荒海の底を潛りて、佐渡ケ島の金北山に連つてゐるとの事である。

荒化(しげ)の前驅である雨雲が低く厚く垂れて、西の方に屏風と立つ彌彥山塊を黑く包むを眺めて、灰色の空、冷い雨烈しい吹雪に慣れた北越の人々は、諦めに似た心持ちで雨具の仕度に懸るのであるが、執念く離れまいとする亂雲の切れ目から西の山がおぼろに隱見し始めれば「そら西の空が明るくなつた、お彌彥樣が見えるぞ」と、雨の中や吹雪のうちにも、農夫は腰を上げ、漁夫は櫂を握り、人夫はテコを手にするのである。

飯豐山が年の流れを默示するものならば、彌彥山は一日の天候の前觸れともいへやう。この山から東の人はどれ程遠く離れてゐても、天候の目標として其日其時の晴雨を確實に卜知する。これは草鞋がゴム靴に代つた今でも昔と變りのないやうに、飛行機で旅する時代が來ても亦變ることはあるまいし、從つて山の信仰

も爰へないであらう。

飯豐山は遠くて高い山、年中雪の消え失する事なく險しい道には猛獸毒蛇が居り、時には天候の激變で人も死ぬる、餘程山に經驗の有る者か、信心の深い人ならでは登れぬ山と決められてゐる。實際近年迄の越後赤谷口は「山岳」奥羽號に載つてゐる沼井氏の記文の如く困難なものであつたが、赤谷線の開通や元の瀧谷溫泉卽ち今の飯豐湯ノ平溫泉の開湯や登山道路の開鑿等で、往年の難路は旣に昔話りとなり、此方面からの登山者や參詣人も相當に殖え、新コースも拓れたものゝ、まだまだ恐ろしい山、險しい路といふ考は取り去られたとはいへないのである。

之に反して彌彥山は立派な一の遊覽地で、新潟は勿論蒲原平野に育つた人は、十中の八九まで登山の洗禮をこの山から受け、そしてその中の八九迄はそれでお終ひになるのである。國幣中社彌彥神社の參拜後、お山へ登つて佐渡ヶ島を眺める人が年に三萬人を超えるといふ程盛であるから、登山道路は申分のない立派なものであるが、主山から多寶山への道は、昔は通つてゐたらしいけれども今は荒れに荒れて、猛烈な藪漕りに三時間の奮鬪を餘儀なくされ、往復に意外の時間を要するので、新潟から朝夕眺めて親しみのある多寶山を訪れる事が困難であるのを遺憾とし、昨秋御大典記念事業として彌彥神社の後援を得、貧弱ながら人の通れる程度の切開きを、北越登行會の有志と共に工場の休日を利用しては出懸けて行つて終に之を完成したから、今後多寶山へ訪れる人も相當あることと信ずる。

新潟市の人々も時期が來ると比較的登山を行ふ樣である。福島縣河沼郡臺倉山の大山祇神社は、數千の參詣登山者が有り、出羽の三山として全國に知られてゐる月山、羽黑山、湯殿山、又羽後の鳥海山や縣內では南魚沼郡の八海山などは可なり盛んであるが、これは主として講中による參詣の山旅なのである。

終りに彌彥山山林看視人高橋彌之八氏から聞いた儘の彌彥山塊頂上附近の植物の名を記して見る。

チャモンシヤ。クロモンシヤ。ヤマクワ。ヤマタマ

ギ。シナ（ウルキ）。ヤヅメ（ヤマツゲ）。ナラ。ハン。スズミ。ジシヤ。モミヂ。ハンノキ。クロモジ。マンサク。

昨夏牧野博士の新發見命名せられた彌彥笹は、幹と葉の裏に毛があるもので、椿笹より稍小さい。

○早春大武川を遡る記

黑田正夫

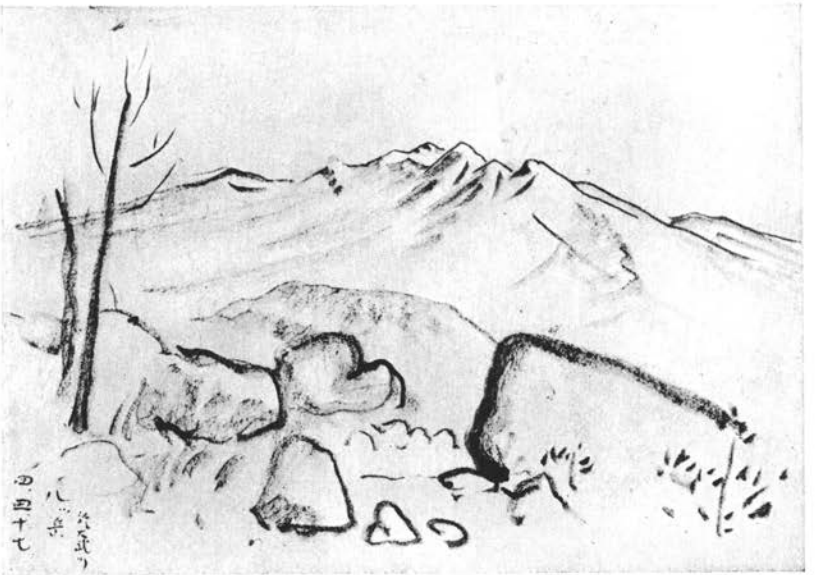
一

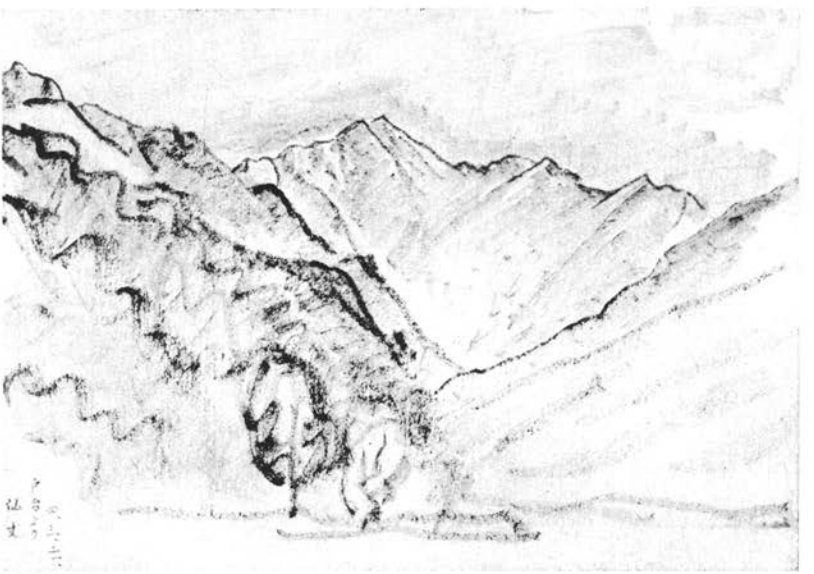
既に彼岸といへば櫻さへほころばむとするに、甲斐なる北巨摩の寒驛日野春の曉は尙寒し。星座蝎の尾は蹶き山脈に切られて鋏のみ中空に燦々たり。妻初子と携へて、柳澤に春吉を訪れむとす。此行戎語、亞爾比仁須武の感激に醉むが爲ならず、唯名山を愛して峽中に入らむのみ。春吉の寓に到れば老嫗戸を繰るあり。趣を通ずれば好爺春吉起き來る。曰く、月餘、病を得

床を捨てゝ未日あらず、憾らくば行を共になし得ず。旨を尺牘に托す。未見ずやと。依つて獵師牛田重義を具して其身に代ふ。

三月十七日午前八時柳澤を出發す。春吉亦從ふ。野に出でて家人の炭燒を補けむとす。斐鑠たる哉。藪ノ湯に到る野に春日遲々たり。未芽萌えずと雖、雜木の梢に生氣あり。路傍の草色靑からざれども、春の來れるを知る。

維石巖々たる駒岳、白雪に彩られて聳立す。彼春吉を遶る此自然たる、美しからずや。此の中に生き、此の中に逝く。彼亦命を知れり。顧れば八ヶ岳の容姿、碧空に浮く。艶麗之に勝るものなし。藪ノ湯を過ぎれば、大武川の谷狹り磧に步漸々遲し。篠澤合流す。谷豁けて草丘に春光輝く。此地春吉その家人と業を營む處なり。尙暫從ひ來る。物言はざれども互に訣を惜む情切なり。奔流を跳躍して對岸に渡らざるべからず。春吉長桿を以つて之を助く。渡し了りて甫めて別を告ぐ。流を遡り流を下りて、益々離る。互に相顧み、帽





（上） 大武川より見たる八ケ岳

（下） 戸臺より見たる仙丈岳　　黒田正夫氏のスケツチより

を振りて去り難し。意を決して遂に去る。孤影蕭然たり。眼瞼の熱きを覺ゆ。故を知らず。

二

春吉去りて三人、默々として流を遡る。峽彌迫り、流彌激す。一ノ澤を過ぎ二ノ澤に到る。共に鳳凰の支岫に源を發す。時に午後一時。簞を開き溪流に飲す。此の上流大武川瀑をなすあり。通過し難し。徑岫を迂廻す。二時間を費やして赤薙澤落合に著す。泉流凍冰して樏を穿さるべからず、景色未だ佐保姫の訪るゝを知らず、殘雪、落葉枯草を覆ひて、又生色を見ず。唯潭、碧空を映じ、漣、太陽に輝く。以て僅に嚴冬の去れるを覺るのみ。赤薙澤より時餘を費やしてヒョングリ瀧に著す。夏日水多ければ、飛瀑岩に激して空中に跳らむも、今は碧氷岩に懸りて、溪流僅かにその下より流れ去るのみ。然れども、その凍結せる狀、亦飛瀑に勝さるものあらむ。時に四時十五分。瀑上に岩ありその蔭以て雨露を凌ぐべし。十丈の岩小屋と稱す。上流には大岩下の小屋まで宿泊に便なし。尙數時間を要す。依て止るに決す。疲勞甚しく、夕陽尙岫に輝やくに旣に寢囊に在りて華胥に遊ぶ。

三

陽未昇らず、焚火獨り閃光を飛ばし、紅蓮を騰ぐ。凍瀑音なく星辰肅たり。準備終れば朝暉高嶺を照らす。七時を過ぐること半時。小岫を迂して瀑上に下る。直に空澤（カラサハ）の會するあり。摩利支天より生ずる支流なり。源を仰げば、摩利支天の岩峯天空に聳ゆ。是より大武川は大岩溪を埋む。岩間を進めば徑左側の岩壁を攀づ岩磐凍結せるを樏によりて漸々歩を固め以て過ぐ。再び溪流に下る。凍結し、中央僅かに流水の奔るを見る處々左し、右し得べけれども、深潭は通過し難し。大瀑に會すること二回、共に碧氷斷崖を覆ひ、攀づべくもなし。夫の須彌山の北壁を想ひ、二千數百丈に於けるその困苦、意の壯とすべき、かゝる小天地に倔倔するものゝ推すべき所に非ず。徒に蠢動することの憐れ

なる、何すれぞ、天吾に與ふるに貪なる。然れども、歩進まず。午といふに漸く大岩下に達するのみ。岩小屋と稱するもの、僅に軀を横へ得べきも、風雨以て凌ぐべくも非ず。尚半日あり。地圖を案ずるに、優に仙水峠を越し得べし。高距僅に四百米、距離亦一粁を多く出でず。依つて食後直に出發す。小岫を迂せば地獄谷會す。予想へらく、高標二千米にもなむなむとする此地に來れば、必や殘雪谿を埋め雪艇以て用をなさむと。然るに尚岩石凹凸し、流水その間を通ずるに非ずや、何するものぞ。依つて徑に從ひて急坂を登る。坂は北面するより雪膝を沒す。雪艇を穿てば坂幅狹く徒らに前後を重ぬるのみ。遂には階段法に依るに非らざれば如何ともすること能はず。雪粒大きく旦凍氷せる故に粘性なく、剩へ傾斜急峻なれば、尺に餘る雪層は崩壞し、地表の岩角に到りて漸止まる。困難敢て意に介せずと雖、大塊の自轉、止むべき術なし。三時間を費やして、二百米に達せざる傾斜を登る。以て行の難きを知るべし。その南面には大武川直に淙々の響をなす。殆ど下らずして達し得たり。時四時を過ぐ。仙水峠は越ゆべくもなし。宿らざるべからず、樹下は雪あり、雪なければ、平坦ならず、依つて磧に於て岩蔭砂上を求め寢食の地を撰ぶ。

四

春風梅花を發くべきに山間の峽谷四圍氷雪に閉され月光餘薫を傳ふべきに晴嵐將に激しからむとす。唯雨雪の夜半襲はざらむことを希ひ寢に就く。重義は覆ふべき寢具なく、岩陰、焚火を脊にして臥す。半月西に傾く頃颱俄かに來り、徑尺餘の薪、空に舞ひ、二人を入る寢襲さへ宙に浮かむとせり。重義の苦痛察すべし漸にして、天白み朝食を烈風中にて採らむとするに、六華遂に下る。瞬時にして積ること寸餘、直に雪を冒して仙水峠に向ふ。咫尺を辨ぜず、風烈しき時は歩行さへ難し。積雪を避けて峠より西方の瘠尾根を攀づ。二時間を費やして僅に二百米を上り、而して東方に等高線を進む。半時にして峠に達す。此の間樹木鬱蒼と

して雪あれども暗し。爲めに風雪烈しからず。然るに一度峠に出づるや、風と雪と猛然と襲ひ來り、剩へ疊々たる岩石は雪艇を用ゐるに由なし。負へば吹かれて蹣跚として歩行甚難し。倒るゝこと數回、漸にして林間に達す。始めて雪面滑降し得べし。雪艇を穿てば、苦難忘れたるかの如く、直進曲回、樹間を縫ひ溪上を滑り、飄々乎として風を御するが如く快極りなし。惜らくば北澤小屋餘りに近きを、家を出てゝより始めて軒を得、時に正午。日暮れむとするに尙六華紛々たり。

五

未明窓を開けば風雪收りて曉天に星輝やく。卽ち準備を整へ初子と二人仙丈岳に向ふ。蠶々たる大樹、欝々たる蒼林、悉く新雪に粧を凝らし、旭日之を照らして虹光燦たり。春吉澤を上る。此年雪量少なく、若木未埋まらず、百折、萬曲、漸々として登高す。天何するものぞ、一歩進めば一雲生じ高きに從ひて雲霧益々起る。朝與岳の頂を望み得るに到れば既に雲之を包み、駒ケ岳を看れば風しきりに雲を飛ばして之を覆ふ。北岳の高嶺望むべくもなし。吹雪遂に野呂川の峽を壓す。已ぬる哉。時利有らず。下りて學窓にもどらむに如かずと、意を決して還る。雪質甚良く滑走亦快適、正午小屋に著し、二時出發。月明に戸臺川の磧を歩く。杳として極なく、慘として聲なし。浮雲東に飛びて月光朧々として道を分たず。峽奥徒に暗く、秀嶺雲中に沒して見えず、寒泉冰りて白く風蕭々として寒し。

昭和四年五月十日筆をおく。

○「なかのりさん」に就て

なかのりさん、といつても山の話でないことを豫め御斷りして置く。

古民謠は概ね作者不明なのが普通だが、その判らぬ事が却て民謠らしくてよいと言はれて居る。

山紫水明の木曾山中に生れた、我國で最も上品な民謠の木曾節と木曾踊卽ち「木曾のなかのりさん」も亦作者や起源等は詳でないが、萬葉集に、

雜錄　○なかのりさんに就て

奥十山につづく御嶽山の麓に古より木曾踊の名は知られたり。

とある故、隨分古くから人口に膾炙してゐたものであらう事は想像に難くない。

奥十山は、とりもなほさず小木曾の事で、津島壹岐編するところの木曾案内を見ると、

△小木曾　藪原の西方木曾川の上流の溪谷にして木祖村に屬す。其高峰を鉢盛山とす。小木曾又荻曾に作る。蓋し麻を產する多きによる。小木曾より境峠を越え奈川村に出で野麥街道に合す。此地溪深く浮世を離るること遠ければ風俗の自ら異る所あり。古來男は耕し耘り女は麻布を織るを業とす。又年若き女は木賊又は『シナ』の皮を脊負ひ藪原邊に出でて鬻ぐ。之を小木曾女といふ。恰も京の大原女と同じ、麻衣は木曾の名に因みて奥山里の男女の常着なり。

とある。而して此の小木曾から更に山奥なる御嶽山麓の桃源境西野、末川等の諸村が、まさしく木曾踊發祥の地だと言はれて居る。木曾案内に、

△木曾踊　小木曾の山につづきたる御嶽の山麓なる西野末川等の諸村は、古代より木曾踊といふ風を存せり。村の祭日には必ず行はる。七十路八十路の祖父、老婆より、幼き孫も、若き娘も、うち交りて扇もてうたひつつ舞ふ樣、一種特別にして古雅愛すべし。婚禮の酒宴にも謠はうたはず、祝の古歌をうたふ。

とあるが、彼の家庭舞踊の研究家として著名な、田邊尙雄氏をして『盆踊の三要素たる歌詞と音樂と踊り方との三拍子揃ふて、最も上品な、最も面白い、且つ最も藝術的なるものは「木曾のなかのりさん」を措いて日本國中に他に一つもないと信ずる』とまで嘆賞せしめたところの、まさに古雅愛すべき此の踊は、往昔は神踊の類ひで自然に傳はつたものらしく、今から凡そ五百年前には、風流踊と稱せられて居つたのである。

偖て、おほよそ民謠を好む程の者の愛誦措く能はざる『木曾のなあ、なかのりさん、木曾の御嶽さんは、なんぢやらほい、夏でも寒いヨイヨイヨイ』の掛言葉「なかのりさん」が、どういふ意味なのか、判つて唄つ

てゐる人は、恐らくは無いであらうと思ふ。余も永いこと何の意味かと考へもし、また多くの木曾に關係する古書を渉獵したが徒勞に歸したので、結局これは、馬に乘りたや木曾路の旅は、さんぼこうじのなかのりに

といふ歌詞もあること故、その「なかのり」から導かれたものに相違あるまいと、臆斷したのである。何故なれば此の「さんぼこうじ」(三寶荒神)といふのは卽ち原則(?)として、三箇の連結された鞍(座席)を置いた、俗に言ふ「荒神乘り」の事であつて、其の中央へ乘る者を指して「なかのり(仲乘り)さん」と言つたからである。

然るに去る昭和貳年に、東京帝大司書官の植松安氏が『慶長七年。木曾御拵定並に請取り渡帳』といふ古記錄から、偶々、

米七十五石右樽かり申候仲乘り給に渡す手形有り此人數七十五人但し一人に付一石宛內二十六人は夏川の仲乘り四十九人は冬川の仲乘り。

といふ條を發見された故、より確實な證據の擧らぬ限り、これが「なかのりさん」の語意を明らかにすべき最も有力な記錄であらうと信ずる。

言ふ迄もないが、樽は未だ筏に組まぬ一本々々の木材の古語、かり申し候の「かり」は川狩のこと、夏川冬川は運材上の用語であつて要するに筏を組んで木曾川を流すことである。

是に由つて之を觀るに、元來が木曾川を中心として發祥した民謠であつてみれば、「なかのり」卽ち仲乘りは筏乘りと解するのが妥當らしく思はれる。而も鳶口一本を生命として、巧に筏を御し乍ら激流を乘切つて行くといふ荒仕事には、どうしても敏捷な動作を必要とし、且つ長時間善く勞働に堪へ得る、頑健な若者の手を借らねばならぬ故、仲乘りは「筏乘りの若者」を指した語に他ならないと、考へ及ぼすことができる。

こんな瑣細な問題で貴重な紙面を塞いだのは甚だ恐縮だが、玆に聊か鄙見を述べ以て會員諸賢の御示敎を仰ぐ次第である。(閑古鳥)

雜報

○海外彙報

フィルヒナー氏中央亞細亞探檢——フィルヒナー氏（Wm. Filchner）の一九二六年より二八年に掛けて中央亞細亞旅行は同地方に於ける地球磁氣測定がその目的の主たるものなりき。同氏は一九二六年一月出發、露國を經て、クルヤにて新疆省に入り、ウルムチ、ハミ等を通過しゴビ砂漠を横斷して蒙古に達せり。次いでスチョウ、リアングチョウ、ピンファン等を經てココ湖の附近カムバンにて同年より一九二七年へ掛けての冬期を過ごし、同地にて西藏のシガツェに向はんとせるプライマイヤー、マスェウソンの兩氏と邂逅し、資金及ひ食糧の缺乏の爲、此れより三人同行する事となり、同地を出發せるは一九二七年五月の事なり。斯くてプルイェヴァルスキー氏及びウェルビー氏の通路に沿ひて一行は西藏に入り、揚子江源流を經てラーアザの北方百五十哩のナクチュカに到着せるは同年九月なりき。

されど、同地より尙南方に、ラーアザ及びシガツェ方面に向ふ事を土人に依りて阻まれ、止む無く針路を西に採り、ナクツァン地方を經て、ガクトクに達せり。東經八十六度以西に於ては一行は、興味ある新コースを採りたり。ガルトクに達せるは一九二八年二月一日にして、同月半ばにはレイに到着し一行は此處にて解散せり。

ラインズ氏のカシミヤ島學探檢隊——ラインズ氏（Rear Admiral Hubert Lynes）ウィッスラー氏（Hugh Whistler）、オスマストン氏（B. B. Osmaston）及びラペルゾンヌ氏（V. S. La Personne）の一行より成る同隊は、一九二八年四月より七月に掛けて同地方の鳥類の種類及び習性の研究を目的として探檢を行へり。但し主腦者たるラインズ氏は止むなき事情の爲スリナガール出發直後、急遽英本國に引返したり。ウィッスラー、オスマストンの兩氏はゾジ峠（Zoji La）を越え、更にカージル、カールブよりカンギ峠（Kungi La）を越えんとせるも、同峠は尙雪深かく、その附近の適當なる所を越して、スル川（Suru）の流域に入り、此れに沿ひて下り、更にカージル附近より、シンゴウーシガー川（Shingo-Shigar）を遡りてデオサイ高原（Deosai）を訪れ、サラサンガ峠（Sara Sunga La）を超えてグレイス（Gurais）に於て、ギルギットに向つて三月間の探檢を行ひ來

れる、ラベルゾンヌ氏と合し、スリナガールに歸着せり。前二氏より、約七〇〇種、後者に依りて約四五〇種の鳥類齎され、尙前二者は鳥卵約四五〇個をも採集せり。ウィッスラー氏は此れに依り、「カシミヤの鳥類」なる著書を執筆せり。

トゥリンクラー氏中央亞細亞探檢隊——本探檢はエミール・トゥリンクラー氏に依り、西部コンロン山脈、及び西部タクラマカンの地質地理調査を目的として一昨年企てられしものにして、同氏一行はそれより約一年後、卽ち昨年八月十七日、レイに歸着したり。一行は一九二七年七月十二日レイを出發し、ラダーク東北に位するリインチィタン高原を經て北に向ひしも、糧食運搬上の困難に直面し、爲にケリヤダルヤ地方の調査は之を割愛して西北に轉じカラカッシュ上流に向ひ、キタイダワン附近よりアウレル・シュタイン卿の一九〇八年の通路を採り、カラカッシュ下流に降り、キルギィッツの好意に依り、糧食の補給、その運搬の便を得たり。スジェット・カラウルには十月七日に到着せり。(ト氏は運搬用動物として羊を推奬せり。)ラダークのアクサイチン高原附近にては精細なる踏査に依り、一八六〇年代の調査に依る現行地圖に甚だ誤謬多きを發見せりといふ。次いで十二月初旬、カシュガールに入り、此處にて西部コンロン山系と、西部タクラマカン地方とに一行は二分し、精細なる調査を試みし後、一九二八年五月再びカシュガールに戻り、七月二日出發、キリアン・ダワン及びカラコラム峠を越えて印度に向へり。トゥリンクラー氏に依れば、氷河時代にはチベット西部ラダーク東部はカラコラム及びコンロン山系と共に、巨大なる氷河の下に横たはりしものにして、宛も今日のスピッツベルゲンの如し。然して氷河時代終りて、此の氷河が融け去り、タリーム盆地は一大內湖となり、次いで乾涸し、東北風に依りて運ばれし砂を堆積せしめ今日の狀態を見るに至りしなりと。同氏は尙、ヤルカンドとコウタンとの中間なるピアルマに於て、太古の廢墟を發見したり。

伊太利カラコラム探檢隊——同探檢隊は一昨年伊太利山岳會のミラノ支部に依つて、主としてバルトロ氷河を中心として計畫せられしものにして、伊太利山岳會及び伊太利王立地學協會の支援の許に、スポレト侯爵 (H. R. H. The Duke of Spoleto) を隊長として、その主隊はムスタグーカラコラム分水嶺 (Mustagh-Karakorum Watershed) を、ゴールドウン・スローン (Golden Throne) の東、ブローウド・ピーク (Broad Peak) の北に於て越え、ウルドク氷河 (Urdok Glacier) 或ひはガッシアブルム氷河 (Gasherbrum Glacier) に降らんとする者なり。尙同氷河よりシャクスガム川 (Shakgam valley) に至り、斯

くして取殘されし、未測量のギャップを充さんと企圖せり。それより、一八八七年のヤングハズバンド氏のルートに依りてムスタグ峠を越えてバルトロ氷河に歸着する事に定められたり。

昨年夏にはスポレト氏は先發隊を率いて、バルトロ氷河の下手、アスコール（Askole）に糧食を徴收、貯積の目的にてバルティスタンに入りたり。先發隊はスポレト氏以外に、マリオ・クギア（Mario Cugin）ウムベルト・バレストレリ（Umberto Palestreri）及特に同隊に加はれるステイーン（S. W. Steane）の三氏より成れり。同隊は七月に、スリナガールを出發し、デオサイ高原を經てアスコールに至り、同地にて糧食の準備を完成し、スコロ峠（Skoro La）を越えスカルド（Skardu）に出で、インダス河の流域より、ザウジ峠を越えて歸着せり。尙歸途に於てバレストレリ氏はスコロ峠の西に聳ゆるチェリ・コウル（Cheri Chor、約一八〇〇〇呎）の岩峯の初登攀に成功したり。

本年の探檢隊は前記先發隊員（スティーン氏を除く）以外にギノ・アルレグリ（Gino Allegri）ギウスッペ、シアルドラ（Giuseppe Chiardola）ヴイットリヲ、ポンテイ（Vittorio Ponti）アルディト・デスィオ（Ardito Desio）ロドヴィコ・デイ・カポライアッコ（Lodovico Di Caporiacco）の五氏に活動寫眞技師、無電技師、及びクールマイヤーの山案内者二人、合計十二名より成り、三隊となり、三月二十七日、同三十日、四月三日の三回に分れてスリナガールを出發せり。一行は磁氣、振子等の問題をも含む、各種の科學實驗を行ふ由なり。

○各學校山岳部消息

商大山岳部

今夏の當部の活躍は大して見るべきものなく、只單に南北兩アルプス其他の所謂ポピュラー、ルートを踏破せるに過ぎず。之を詳細に亘つて御知らせするにも及ぶまいと存じます。

大正大學山岳スキー部

昭和四年夏季登山

第一班　燧、日光白根方面、リーダー小林昭惠

第二班　北鎌、槍、穗高方面、リーダー長谷川篤雄

第三班　後立山方面、リーダー辻重光

第四班　黑部谷方面（笠谷、打込谷、蓮華谷を經て鷲羽乘越より上廊下（東信道）へリーダー木村恒三

第五班　東北朝日連峰（**朝日より三面へ**）リーダー岩堀武朗

奥羽の異彩である東北朝日岳連峰は今年になつて始めて山小屋が完成されたと云つて良いでせう。朝日礦泉から二三年前までは道を北方に取つて鳥原山——小朝日と行つたのですが、今

は大朝日に向かつて直線に、それだけ峻烈な急阪ですが――僅な時間で一日の豫定では充分ゆつくりです。**小屋**は本年になつて二つ完成されてゐる。二つ共鐵筋コンクリートで、**大朝日の頂上**と**大鳥池の池畔**で、恐らく日本の山の内で立派な部に屬すると思ひます。大朝日の方は三十人位宿まれること確實。前年に比すると道が殆ど完備して、この朝日連峰を縱走するのは、實に散歩の樣で――高山植物は澤山あり、雪渓は大きいし、眺望も良い處ろから――晴れた日に惠まれさへすれば遠く佐渡ヶ島等も見える位です。途中キャムプしたければ狐穴邊り最適地、少しのして大鳥池畔で岩魚でも釣るのは興味しんしんたるもの。

この大鳥から落合へ出て、鶴岡方面へ出るのが今までのコースですが、私は今年寒河山から北西へ折れて道の全然ない所――實に甚どい藪と灌木の曲りくねつた尾根の――を全る二日歩いて三面村へ出ました。一日一里半の日もある位ですからその難もお察し出來ると思ひます。

この三面から村上へ出るのに一日完全にかゝりますから東京を立つて一週間の日數をかぞへれば面白い旅が出來ると確信します。殊に朝日岳は比較的低いと云ふ理由で一般の登山家から等閑に附せられますが、村上營林署でも云ふ樣に未開拓の處女地が非常に多いだけ、この點だけでも一般の愛好家に力説したいと考へてゐます。猶案内者には古川親父が親切に案じて呉れますから非常に愉快です。

私がとつたコースの三面探險は全然道が無い爲め――案内者はこれで二度目だと云つてましたが――斧で切つては歩き、歩きしたので骨が折れますが、其丈に處女地征服の感は非常なものです。

東京醫專山岳部

さて、御申越の御方針誠に結構と存じます、當部に於きましても、小さい相當に色々動いては居りますが、御知らせする樣な興味のある行動もなく誠に殘念に思て居ります。

唯、他の諸學校と異なる所は、上高地に高山診療所を有する事だけかと思ひます。場所は御承知の通り五千尺の一隅でありますし、時期は七月十日より八月廿日迄開きます、診療は勿論無料です。

尙診療所は其の期間中は必ず當部の卒業生より成る東京醫專山岳會の人が二人づつ交代に居る事になつて居ります。

現部員(學生)は其の助手として働く事になつて居ります。

今年の夏から蒸山莊に出張所を設けました、其の他の事に付きましては全く平凡な登山をするに過ぎません。

甚だ御期待に添ひ得ず殘念に思ひます。

一二九

雜報　○各學校山岳部消息

高師附屬中學校山岳部

我が東京高師附屬中學校山岳部は明治四十五年に創立してより以來、日本山岳會の御指導により（「山岳」や幹事諸兄等の御講演等）今日に到りました。毎年夏は七月十日より、三班に分つて夏期旅行隊をつくり、冬期には部員の有志スキーを後援し春休には「春の旅」と稱して二班をつくつて居ります。春も夏も八十名位の部員を得て居ります。又その外年に數回强行遠足と云つて近郊の山々、例へば權現山、棒の峯、大岳山等へ日曜を利用して出掛けます。或ひは土曜日曜のキャンピング等、皆部長及び委員、先輩が若い部員達を導いて居ります。その他講演會、活動寫眞等を年に二回位行つて、そのたび毎に、日本山岳會の幹事その他の方々をわづらはして居ります。

次に簡單に今夏期旅行の經過をお知らせ致します。

第一班　（二年生以上二十七名）

四ツ家—白馬鑓溫泉—白馬岳—大池—四ツ家

第二班　（三年生以上二十六名）

大町—濁小屋—烏帽子岳—三ツ又蓮華岳—槍岳—上高地—德本峠—島々

第二班　（四年生以上十四名）

上松—木曾駒ケ岳—伊那—大河原—赤石岳—惡澤岳—木賊—轉付峠—新倉—十谷峠—甲府

富山高等學校山岳部

創立以來日の淺き吾々は他の山岳團體との連絡を切望してゐました所にかくの如き懇切なる手紙を頂きまして、全く感謝に堪えない次第であります。

今度のことについては自分等は双手をあげて贊成し只今拙き山行の記錄をお送り致しましたから御笑納下さい。若し幸に「山岳」の一部に掲載されれば吾々の最も喜ばしきことで御座います。

第一班　立山登山、リーダー（途中マデ）大石碩他十二名、人夫清太郎、兵次

七月十二日。雨後曇。南富山發（六時五分）—芦峅寺—藤橋—ブナ坂—弘法（五時）

七月十三日。快晴。弘法—姥石—鏡石—室堂（一時）、途中共に來りし第二班と分る。

七月十四日。好晴。室堂—一ノ越—雄山—室堂—立山溫泉

七月十五日。晴後曇。溫泉—鬼ケ城—藤橋—芦峅寺—富山

學校が地元にある關係上信仰登山に類するものか。

第二班　劍立山、リーダー大石碩、他四名、案内軍藏

七月十三日には第一班と分れる。弘法—姥石—鏡石—地獄谷

雷鳥澤—別山乘越—劍澤源治郎小屋

七月十四日。晴後夕立。小屋—鶴ケ御前ト前劍トノ鞍部—前劍平藏頭—平藏コル—劍頂上—平藏コル—平藏—小屋

平藏の登りの單調さを避けて尾根道を取つた劍頂上(十二時)で約一時間遊んで下り始めて雷鳴を聞きコルにては雨に遇ひそれより小屋まではぬれて歸る。

七月十五日。晴後曇。小屋—別山—雄山(一時)—室堂—溫泉

大石一人居殘り他は軍藏に雄山まで送られて溫泉に行く。

七月十六日。晴。溫泉—富山

八ツ峯下半(第四峰マデ)大石碩、軍藏

七月十五日。晴後曇。小屋—長次郎出合—熊ノ岩—乘越—出合小屋。一行と別れて一人八ツ峯を見に行き、遂に乘越まで登るも霧中にて眺望きかず直に下る乘越附近は急峻にしてクレヴァスが開きさうであつた。此の乘越の名稱については確なることを知らず。三高にては三の窓乘越。四高にては池の谷乘越と呼ぶも宗作等の云ふに從ひ熊の岩乘越と云ふが適當ではないかとも思はれる、大方の意見を知りたい。

平藏出合附近にて第三班一行に合ふ。

七月十六日、晴後雷鳴。軍藏をつれて、八ツ峯へ長次郎出合より二番目の雪溪を少しのぼり左の草附きにからんで(三)と(四)との鞍部に出で(三)より(二)をへて(一)までやり引き返して(四)まで行き、引き返へす。(四)より(五)へは雪溪の工合惡く、また天候も惡くなりさうなので(五)を惜みながら引き返へす。

七月十六日。曇。小屋—雷鳥澤—富山

第三班　小窓越え、劍藥師縱走、リーダー福田博、中田亮吉、扇田彥一、櫻井秀矩、吉崎籟三、山田明吉、案內修造、人夫俊雄

七月十三日。晴。富山(九時)(バス)—上市(十時三〇分)—釋泉寺—折戸—伊折—ゾロメキ發電所—取入口(六時)。此の行には始め人夫一人の豫定であつたが今夏になつて未だ小窓入りしたパーテイーがないらしいので架橋等のために人夫を一人增したのである。

七月十四日。晴後雷雨。取入口(六時四十分)—ブナグラ谷出合—丸太橋(二度)—キハラ谷出合—石ツ原ノ河原—徒涉(白萩川ノ右折する所)—ザレ道—架橋一回—徒涉三回—雷岩—雪溪取著キ(十一時前)—晝食—出發(十一時半)—霧來る—アイゼンを附す—ザレ道(雷雨來ル)小窓(午後二時)—小窓雪溪—池ノ平(午後三時三十分)。炭燒きが入つて居たために徒涉は割合に少しで濟んだ。

七月十五日。晴後曇。小屋—仙人山—小屋(朝食)—出發(八時五分)—池—三窓谷出合—二俣—眞砂澤出合—平藏出合(晝食)—劍小屋(午後二時)。二俣の渡川を最も心配して居たが難なく過ぎてあつけない位だつた、平藏附近で長次郎から歸つて來た大石に出合ふ。

七月十六日。晴時々曇る。劍頂上(八時五十分)—出發(十時二十分)—小屋(十二時三十分)。第二班の劍行きのルートに同じ。暖い天候に惠れて劍頂上では隨分暢氣に遊ぶ、平藏のグリセイドは近頃にない痛快さだつた。

七月十七日。晴後曇。小屋(午前六時四十分)—別山ノ肩—別山—雄山—一ノ越(晝食)—霧來る—淨土—ザラ峠—五色小屋(三時三十分)。此の行程は全行程中最も單調を極めたものであつた。

七月十八日。晴後曇。小屋—(七時十五分)—越中澤岳—スゴ乘越(一時)—小屋(二時二十分)。斷然眺望がきいて山の美に陶醉する。

七月十九日。曇後時々晴。小屋(七時二十五分)—二五八五・二ノ三角點(七時五十五分)—藥師頂上(十時二十五分)—出發(十一時十分)—太郎山—眞川ノ小屋(二時二十五分)。藥師頂上では幸に霧が晴れて大喜びをする、小屋では山の最後の晩とて豪遊。

七月二十日。雨。小屋(七時四十分)—有峯—藪コギ—前川に沿つた道—取入口(龜ヶ谷發電所)—千垣驛(五時七分)

朝からの雨に降られて最も困難した日であつた前川に沿つた道の長いのには呆れはてた。

第四班　立山、槍穗高縱走。リーダー深井龍雄、牧野邦雄、橋英雄、中安米藏、岩城知正(案内)佐伯助次

七月十二日。南富山(六時)—千垣—苔嶄(雨沛然)—藤橋(十一時)—ブナ小屋(一時)—晝食(雨止ル)—出發(一時三十分)—弘法(三時三〇分)。豪雨の爲溫泉道を變更して彌陀が原より五色原へ出ることゝした。

七月十三日。弘法(六時三十分)—鏡石—室堂(十時)—一ノ越—雄山—一越(晝食)—出發(二時)—淨土—龍王—ザラ峠—五色小屋(六時)

七月十四日。小屋(六時四十分)—鷲山—飛行機を見る—越中澤岳—鞍部—約二千四百米の山頂上廊下を見る—スゴ乘越(二時二十五分)—スゴ乘越小屋(二時十五分)。水は一丁程離れた池まで取りに行かねばならぬ、晩は兎汁で氣焰を上げる。

七月十五日。小屋(七時)—藥師頂上(十一時二十分)出發(十二時二十分)—夕立來る—太郎山と藥師の鞍部(二二八二米)—

上ノ岳小屋(四時)。小屋には先着の學生が三名居た。

七月十六日。小屋(七時)—上岳(七時二〇分)—黒部五郎(十時)(黒部川側の雪渓—谷—五郎小屋(十二時))食—出發(一時)—三ツ俣蓮華(二時十五分)—双六小屋(四時)

五郎岳は縱走者には頂上まで登る必要はない此から小屋までの道は可成り分りにくゝ雪渓も又大いに急だつた双六小屋は小屋の柱が折れて今にも天井が落ちそうで危いものであつた小屋の傍には池が出て居た。

七月十七日。小屋—樅澤岳(二千七百五十七米)—西鎌尾根—肩ノ小屋(十一時)—休憩—出發(四時五十分)—槍頂上(五時)—小屋。昨夜までの靜寂に引きかへて今晩はえらい雜踏を極めて居る中に睡る。

七月十八日。肩ノ小屋(五時二十分)—大喰岳—中岳—南岳(六時四十分)—大キレット—北穗(八時四五分)食—出發(九時二十分)—涸澤岳(十時四十五分)小屋(十一時)食—出發(十二時)—奥穗—前穗(一時四十分)休憩(二十分)岳川谷林道—河童橋—五千尺(五時四十五分)。北穗のクライムは無限の痛快味を與へて與れた、劍とは違ひ崩壞性の前穗の岩では相當緊張する。

七月十九日。五千尺—德本峠—松本

雜報

○各學校山岳部消息

第五班　立山槍燕縱走。リーダー(槍以後)田村武敏。彌宜太家雄。此の班は第四班と共に深井をリーダーとして槍まで行き肩の小屋で別れて燕へ向つたものである故に記錄は十八日以後に止める。

七月十八日。肩ノ小屋(五時三十分)—殺生小屋—東鎌尾根—赤岳—大天井—燕嶽(十二時十五分)休憩—出發(午後一時)—中房(午後三時)

七月十九日。中房—有明—松本

此の他、班としては特別には設けなかつたのであるが、部員中大和アルプス。北海道オプタテシケ縱走を行つた。オプタテシケ縱走について要領のみを書いて見ます。

オプタテシケ縱走　部員　阿部顯

七月二十四日。上富良野(十時)自動車—中茶屋(十一時前)—吹上溫泉(零時半)

七月二十五日。溫泉滯在

七月二十六日。溫泉(六時三十分)—十勝(續く尾根—美瑛への鞍部—此より十勝岳(十二時半)(往復—美瑛へ取附き(二時)—頂上(四時)—露營地(五時二〇分)雪渓のホトリ

七月二十七日。露營地(七時三十分)—直ぐ傍の谷—美瑛富士—のぼりにかゝる—荷が重いので此處の偃松の藪こぎに苦し

む—頂上(九時)—邊別へ—登り(〇時半)—邊別岳(一時二十分)—一九一〇米の高所(二時三十五分)—オプタテシケ(三時三十分)—峠の上(四時)—鹿越峠池畔(六時三〇分—五〇分)—小スマヌプリ肩の岩(露營地)水に缺乏する。

七月二十八日。露營地(七時三十五分)—小スマヌプリ(八時三十分)—刈り分ケ—ヤセ尾根—雲溪二時(露營)スマヌプリ肩のすぐ下。

七月二十九日。露營地(八時)—スマヌプリの肩(八時二〇分)—休憩二時間—沼(トムラウシ崖下)露營

七月三十日。露營地(八時二十五分)—トムラウシ頂上(九時)一時間休憩—東岳鞍部—此ヨリ化雲岩頂上(一時五〇分)往復—東岳(三時二十分)—露營(忠別の手前の雪溪)

七月三十一日。天幕内滯在

八月一日。露營地(六時)—忠別岳(七時二十分)白雲岳(一時十分)—烏帽子岳(三時)—北海岳(四時十分)—黑岳小屋(五時五〇分)—黑岳(六時二〇分)—鹽谷温泉(八時)

つまらぬ記錄を書きつけて見ました。それにつまらぬ山行ばかりが多いのですから折角の御期待にそはぬかも知れませんが未だ歷史を有しない山岳部のことですからその點をお察し下さい。

專修大學山岳部

先以て貴會の御企てに對し厚く御禮申上げます。我山岳部は本年は學友會豫算編成の都合上雌伏のやむなきに致りましたので山岳部として動靜の何のと申上げる樣な事はありませんが來年度よりはぼつ〳〵と活躍仕り度と存じて居りますから其折り御通知申上げ又御指導をあほぎ度き考へで御座いますから何とぞ宜敷御願ひ申しておきます。

次に私一個人として旅行先の自動車の件につき一寸申上げておきます。

一、有明より有明温泉の間のバス

最近此方面は婦人登山連も大分見えますのにバスの數が少く壯年者に早い者勝の形で獨專せられ一臺をはづすと大分の時間を損すると云ふ樣な具合で我々男連には何等關係なき樣なれど女の方がこぼしておられるのを聞きまして一寸記しました。

二、昨年奥日光へキャムピングに向ふ途中沼田驛での事ですが構内タクシーと外のとの客の取合で大變不愉快な思ひを致しました。其折警官も「いつもの事で困つて居る」との事でした。

これは强ち此處のみの事とは限りませぬ事で旅行者の迷惑ばかりでなくその土地の爲めにも面白くない事ではないかと思ひますが。

以上くだ〳〵しく愚感を述べましたがこんなものでも何かの御參考になりましたら幸甚です。先は御返事まで。

專修大學山岳部　服部庫太郎

山形高校山岳部

今夏に於ける當部のなせるものは

1　三山鳥海。坂田、牧山、川俣、佐々木、都合により鳥海行は中止。

2　根子川より朝日へ。倉持良治、櫻井誠一、野田順次、長井良雄、人夫　小林年雄。

七月八日（曇後晴）山形—間澤—本尊寺—中村。九日（晴後雨）中村—龍門ノ瀧—キャンプ。十日（曇後雨）キャンプ—岩魚止メ—アカクラ澤、ヨコマツ澤の間の尾根の間の枯澤を登る—中岳西朝日のザッテル—大朝日の小屋。十一日（雨）滯在。十二日（雨）滯在。十三日（晴）小屋—中岳—西朝日—龍門—南寒江—北寒江—狐穴。十四日（曇後晴）狐穴キャンプ—以東岳—大鳥湖畔キャンプ。十五日（晴）キャンプ—大鳥小屋—茶畑山—皿瀧—キャンプ。十六日　キャンプ—繁岡—上田澤—鶴岡。

3　朝日連峯縱走班。三上彰次郎、宇田川藤安、宝谷敏彦、田島和夫、大石、太田常藏、大瀧市郎右衞門、清川道比古、松本修一郎、中村清之助、渡邊。

4　**湯澤を登りて地紙、飯豐へ。**森元芳、山澤知道、人夫本間伊代次。

七月七日（晴）山形—今泉—小國—玉川—長者原。八日（雨後晴）長者原—旭又瀧—ヌクミ平小屋—大又、檜山澤の出合—ヌクミ平小屋—小玉川溫泉。九日（晴）溫泉—湯澤—文覺瀧—地紙山—北股岳—後烏帽子—キャンプ。十日（雨後曇）キャンプ—西ケ岳—飯豐小屋。十一日—十四日（滯在）ゾンメルシー、グリセード生活（大又澤上流）。十五日（晴後曇）小屋—大日岳—小大日岳—大日岳—小屋。十六日（晴）滯在。十七日（晴）小屋—切合セ—種蒔山—三國岳—彌平四郎。十八日（晴）彌平四郎—德澤

5　飯豐生活班　安村二郎、青木浩、人夫　渡邊善三郎

七月七日（晴）山形—今泉—小國—玉川—長者原。八日（雨後晴）長者原—旭又瀧—ヌクミ平小屋—檜山、大又澤出合—大鞍を登り一三〇〇米附近キャンプ。九日（晴）キャンプ—飯豐山—飯豐小屋。十日—十四日迄滯在　ゾンメルシー生活（大又澤上流）グリセード練習（同上）。十五日（晴）小屋—彌平四郎。十六日（同）彌平四郎—德澤

6　**實川より大日牛首を經て飯豐へ。**三浦博雅、深井次郎

雜報　○各學校山岳部消息

人夫　猪俣進三、同彦次郎

七月八日（雨）山形。九日（晴）日出谷—實川。十日（雨）實川—新湯水力電氣株式會社堰堤。十一日（雨後曇）滯在。十二日（曇後雨）堰堤—ツボヤス澤出合—杉ウドを登る—笠掛山下の沼キャンプ。十三日（晴）キャンプ—笠掛山—櫛ケ峯第二第三峯ザツテル、キャンプ。十四日（晴）キャンプ—牛首岳—大日岳—西ケ岳—飯豐小屋。十五日（晴）滯在グリセード練習。十六日（晴）小屋—西ケ岳—烏帽子—御西—小屋。十七日（晴）小屋—彌平四郎。十八日（晴）彌平四郎—德澤。

7　魚沼駒ケ岳より利根川。

袴田三郎、鈴木宜三、人夫　櫻井貞策。

七月八日（雨）山形。九日（晴）小出—大湯溫泉。十日（雨）滯在。十一日（雨）大湯—枝折峠の神社。十二日（雨後曇）神社—小倉山—駒ケ岳—キャンプ。十三日（晴）キャンプ—中岳—小兎の下キャンプ。十四日（晴後雷雨）キャンプ—小兎—兎岳—**大水上山**—丹後山の下キャンプ。十五日（晴後雨）キャンプ—丹後山—一七六〇米峯の手前から利根側へ下る—利根川の出合—キャンプ。十六日　キャンプ—濕ノ倉澤出合—キャンプ。十七日（曇）キャンプ—鯉ケ倉澤出合—越後澤の小屋。十八日（晴）小屋—井土澤出合—九二〇米圏の左岸キャンプ。十九日（曇後雨）キャンプ—赤倉澤を渡る—小屋。二十日（雨）滯在。二十一日（雨後曇）小屋—ワレ澤出合—キャンプ。二十二日（晴）キャンプ—湯の花溫泉—奈良澤出合—矢木澤出合—矢木澤小屋。二十三日（晴）小屋—大卷小屋跡—芦澤—檜俣川落合—實川溫泉。二十四日（晴）實川—水上—上野

8　魚沼駒ケ岳より平ケ岳へ。

慶松光雄、後藤良三郎、人夫　櫻井高五郎

七月八日（雨）山形。九日（晴）小出—大湯溫泉。十日（雨）滯在。十一日（雨）大湯—枝折峠神社。十二日（晴後曇）神社—小倉山—駒ケ岳—小倉山—神社。十三日（晴）神社—清水—中岐口—二岐口小屋。十四日（晴）滯在。十五日（晴）小屋—檜枝岐小屋。十六日（晴）小屋—石ノ岳—平ケ岳—慶松病氣となり檜枝岐小屋に滯在、十七日に二岐口小屋に下る。十七日（晴）キャンプ—白澤山—大白澤山とスヽケ峯へ至る分れ道—白澤に下り露營。十八日（晴）露營—景鶴山南の一九三二米に到る尾根に取つ付く—一七六〇米附近露營。十九日—二十一日迄　雨の爲滯在。二十二日（晴）露營地—ヨツビ河—尾瀨沼露營。二十三日（晴驟雨）露營地—長

藏小屋—餅先—沼田

9　甲斐駒より仙丈へ。慶松光雄、三浦博雅、人夫　末木登久

10　三ツ峠岩攀練習。三浦博雅、森元芳、鈴木宣三、倉持良治、酒井森之介、朝井一男。八月二十五日より同二十八日に至る四日間。

藏王山スキーヒュッテ

其の他小屋に就きましては、昨秋十月微力乍ら私達は藏王山中腹通常萬蒲沼と云ふ地點にスキーヒュッテを建造致しました私達は之を Kobold-Hütte と命名致しました。標高は一三五〇米、五萬分ノ一圖幅上ノ山三寶荒神山（一六八三米）北側のガレと酢川の上流堀田村の堀の字の東南のガレを結ぶ略中間にあります。高湯溫泉（九〇〇米）より冬期二時間あればゆつくり登れます。大さは二間、三間半、床下五尺略左圖の如し（圖は都合により省略—編者）屋根はコバぶき、外觀は丸太角落し外側は横に内側は縦に板をはりその間に防風用のフエルトを插入してあります。屋根のコバの下にも入れてあります。防寒用燃料としてはストーヴでは薪、爐では炭を使用し、燃料はすべて床下に入れて置きます。尚此の外通風窓もあります。夜は爐にヤグラをかけてコタツとします。小屋備品としましては當部は資本的に豐かではありませんのでまだ思ふ樣に備へられませんが大體以下のものがあります。山ランプ一ケ、最高最低寒暖計二ケ、時計一ケ、食器、食料、ヤグラ一ケ、コタツ用布圍二枚、ヤカン二ケ、バケツ二ケ、ヒシヤク、洗面器、床の上に敷くワラと薄べり、自在一ケ等。防寒具は備へ付けてありません。窓は幅一間高さ三尺のもの二ケ、幅四尺高さ三尺のもの一ケ、幅一尺高さ二尺のもの一ケ、窓の外側には上から下りる被ひの板戸があります。使用飲料は夏季に於ては西南二町程の處の涌水（通常白露水と呼ぶ）を使用し冬期は雪をとかしてゐます

尚藏王山には宮城縣側に今秋東北帝大山岳部によつてやはり**スキーヒュッテ**が造られました。

山形高校山岳部コーボルトヒュッテ使用規定

一、使用順序　イ、山形高校山岳部々員。ロ、山形高校先輩生徒及び小屋建設に關係ある人。ハ、一般の人。

一、小屋を使用せんとせらるゝ方は必ず山形高校山岳部に申し込まれること。

一、小屋を使用せらるゝ方は小屋備へ付けの小屋日誌に記入事項を必ず記入せらるゝこと。

一、一人一日薪炭代として山形高校山岳部々員、先輩生徒及び建設に關係ある人三十錢、一般の人五十錢。

一、使用料は小屋備へ付けの箱に入れらるこゝと。
一、小屋を立ち退かれる時は充分火氣に注意せられること。

島田山岳會

一、島田山岳會設立　從來駿河側に一の山岳會もないのを遺憾とし、昨秋島田保勝會が「大井川と日本南アルプス案内」を刊行し、その一部をアルバムとして、秩父宮に献上したのを動機として、昨年末より保勝會幹事渡邊錠次郎氏と法政大學山想會員井上鮭次氏との間に内々山岳會設置の下相談が成つた。其後着々準備を進め四月初旬愈々島田山岳會を創設した。

二、登山客の狀況　近時南アルプスへの登山客は頓に增加したかの樣に思はれる。靜岡から安倍鐵道の便を借り牛妻より大日峠を經て井川田代口から大井川を溯行するの外、靜岡より安西通を洗澤峠越をして千頭口に入り大井川の一大支溪、寸又川を溯行するの行程は、從來あり來りのコースであつた。それが昨年邊から大井川の眞の情緒、卽下流より上流へと溯り、森林帶の分布並に岩石地層の移推を心ゆく迄味はんとするの新傾向が漸次發達して來た。上述の目的を達するに最好的の地點は謂ふ迄もなく島田である。今夏の如きは名古屋鐵道局及名古屋新聞社等が島田より大井川を溯行して椹島から赤石踏破を企てたが不幸經費の都合上無期延期となつたのは實に殘念であつた。それでも島田より大井川溯行の途に上つた人及大井川を下つて島田へ出た人を合すれば十數人に上つた。更に椹島——井川、雨畑、新倉二軒小屋の三方面より入れるもの——より赤石へ登山せし人は無慮百五七十人を算し、就中井川女子青年團員外數名の如きは男子も辟易する樣な健脚振であつた。

三、地方山岳會及學校の動靜　例に依つて今夏も各山岳會では夏期を利用して思ひ思ひに登山計畫を發表し、これに基き登山を試みた。今左に其大略を示せば、

（イ）靜岡高等學校旅行部【詳細記事は省略。同行旅行部よりの報告を參照せられたし——編者】

（ロ）島田山岳會

雨畑より椹島を經て赤石岳へ

島田—甲斐下山驛—大石野（オホシノ）—大島—雨畑—西澤峠—倉澤橋—椹島—中腹小屋—赤石岳—椹島—中ノ宿—沼平—田代—井川—大日峠—落合—牛妻—靜岡—島田

以上の外、志太郡青年團では靜岡より大日峠を越え、井川に出で接岨峽を探勝し、梅地千頭から島田へ引返した。

（ハ）井川案内人夫組合　豫て其の必要を知り乍ら、遂に設立が今夏迄延び延びになつてゐたのを、田代の旅館ます屋の主瀧浪益吉氏の肝煎で、田代、中山、大島、井川の數部落の同志を

糾合して、爰に名實相伴つた井川案内人夫組合の設立を見た謂ふ迄もなく組合員は、登山關係の旅館の主及案内人夫より成り組合員六十人を數へ、時節柄案内人は雇主食費持の一日二圓五十錢と決定した。特に北アルプス地方の一部の組合の如き賃銀に於て案内人と强力人夫との差別を撤廢したのは、一般登山客に好感を齎らすものと確信する。尙喜ぶべきは當組合内に赤石岳、悪澤岳以北仙丈、甲斐駒、鋸岳方面へ案内し得る人夫が數人居る事である。これは南アルプス縱走者及澤溯行の人々には大なる福音であるに違いない。

四、登山路及交通機關　南アルプス特に駿州側から南アルプスへ通ずる交通機關の設備は、北アルプス並に甲州、信州側より南アルプスへの交通機關の完備せるに比すれば、實に雲泥の差の感がある。僅かに千頭御料林に通ぜんとする大井川鐵道の設置と、牛妻への安倍鐵道の二線があるのみである。

イ、千頭口

(1) 島田金谷道(川根街道)　最近は電氣事業及伐採並に大井川鐵道設置の爲、難所とされた地藏峠も改作され、千頭への歩道は一新して本道となつた。東海道線島田、金谷から夏の日長なれば一日の徒歩行程とされてゐる。家山迄は飛行艇(島田向谷午前九時發)又は大井川鐵道、乘合自動車等の便を借りれば甚だ容易で一時間を要しない。猶大井川鐵道は兩三年を經ずして豫定線を完成し、金谷、小長井間を數時間に短縮せんとしてゐる。

(2) 静岡道　静岡市安西通、藁科橋の畔から乘合自動車の便を借り八幡で車を捨て、此處より車道を洗澤峠に一汗流せば比較的樂々と千頭小長井に達する。【千頭八幡間は五乃至六時間を要す——編者註】

ロ、井川田代口

(1) 島田金谷道　大井川沿岸を溯る者は島田、金谷を早朝出發して堀之内邊に一泊、翌日千頭小長井より天下景勝接嵯峡を探勝して夕刻井川に到着する事が出來る。通常これは二日の行程である。

(2) 静岡道　静岡市井ノ宮から安倍鐵道の便を借り、牛妻にて乘合自動車に乘り換へ、通常六番と稱する玉機橋の畔にて下車、橋を渡り【唯間まで乘合自動車あり——編者註】中河内川に添ひて、上落合より口坂本、大日峠を越え、井川田代に到る。通常これは一日の行程である。【田代までは荷物が多い時は少しく强行である——編者註】

ハ、紙料道　これは島田に本社を有する東海紙料株式會社が、椹島に井川山林事業所を有し、赤石山系の大倉山林伐採事業

に從事してゐる關係上、工事に便せんが爲改作修理せるものである。

(1) 田代――椹島間　昭和三年十月田代より椹島間（約九里）完成、從來は二日間を要したが、**以後一日行程に短縮された。**途中、高瀬島に一戸、下ノ島に一戸、沼平に二戸伊谷に一戸、中ノ宿に一戸、椹島に十戸夏季のみ居住してゐる。尙沼平、中ノ宿、椹島の三ヶ所には十數棟の東海紙料河狩會所があり、高瀬島、沼平の民家は旅舍兼營にして椹島には橋本屋支店が井川より出張して一般登山客の便を計つてゐる。

椹島より赤石岳頂上への二里半の尾根傳道は大正十五年盛夏、大倉翁登山の砌、改修せしものにて、其後昨夏喜七郎男登行の折再び開作せしを以て夏期は一日にて往復し得可冬期雪中登山も此處を根據地とすれば左程困難な事もあるまい。〔五月下旬六月上旬の頃、强行一日にて上下なしたる記錄あり――編者註〕

(2) 雨畑―西澤峠―椹島間　早川釣橋々畔大石野、大島間は**軌道馬車**、大島、雨畑間は今夏**驟道が完成**した。謂ふ所の紙料道は雨畑から西澤峠を經て椹島へ通ずる物資輸送の爲に設けられたものである。一日行程である。

(3) 東俣への通路　東海紙料が東俣廣河内に事務所を設け伐採に從事してゐる關係上昨夏邊から二軒小屋から森屋澤附近に通ずる**東俣道**は、立派に出來上り東俣廻行には多大の便益が齎らされた。

(4) **西俣道**　二軒小屋より櫻島（蝙蝠岳の南下より發する澤と西俣との出合）への通路は從來急湍奔走、巨岩絶壁をなし、所々ザイルを要し上下するには容易の術ではなかつたが今夏より東海紙料が愈々この方面への山道開拓を志し測量を開始した。多分明年中には見違へる位の登山路が完成するであらう。

(5) **千枚岳、惡澤岳、荒川岳、赤石岳への縱走路**　昨夏大倉喜七郎男を迎へた東海紙料では、これを機として椹島を中心とせる千枚、荒川、赤石への縱走路を開拓した。この間約八里半、奥西河内の出合より蕨段を千枚岳に登り西河内岳の惡場を降路にとれば、夏日には一日の行程である。

(6) 奥西河内道及**聖澤道**　奥西河内出合卽上西河内橋から奥西河内に沿つて大聖寺平へ出る道が前者である。約二十年前中村清太郎氏が降られた道と稍々同じである。途中柚道に入れば所々代採小屋がある。大聖寺平直下、水源には未だ世に紹介せられざる千丈滝の瀑布があり、聖ノ大滝、

池尻ノ瀧(伊谷の對岸)枯木戸瀧と共に大井川奥の壯觀である。

聖澤へは赤石澤の出合(神ノ鳴合)赤石渡橋から聖大瀧迄は昨夏大倉男が赤石登山の節修理した道がある。途中日蔭澤の出合外上流に數ケ所の伐採小屋がある。夏頃には伐採の爲倒木が所々に行はれるから此處を通過する時には細心の注意を拂はないと不慮の禍を起す事がある。

二、寸又川道　千頭口より寸又溪谷への登山客は目下の處では多くを望み得べくもなく、毎夏數組の登山客に外ならない。夏季の溪谷遡行も楽て難いが、紅葉錦を織る十一月初の溪趣は格別である。溪谷を溯り鶏冠山へは五七日を要し、上日向(東側)より奥はテントに依る外はない。

次に所謂寸又山塊とも云ふべき黒法師、丸盆、不動の縱走であるが、今日では登山路は謂ふに及ばず、柚道さへ見分がつかない位に荒廢して了つた。明治末、關口泰、杉本良兩氏等が登山された折とは比較にならぬ。前黒法師と黒法師との中間にある大窪二ツ山から眞南△一七二〇米の上にあつた大窪小屋は見る影もなく、切明も途切れて當にはならぬ。

元來千頭山御料林は十年或は二十年置きに宮内省で伐採する爲、其間藪の茂が甚しく猛烈に繁り、登行の勞苦は一方でない。只一部分島田の加藤商事及平口製材所の伐採人夫が這入つてゐるのみである。

左に寸又川溯行外に二三のコースを示せば

(一)田代—高瀬島(コウセンシマ)—大井長瀞—信濃俣河内出合—信濃俣溯行—大根澤山—大ヒル畠—三隅池—樺澤山—東側—湯山—千頭

(二)千頭—奥泉—犬間—長島—栗代川—朝日岳—上閑藏—東側—諸澤山—鉈峠—合地山—中尾根山—黒澤山—水窪(中尾根山から鶏冠山へ出るも可)

五、山小屋の狀態

イ、**西澤小屋**

西澤峠の東側卽雨畑側へ西澤を約二十町降れば二軒の小屋がある。これは紙料の物資輸送中繼小屋で夏期輸送從事中のみ開かれてゐる。登山客も頼めば宿泊の便を與へて呉れる。

ロ、**所(ショ)ノ澤小屋**

西澤峠の國境を大井川側に五分も降れば所ノ澤水源に二軒の小屋がある。これも西澤小屋同樣紙料の物資中繼所であつて、夏期のみ宿泊の便を計つてゐる。

ハ、**中腹小屋**(赤石岳)

赤石岳から椹島へ降る尾根續△二五六四米の少し上に五六

丁離れて二軒ある。昨夏大倉男登行の折設置。上下二つの小屋を其位置に依り上ノ小屋下ノ小屋と名づけてゐる。上ノ小屋は完備してゐるが下ノ小屋は來夏頃は一寸使用には不都合を來すかも知れない。

ニ、**荒川宿泊所**

今夏縣營小屋改築に當り經費の都合上、之を廢したので、大河原青年團では東海紙料より大倉小屋の讓渡を受け名も荒川宿泊所と改めその管理に當つてゐる。來夏より物資の供給にも當るといふ。

ホ、**萬之助小屋**

大正十五年の夏、東邦電力の松永氏が赤石、惡澤岳へ登山の折、惡澤岳(東岳)の東側に建設したものである。

(、**千枚岳小屋**

千枚岳(△二八七九米)から蕨段(△二〇七八米)へ五六丁尾根に沿つて降つた所にある。

附。登高者に於て特に一部を詳細に調べたい方よりの個人的御質問御紹介には、本會は責任を以て充分御答しますから島田山岳會宛御聞合下さい。

立教大學山岳部

第一班　烏帽子岳より槍ケ岳へ

一行　山縣一雄

期日　七月下旬

備考　希望者なきも右記の者單獨にて決行せり。但し詳細なる報告に未だ接せず。

第二班　後立山縱走

一行　倉辻勇三郎、山田正夫、川久保育雄

人夫　横山一男(四ツ家)

七月五日　飯田村發

七日　大町—白馬尻

七日　白馬尻—白馬岳—杓子岳—鑓ケ岳—唐松岳—八方日電小屋

八日　八方小屋—大黑鑛山跡—細母谷小屋

九日　細母谷小屋—鐘釣—三日市

十日　朝歸京

第四班　東澤より槍、穗高縱走

一行　小川健一、三島一夫、福井雄三、木下要一

人夫　傳刀林藏(大町)

七月五日　飯田町

六日　大町

七日　大町着

七日　大町—大澤小屋

八日　小屋—針ノ木峠—平ノ小屋
九日　小屋—東澤に入る—三ノ澤手前(野營)
十日　滯在
十一日　野營地—東澤を溯る—赤岳、黑岳の鞍部—鷲羽岳—三俣蓮華野營地
十二日　野營地—双六小屋—西鎌—槍肩ノ小屋(槍ヶ岳往復)
十三日　小屋—大喰岳—南岳—北穗高—涸澤岳—穗高小屋—奥穗高—前穗高—上高地
十四日　滯在
十五日　上高地—松本
十六日　歸京
備考　東澤は水最多く徒渉困難なりき。

第五班　劍岳より針ノ木越へ
一行　左手新一郎、小原勝郎、尾崎安夫、守野俊之
人夫　講神孫次(劍まで)
七月十日　上野發
十一日　富山—藤橋
十二日　藤橋—追分小屋
十三日　小屋—劍澤小屋
十四日—廿日まで　劍澤生活に參加(別頁參照)
廿一日　劍澤—室堂
廿二日　室堂—淨土山—平ノ小屋
廿三日　小屋—針ノ木峠—大町
廿四日　大町—松本
廿五日　歸京

第六班　槍、烏帽子より劍、小黑部方面
一行　松田利吉、外一名
人夫　佐伯善二(蓋嶄)
七月七日　飯田町
八日　松本—上高地
九日　上高地—穂高小屋
十日　滯在
十一日　小屋—肩ノ小屋滯在、夕刻槍ヶ岳往復
十二日　小屋—西鎌—三俣蓮華小屋
十三日　小屋—鷲羽岳—烏帽子岳—南澤野營地
十四日　野營地—平ノ小屋—ザラ峠—五色原小屋
十五日　小屋—獅子—鬼—龍王—淨土山—雄山—別山—劍澤(野營)
十六日　野營地—長次郎谷—劍岳—池ノ平(野營)
十七日　野營地—小黑部谷—鐘釣溫泉

雜報　○各學校山岳部消息

雜報

○各學校山岳部消息

十八日　溫泉—宇奈月—三日市

第七班　甲斐駒、鋸岳、仙丈より白峰へ

一行　酒井吉國、奥平昌英、斯波悌一郎

人夫　野田清吉（韮崎）

七月五日　飯田町

六日　韮崎—竹宇宮前—黑戸山—屏風小屋

七日　小屋—七丈小屋

八日　小屋—甲斐駒ヶ岳—六合目小屋

九日　小屋—鋸岳第一高點—次の高點—キレツト—キレツト鞍部—六合目小屋

十日　小屋—甲斐駒ヶ岳—仙水峠—北澤小屋

十一日　小屋—仙丈岳—荒倉岳—兩股小屋

十二日　小屋—三峰岳—間ノ岳—北岳—間ノ岳—間ノ岳小屋

十三日　小屋—農鳥岳—大門澤小屋—西山溫泉

十四日　溫泉—甲府

第八班　赤石山脈縱走

一行　逸見眞雄、田原直助、水越誠一（小西俣まで）

人夫　酒井正勝

七月五日　飯田町

六日　上片桐—大河原

七日　大河原—三伏峠—三伏小屋

八日　滯在

九日　鹽見岳往復

十日　三伏小屋—小河内岳—小西俣水源野營

十一日　滯在

十二日　滯在

十三日　野營地—魚無河内岳—惡澤岳往復—大聖寺平手前の大倉氏小屋

十四日　小屋—赤石岳—百間洞野營地

十五日　野營地—大澤岳—中盛岳—兎岳—聖岳—聖平

十六日　野營地—上河内岳—茶臼岳—易老岳—仁田岳往復—信濃俣河内水源野營

十七日　野營地—光岳—加々森山—加々良澤に下る—野營

十八日　野營地—加々良澤を下る—七ツ釜—白瀧—下栗—上町

十九日　上町—小川路峠—毛賀—飯田

二十日　飯田—辰野

備考　此の旅行中に二千尺の大瀧を發見せる旨の報道が朝日新聞にあつたそうですが、私達は御覽の通り尾根縱走しかも普通の縱走路でありかゝる大瀧がある筈もなく、又斯かる事

實無根の虚報をした覺もありません。右は全くの虚報でありまして私達の迷惑は勿論、一般登山界にも甚だ申譯ない次第であります。同行の出原君は其後直に歸京して居りましたので冠氏まで早速虚報なる旨報告したさうでありますが、小生(逸見)は其後黒部川の旅に出て七月末日歸京しました所右の樣な話に全く狐にでもつまゝれた樣な氣がしました。

其後解明書でも出さうかと思ひましたが時機も既に遲いので見合せる事に致しました。右は目下入山者少き上町方面の宣傳ではないかとも思つて居ります。取敢へず貴誌(山岳)を通じて廣く右事實を御傳へ下さらんことを希望します。

特別班　劍岳生活

一行　左手新一郎、小原勝郎、堀田彌一、澤本辰雄、尾崎安夫、宇野俊之

人夫　講神孫次

七月十四日　劍小屋—眞砂澤出合幕營

十五日　八ツ峯へ(左手、小原、孫次)

第一峯より第四峯まで

十六日　劍岳へ(左手、堀田、澤本、小原、尾崎、宇野)

野營地—長次郎谷—頂上—平藏—野營地

十七日　休養、ゾンメルシー練習

十八日　源治郎尾根へ(堀田、澤本、左手、小原、孫次)

野營地—長次郎谷—下より二ツ目の雪溪—第一峯下の雪溪の頭—第一峯—第二峯—源治郎のキレット—長次郎谷—野營地

十九日　ロツククライミング練習

二十日　休養(解散)

特別班　劍岳早月尾根登攀

一行　堀田彌一、澤本辰雄

人夫　佐伯由藏

七月五日　上野發

六日　滑川—上市

七日　上市—伊折—取入口

八日　滯在

九日　取入口—キワラ谷出合—キワラ谷二俣—尾根にて野營

(此の地點は大正六年七月冠氏が早月尾根を試みられし時の第一回野營地附近に當る)

十日　滯在

十一日　滯在

十二日　暴風雨

野營地—劍岳寄りの最後の隆起—別山尾根に出る—劍岳頂

雜報　○各學校山岳部消息

上—平藏谷—劍澤小屋

十三日　休憩（十四日より劍岳生活班に合す）

特別班　毛勝越え

一行　堀田兄弟。外一名

人夫　一名

七月三十日　三日市—魚津—東藏—發電所取入口—ヲノマ炭燒小屋

三十一日　小屋—阿部木谷—毛勝谷—大明神谷出合より約三十分にして向つて左の尾根に取附く—尾根の水溜にて野營（案内谷口の言に據れば毛勝附近の唯一の野營場、水は充分なり）

八月一日　野營地—毛勝山—中ノ谷を下る—中ノ谷の廊下の第三段目の瀧の手前より左岸の岩壁を攀ぢ尾根より西ノ谷との出合に下りて野營

二日　野營地—小黑部—鐘鈎溫泉

三日　鐘鈎—三日市

特別班　黑部川より金木戸川へ

一行　邊見眞雄、澤本辰雄、小原勝郎

人夫　志應喜一

七月廿日　辰野—松本發

二十一日　富山—蔦嶄—立山溫泉

二十二日　溫泉—五色原—平小屋

二十三日　平小屋—黑部川を溯る—口元のタル澤出合より可成り溯りて野營

二十四日　野營地—立石岩小屋泊

二十五日　岩小屋—赤城澤出合を過ぎて野營

三十六日　野營地—三俣蓮華小屋—蓮華岳—五郎小屋

二十七日　小屋—金木戸川を下る—双六谷出合—打込谷籠渡し—打込谷官行人夫宿泊所泊

二十八日　滯在

二十九日　小屋—廣河原人夫宿泊所—造林小屋—金木戸部落—駒止橋—船津町

三十日　船津—（自動車）—笹津—富山

三十一日　歸京

富山縣電氣局

四五年前までの立山登山と言へば其の多くは信仰的で雄山、淨土、別山の三山に限られて居つた樣であつたが最近山岳思想の勃興と宿泊所の施設に伴ふて登山が容易に出來る樣になつた爲に立山だけでは滿足しなくなつてだん〳〵と登山の範圍が廣くなつて來た。立山から信州へ或は黑部、藥師、白馬、上高地

など〻五日や十日位の旅行は誰でも平氣に出來る樣になつて本年は殊に劍登山者及黑部を目當として登つたものが多かつた。前者は劍澤にある劍の小屋が昨年二十三坪に增築されて山小屋として比較的完全なものになつたから劍登山の根據地として最も有效に利用され本年の宿泊者は二千人以上もあつて殆んど立山登山全體の五分の一位は劍を極めることになつた。此の內信州から這入つたものは約四分富山方面は五分黑部方面は一分の割合で、黑部方面の少ない理由は立山と黑部を最も近く結ひ付ける途中池ノ平に宿泊の設備がないからである。此處の小屋は前年營林署で建てた八坪程の小屋であるが番人が居ない爲に僅か一日であるが寢具や食糧品を携帶せねばならぬから自然此のコースを取らなくなるのである。本年の九月に某校の學生三名が雪溪で負傷したことがある。此の時も直ぐ近くに池ノ平の小屋があつたが食糧品が無かつた〻めに一行は苦痛を凌ぎ辛うじて劍の小屋へ避難した樣な例もある。玆に番人が居つて宿泊することが容易に出來ることになれば今後此の方面の登山者は餘程增へることであらう。

彌陀ケ原は豫てから完全なる登山小屋を建設して地獄谷から溫泉を引いて彌陀ケ原一帶を一大遊園地たらしむると云ふことは以前からの問題であつたが、最近此の喞しが餘程進捗して蓋晰の有力者間に於て既に成案を作つて其筋へ出願中であるから實現も遠くはないと思はれる。同時に稱名瀑の下からケーブルに依つて彌陀ケ原の取付きまで客を運ぶことが出來る樣になれば八ケ間敷く云つて居る國立公園の問題も餘程可能性を帶ぶることになるであらう。

稱名瀑から彌陀ケ原に上る道も本年十月に登り口約四分の一（貳百五十間）は改修されて見違る樣な完全な道路になつた。來春雪解を待つて引續き上の方に及ぶ筈である。此の道は最近になつて餘程知られる樣になつた爲に本年は立山登山者の約五分の一は稱名新道を通つた。同時に之れが完成された曉には立山本道に比べて非常に樂であるから利用するものも非常に多くなることであらう。

關西學院山岳部

第一班　燕、槍　七月十一日—十七日、參加者　柏木庄太郎、小路健一、林幸金、工樂長三郎、柏木庄兵衞。案內人　赤羽廣英

第二班　立山、劍、八峯　七月廿九日—八月七日。參加者　高須賀重雄、石黑幸雄、案內人　佐伯松之助。

第三班　立山、劍、黑部　參加者　石岡貞、奧野薫美、大倉氏案內人　佐伯松之助

第四班　穂高（前穂北尾根及西穂高）　七月廿五日—八月六日
參加者　淺川玄夫、寺本耕市、古島要、泉谷貞一、案内人
内野政雄
第五班　大雪山　七月廿六日—七日　參加者　森本太郎、秋山
岩人。

大阪醫科大學山岳部

一九二九年夏の主要なる行動は

八月十日—二十四日　早月入り—劍附近—御山澤—針ノ木峠
—大町—小谷—笹ヶ峯—巣鷹
〔南—川口—西岡（R・C・C）〕

八月九日—二十三日　横尾出合キャンプ（關西學生山岳聯盟
年次幕營）（附近遊逍行）
【水野—小林—宇野（大阪商大）—佐野（R・C・C）】

八月二十四日—九月一日　劍、八ツ峯フェイスに於ける岩登
り練習。
【水野—中村（R・C・C）】

他に、烏帽子、槍線、上高地根據幕營、富士遊逍行等あり。

所感（一）前二者に於て、三回事故を惹起せり。即ち、八月十一日、北穂高頂上直下に於て、雪谿滑降中、S滑落し、ガレに猛突して四肢、腰に輕傷を負ひたると、八月十四日、劍岳三窓より雪谿上をN轉落し、頭部、四肢に負傷し、暫く意識を失ひたると、八月二十三日、横尾谷の磧にてK轉倒し、ピッケルにて大腿外部に刺傷を受けたるとなり。但し、何れの場合も措置宜しきを得、新聞記者に乘ぜしめざりしは不幸中の幸にして、吾人は、一日も早く日本の山行が斯かる厳禍に對する警戒を要せざるに到らむことを期す。同時に、かゝる遭難に直面せる時當事者諸氏が今少しく事件の俗間に對する隱蔽に注意せられむことを望む。山岳界の内輪に於て論ぜらるべき問題は、夫れ夫れ權威ある山岳雜誌（「山岳」には必ず當事者より一報すべきものと思惟す）のみに登載すべきものにして、俗間新聞紙又は俗間雜誌等に掲載さるゝ時は事の眞相を誤らるゝこと多く、不當なる批判を招き易く、其迷惑實に其少數當事者のみに駐らず。

所感（二）事故の際は、不要の失費少からず、且、人夫賃等に不當の要求を受くることあり。又、當事者も、不當に心付けを與へんとする傾向あり。他の人々に迷惑をかけること少からず。日本山岳會は、宜しく斯かる場合の會計計算法に一定の標準を與へられたし。日本全國共通のものが難しくば、地方毎に別のものにても可ならん。

所感（三）　上高地に於ける醜惡なる建築物、籠川道の不快な

る茶店の如きは、日本山岳會に於て營林局と豫め連絡して、建設せしめざるに如かず。又、山小屋の建築に資すべき類例集など編輯の意向なきや。日本の現存各小屋の圖集（スウイス山岳會の如きもの）は、今から編輯に着手の要なきや。

所感（四）　今回立山にてポーターとして雇傭せし人夫は、全然山に登れる男に非ざりき。かゝる例を聞くこと亦少からず。案内人組合は、順番制によつて人夫を出すも、彼等に信頼して委すことは至難なり。素人達は彼等のために目的を變更せしめられる等、その迷惑言語に絶するものあり。日本山岳會舊幹事等はかゝる下情に暗かりし憾少からず。之に對する權威ある方策を望む。――試驗制、階級制の如きも實現の可能性多きやう考案し得ることを信ず。

所感（五）　日本山岳會の在來行ふべくして行はざりし所は斯くの如く餘りにも多きに驚かさる。更生の意氣燃ゆる新幹事諸氏に俟つこと切。尙かゝる仕事の一部は、地方制（セクション制）の設定によつて或地方に責任を持たせることも御一考に値すべし。例へば、上記の少例中に於ても、山小屋の設計集、山に於ける建築物の地方的な制限、適當なる（地方に適合せる）公報機關の設置等之なり。

雜報

○各學校山岳部消息

日本山岳會は、其創立當時に於て、登山氣風の勃興と登山の宣傳とに全力を盡すと共に、登山案内者に就ても少なからず注意を拂ひ、各地方に於ける良案内者の紹介に努めた。そして漸く登山者の增加するに連れて必然的に起つて來る案内者に關する種々の問題に對して豫め考慮し、案内者は必ず山に經驗ある者たること、人夫は質朴强健なるものたること、人夫にして經驗を積み適當と認めらるゝに至れば案内者の資格を與ふること等、當事者と協力して案内者人夫の養成に相當骨を折つたのであつた。一時はスウイスの案内者のやうに手帳を持たせやうと發議した程であるが、さうなると手帳を持たせるやうな案内者は僅に數人のみとなるので、それは事情が許さないので實現されるに至らなかつたのである。然るに其後登山者は激增し、案内者は不足を告ぐるに至つた爲に、情ない哉賃銀を餘分に拂つて先約ある案内者を横取りするといふ不德義な登山者が續出する有樣となつた。そして又一方には順番の來るのが待ち切れないで、誰でもいゝからと全くかけ出しの素人である案内人夫を連れて行く登山者も絶無ではなかつた。これが慣習となつて後には手不足の時には平氣でかけ出しの人足を割り當てるやうになつたのである。最初は日本山岳會の力を借りて漸く其存在を認められ、其紹介を通じて雇はれてゐた案内者人夫も、雇主が

向ふからどし〳〵押し懸けて來て見れば、最早日本山岳會などの手を借りるには及ばないことだ制裁のない約束などは平氣で無視することの行はれてゐる世の中に、平地の陋習が山地にまで入り込むことを極度に憂へてゐた日本山岳會は、徒手空拳で之と戰つて敗れたのである。要するに案内人夫の素質を低下（個人的にも一般的にも）せしむるに至つた最大の原因は登山者に存するのである。日本山岳會の舊幹事等がかゝる下情に暗かりし憾少なからずとの非難は、まるで日本山岳會の舊幹事は、故大倉喜八郎氏のやうに駕籠にでも乘つて山の上に擔ぎ上げられてでもゐるものゝやうに思はれてか、それとも全然山に登ることをしない人間と思はれての事か、孰れかを知らぬが、舊幹事といへども皆自分で相當の荷を背負つて山に登つてゐるものであることを承知して頂きたい。

日本山岳會の行ふ可くして行はなかつた事は、それはあつたにしても、決して登山界に弊害の種を蒔きもしなければ、又之を助長したることもない。今にして其總勘定の尻ぬぐひの役目を演じなければならぬとは、ちと迷惑の感がないでもないが、さりとて之を引受けることを躊躇するものではない。然しそれには登山者の方で日本山岳會を守り立てるやうにして行かなければ、適當な効果を擧げることは難事であるのみならず、經濟上からして許されないことである。今まで口にし筆にされた多くの批判は、日本山岳會が世に時めく何々會のやうにあり餘る資金を抱いて、徒に袖手してゐるものと見做しての言葉で、其言ふことや骨を刺す痛快味はあつても、遺憾ながら畢竟一の文章たるに過ぎないであらう。若し登山團體が經濟上の危險に暴露さるゝことなしに日本山岳會をして、その爲さしめんと欲する所を爲し能ふやうにせんとならば、たとへば日本山岳會の證明なきものは、ロープなりピッケルなり賣らせぬといふよりも買はぬやうにする。案内者組合なども、日本山岳會の關知しないものは、其組合から雇はぬやうにする。斯うして日本山岳會が次第に日本の山岳界に權威あるものとなつて、それで行ふ可きことを行はぬといふならば、叩き潰されても蹂躙されても、一言もない譯である。日本山岳會を責むるに吝ならざる大方の諸賢は、之を守り立て發展せしむるにも吝ならざることを信じてよいと思ふ。長袖者の亞流と誤らるゝのは心外であるから舊幹事を代表して一言辯じ置く次第である。（木暮）

越後山岳會設立

越後の秋も更けました。霰が飛んで冷雨が續き、十九日（十月）午後からは低い灰色の雲間を漏れて東の一角を照らした陽に、初雪が訪れて白銀と輝く飯豐連峰や、紅葉に燒け爛れた二

王子岳が浮び出ました。八月下旬、越後山岳會は、小林文平氏安藤正一氏(日本山岳會員)星野二郎吉氏、中村文次郎氏の盡力によつて設立致しました。

會則にもある樣に、先づ越後の山を、と極めて地味な集りで會員數も三十名に滿たず、まだ〳〵會の事業とて、會員の動きにも見る可き事は有りませんが、新潟市を中心に、各町村からも、本當に熱心な動的な人々のみなのです。越後人の確實な歩みを續け、山への努力を信じてゐます。

現幹事は中村文次郎、星野二郎吉、豐島延、笠原藤七、藤島源太郎の五名であります。其だ簡單ではありますが御報告致します。

昭和四年十月　　藤島源太郎

越後山岳會會則（抜萃）

第一條　本會ハ越後山岳會ト稱シ事務所ヲ新潟市西堀通リ三番町中村文次郎方ニ置ク

第二條　本會ハ山岳愛好者ノ集結ニシテ自然ヲ介シテ會員相互ノ親睦ヲ計リ主トシテ越後ノ山岳登攀研究ニ努ムルヲ目的トス

第三條　本會ハ前項ノ趣旨ニ基キ左ノ事業ヲ行フ

イ　山岳ニ關スル研究調査及計畫ノ發表並ニ指導

ロ　機關雜誌ノ發行

ハ　展覽會講演會ノ開催

ニ　本會發行ノ出版物、山岳寫眞ヲ實費又ハ無償ニテ會員ニ頒布スルコト

ホ　天幕其他用具ヲ設備シ會員ニ貸與スルコト

第四條　本會ノ會員ヲ別チテ正會員ト名譽會員トス

第五條　本會ニ幹事若干名、會計幹事貳名ヲ置キテ會務ヲ處理セシム

幹事ハ正會員中ヨリ選擧シ任期一ケ年トス但シ再選ヲ妨ゲズ

第六條　會員タラントスルニハ正會員貳名ノ紹介ヲ要シ幹事會ニ於テ諾否を決定ス

入會許可ノ通知アリタルトキハ入會費金壹圓ニ會費ヲ添ヘテ納付スベシ

第七條　會員ハ會費トシテ年額金參圓ヲ毎年三月末迄ニ納付スルモノトス(以下六條略)

○山岳圖書紹介

HIMALAYAN JOURNAL. Vol. 1. No. 1. April 1929.

本誌は本年創立せられし、印度のヒマラヤン、クラブの機關雜誌として、初めて發行せられしものなり。體裁、內容等はア

ルパイン、ジアナールに範を採り、一見甚だ落着きある感を與ふ。表紙が薄鼠色なると、寫眞及び印刷がずつと落ちる點はアルパイン、ジアーナルと異なれり。殊に寫眞は遺憾ながら吾人を滿足せしむべきものは一枚も無く甚だ物足らず。發賣所はカルカツタ及びロンドンの Thacker, Spink & Co. にて年一回四月發行、一部の實價八志なり。本號は約百五十頁にして二十の題目を掲げたり。其の主要なるものを次きに擧ぐべし。

一、The Shyok Dam in 1928. (F. Ludlow)

インダス川の一支流、シオツク川の上流、リモ氷河の下手に當りて、右岸に注ぐチョングカムダン氷河が、川中にのり出し、遂に完全に流れを塞閉して、左岸に達し、宛然氷河が堰堤を形造りその上手に湖水を作れり。筆者は一九二八年夏、その狀況を親しく視察して、その結果を記載せり。

二、Indus Floods and Shyok Glaciers. (Kenneth Mason)

前記のシオツク川上流の氷河に依る堰堤と、インダス川氾濫との關係に就きて、詳細なる研究を遂げし一大論文なり。同氏は一七八〇年以來の十六回の大洪水に就きて、其の狀況を精細に記載しその氾濫の原因に就きて一々考察を廻らし、此の中何れと何れがシオツク川に於ける、氷河に依りて築かれし堰堤が崩壞せし爲に起りしものたりしかを極めて明快に論じ、次いで一七八〇年以來、今日に至るまでのシオツク川の氷河（堰堤を築くべき三氷河）の狀況に就きて記載し、何年の氾濫はどの氷河に依りしものなるやを一々對照研究したり。

三、Some Aspects of Bird-Life in Kashmir. (Hugh Whistler)

ラインズ氏のカシミヤ鳥學探檢（一九二八年）に主として活躍せるホイッスラー氏の記事にして、カシミヤの動物學的、地理學的地位カシミヤ山地に棲息する鳥類の二項目の許に述べられたり。

四、Botanical Exploration in the Mishmi Hills (F. Kingdon Ward)

イラワジ川上流に近きミシミ地方の狀況を說明し、次いでその植物景觀に就きて略記せり。

五、The Attraction of the Himalaya. (Dr. J. de Graaff Hunter)

ヒマラヤが地球の重力上に及ぼせる影響に就きて力學上の諸問題を論じその今日に至るまでの發展の經過を說明せり。

六、The Way to the Basin (D. G. P. M. Shewen)

ストレヂ河の一支流バスバ地方は夏期政廳所在地たるシムラに近く、著者の言に依れば、同地方は恐らくは、ツエルマツトの

如く登山中心地となるべしと言ふ。

此等の記事に續きて、ヒマラヤに於ける最近の探檢隊の動靜に就きての情報あり。之は雜報欄に詳記したり。尙圖書紹介欄には新刊十數種を揭げ約二十頁の紙面を費やして懇切なる說明を加へたるは注目をひくに足る。(渡邊)

ALPINE JOURNAL Vol. XLI No. 228, May. 1929.

主要記事は左の如し。

1. Valedictory Address (G. H. Morse)
2. Eight Days in the Japanese Alps. (H. I. H. The Prince Chichibu)
3. Concerning Mountains; Die Engellhörner. (late Miss Gertrude Bell)
4. The First Direct Ascent of Mont Blanc de Courmayeur from the Brenva Glacier and Other Climbs. (T. G. Brown)
5. Six Years and the Four-Thousanders. (E. Thomas)
6. The Spare Rope in Theory and Practice. (E. R. Blanchet)
7. The N. W. Face of the Strahlhorn in the Julian Alps. (Sinzko Tominsek)
8. Some Physical Character of Snow Avalanches (F. S. Smythe)
9. Dr. Pacard's "Lost Narrative" An Attempted Reconstruction (E. H. Stevens)
10. On the Fringe of the Pamirs (Rickmer Rickmers)
11. "Mystery Mountain" : Mt. Waddington. (W. A. Don Munday)
12. Note : A Bavarian (1928) Expedition to the Caucasus.

1 は昨年十二月を以て任期三年を終へ、會長の職を去れるサー・ジョージ・モースの吉例に依る告別の辭で、在職中の內外登山界の主要なる出來事を述べたり。

2 は秩父宮殿下の一昨年夏季に於ける北アルプス登山御旅行の御紀行にして、アルパイン、クラブ名譽會員にあらせらるゝ殿下の御文章を同誌の主要記事として拜讀なし得たるは獨り吾々の光榮のみならんや。英語への飜譯はウエストン及び浦松の兩氏に依れり。

3 は女流登山者の第一人者たりし、故ガートルード、ベルの遺のエンゲルヘルナー諸峯登攀の記錄にして、一九〇一年十二月發行の "National Review" より特に轉載せられしものにして、注目に値する一文なり。

4　は昨年十一月大會の席上講演せられし一文にして、一九二七年夏モンブロンの東側ブレンバ氷河より、直接にモンブロン・ドクールマユールへの困難なる初登攀を始めとして、エギユーユ・ド・トレラテート及びコル・ド・トレラテートの登攀、ブレンバ氷河よりモンブロンへの登攀、モアン尾根よりのエギユーユ・ヴエルトの登攀、ワイスホルンの北稜より南西稜への縱走等に就きて述べたり。

5　は本年五月大會席上講演せられしものにして同氏に依つて、一九二三年より一九二八年の六シーズン中に登られし山々は四千米級のもの、八十有餘に達し其他の山々をも合すれば百十ばかりに達す。記錄として見れば實に想像も付かざる程・豐富なるものなれど、同氏の演說の後の討論に於て、總裁ウイルソン氏はレコードのレコードを作るのみが登山の全部に非らざる事、又トーマス氏の說には一致し難き點多々ある旨を述べ、來會者中にも之れに贊同したる者多かりしは注意すべし。

6　はスペーアローブの使用法に就いて挿圖四個を用ひて比較研究を試みたり。

7　はジユリアン・アルプス（伊太利と墺國との境）の秀峰スクラテイカの北西面の一九二七年に於ける登攀記錄なり。

8　スキーを用ひざる從來の冬期登山者は專ら尾根を辿り、スキー登山者は專ら斜面を撰ぶ事實より出發して、雪崩がスキー登山者に取つては如何に重大なる要素なるかを說き、雪崩、殊に、ウインドスラブ或ひはシユネーブレツテルと稱するものゝ危險、更にシユタウブラウィネ（俗稱アハ）に就きて述べ、最後に三十年以前より此の方、雪の性質に著しき變化を來せるを指摘せり。

9　本號に於ける記事中最大特筆すべきものにして六〇頁の紙面と數多き挿圖と寫眞とを交へたる興味深き論文なり。此の一文のみに依りて筆者は克く山岳文獻史上に不朽の名を止むるに足るべし。一七八六年八月八日のバッカード及びバルマーのモンブロン初登攀は實に近世登山史の黎明を告げたる快擧たるは已でに周知の事實なり、されど兩人中何れがモンブロンの頂上に達したるや、又その計畫、準備、さては登路を定め、他を導きしは何人なりしや、此の問題は爾來常に論爭の中心たりしものにして、バッカードが執筆すべかりし其の著書は遂に未着手に終りたる爲、バルマーにのみ有利なる材料多くして、從來バルマー一人のみがヒーローたりし感あり。然かして隱れたる勇者バッカードの爲に辨解の勞を採りたるは先にデュビー博士ありしが筆者は更により根據ある、信憑すべき材料を涉獵し、此處に此の一文は草せられしなり。筆者は第一人稱を用ひてバッ

カード自身が述べしが如く一つの自叙傳風の物語を仕組み、且つ其の物語の語られしを一七八七年の春と假定せり。

無味乾燥なる考證の拘束に囚はれず百四十年以前の事實を、さながらに今日のそれの如くに安易に、明確に、すら〳〵と讀ましむる筆者の手腕は實に敬服すべし。

10 は一九二八年の獨露聯合、アライ、パミール探險隊の成果の大要にして、露國最高峯たるマウント・カウフマン（七一三〇米）は九月二十五日、アールワイン、ウイン、シュナイダーの三名により遂に絶頂を極められたり。

11 はカナダ西部に於ける峻峯、ミステリー・マウンテン（一三二六〇呎）の一九二八年に於ける登攀記錄なり。

12 はミュンヘン・アカデミツシエル・アルペン・フエラインの一九二八年七月より九月へ掛けてのコーカサス探險隊の行程の概要にして、チユムルチエラン・タウ（四三〇四米）の初登攀コーカサス第二高峯ドイク・タウ（五一九八米）の頂上直下四十米の地點にまでの困難なる登攀、其の他四九〇〇米級の諸峯の登攀最後にコーカサス中の雄峻として聞えたるウシユバに向つて登攀を試みしも、殆ど四晝夜間斷なく繼續したる風雪に惱まされ、遂に退却の餘儀なきに至れり。終始惡天候と戰ひつゝ赫々たる成果を得たるは驚嘆に値せり。

○會員通信

チャチャヌプリ、大雪山

昭和四年八月　岡田喜一

△數年來の懸案の一であつたチャチャヌプリ登山を愈々今夏決行して見やうと思ひます。本月十五日出發の豫定。山頂の環狀湖は air boat を考案してそれで一氣に乘切つてしまはふと思つてゐます三人乘で目方が一貫目內外のつもり（九日出來）ゾロ〳〵出て來ると云ふ羅だけはどうにも防ぎ樣もなさゝうです、念の爲銃は持つて行きますが寧ろ使用しない方がよいと思ひます活動寫眞器も小さいのを一つ持つて行きます、歸りがけにラウス岳も登つて來る積りです（七月七日付）

愈々此處迄出懸けました、兩三日滯在してから島へ參る積り。一行は小生の外長谷川傳次郎氏と瀨川孝吉氏。札幌の日中の暑さも亦東京に劣らぬきびしさです（札幌にて七月十八日付）

とう〳〵チャチャヌプリの絶頂をきはめました。神祕的な壯大な山です。小生等一行のゆく十日ばかり前に東京の人で試みた方があり、續いて北大の人二人でやりましたが生憎途中から引き返されなければならなくなつたさうで、是非とも山岳會の爲に頑張らなければならぬと馬力を懸けました〔九月二十九日第四十三回小集會に於て同氏の詳細なる講演あり〕〔八月七日付千島乳呑路にて〕

△國後島の旅の歸途一寸大雪山に立ち寄ります。今日これから登る積り。この層雲溪も先年參つた時より急劇な發達振りに驚きました。旭川から毎日自動車でどん〳〵やつて來てゐます。建物も洋風の三階建で明年あたりは山頂へケーブルカーを架けるさうです。

（八月十一日大雪山層雲溪にて）

鹽見岳（鹿鹽より）、中俣谷、小西俣谷、惡澤岳、赤石岳、遠山川

昭和四年　　角田吉夫

△前略、小生去る八月六日出發、鹿鹽より鹽見、中俣谷、小西俣谷、惡澤岳、赤石、聖と珍らしい晴天つゞきにめぐまれて愉快な旅をつゞけ、遠山川を下り、今日は北又澤渡を立つて久しぶりの雨の中を上町へ參りました。明日は小川路峠より南アルプスの大觀に接したいと思つております。今日は丁度盂蘭盆の事とて上町は盆踊遠山甚句ににぎあふ事と期待しておりましたのに生憎の雨天、折角の盆踊も殘念ながら見る事も出來ません。

聖岳以南、遠山川の道の不完全なのには案外でした登山者の數も僅少の故もありませう。（八月十五日付秋葉街道上町にて）

大日岳、飯豐山、（センダク澤より）、ノコギリメ寶珠山尾根

昭和四年八月　　藤島源太郎

△前略、此度の飯豐、大日の山旅は珍らしき天氣に惠れ、飯豐本山を初めて見參致しました。【第二十年三號木欄、飯豐山（沼井鐵太郎）參照—編者註】一行は新潟商業五年生、登山は彌彦山と磐梯山以外初めてと云

ふ面々です。七月二十九日、赤谷驛より、**湯ノ平溫泉**幕營（今年は種々の事情あり閉湯、途中飯豐澤で二十八日に先發せる一行に追付き五名となる）三十日、湯ノ平溫泉より**不動ノ瀑**をみてセンダク澤に至り、殘雪の谷を埋めしを渡つて左岸センダク澤の泊場で幕營、貧弱ながらラヂオを樂しみました。三十一日、鳥居坂で熊公の陣竹の筍を食つてるのを見たりして、大日岳往復、飯豐山三角點手前の舊道に取付いて、三角點の峰より頂上の小屋中に幕營、頂上は一日お山開きと聞いて行きましたが、五日頃開くらしいです。八月一日、ノコギリメ寶珠山尾根より**玉川**下り、地圖通り大又澤を渡つて玉川を渡る面倒は無くなり、合流點の約一町溯り檜山澤に線橋が懸つて大變樂になりました。カイラギ澤にも懸つてあります。**小玉川溫泉**泊、まだ早くて樂しみにしてゐた食物がなく山フキ一點張に閉口でした。二日大里峠から鷹ノ巣溫泉へ出て自動車にて五里坂町驛より新潟へ歸りました。此間の乘車賃共總費用二圓十三錢と云ふ安價なものでした（八月二十四日付）

那須岳、大峠、甲子峠

昭和四年十月　　武田久吉

東京營林局と大田原營林署の人達と那須の植物調査中の處、とかく雨や霧多くして豫定の通り進捗せず、殊に寫眞日和に惠まれずして、如何なフイルターも濃霧には威力なく遺憾千萬に候、それでもとに角**茶臼**、**南月山**、**旭岳**、**隱居岳**、**熊見曾根**、**三本槍岳**に攀ぢ、**姥ケ平**や**大峠**方面をも探つて意外な珍品を發見致し、又植生に關する興味深き事實を檢し候上、一昨日を以て一と先づ完了。昨日は三斗小屋溫泉を出發、大峠を越え、野際新田を經て名倉澤に出で、更に**甲子峠**を越えて七里の山路を一氣に當甲子溫泉迄辿りつき候。此處に福島營林署長初め署員の人々に迎へられて、本日より阿武隈源流の植物を探る豫定の處、生憎朝來細雨霏々たる有樣に閉口致し候、然し紅葉は丁度見頃にて、殊に此の附近は往古は不知、近來は全く斧を入れざる美林に候へば巨幹細莖枝を交へ、黄に紅に色着けるもの尙綠のまゝなるありて、その美觀は小規模乍ら尾瀨を凌

駕す可きかとさへ思はれ候。不便を以て鳴る當地も一兩年前よりは一里半下迄自動車も通ひ交通の便を增し候も途中砲兵の實彈演習中は危險多き由に候。快晴を待ちて赤崩岳の嶺を極め候上は湯本の方面に參り二タ股溫泉の谷を探り候上、湯野上溫泉に一浴を試み、若松に出づる心算に候。それから磐梯沼尻吾妻迄脚を伸す豫定は致し居り候へ共果して實行可能なるや否や疑はしく候。(昭和四年十月十日甲子溫泉にて)

後立山山脈中地形圖の誤りに就きて

小池文雄

△今春四月三日唐松、五龍岳にスキー登山と、今夏七月後立山山脈旅行の際、地圖上の誤りと思はれし個所有之候哉に被存候。

一、**還見山より五輪岳主脈に取付く地點**は地形圖に記されたる支脈分岐點より尙、二百米北方、二五六〇米の小突起たるを眞正と存じ、又該小突起の東南側には直徑四百米の標式的大カールが存在し、杓子岳のカールに次ぐ壯大なるものに御座候。

一、**爺岳　種池**の位置は地形圖に記載せられし位置より約四百米東北東に位し、棒小屋澤に派出せる尾根の分岐點二四五〇米の小隆起點に有之候、地形圖に記載されし最低鞍部の二三八〇米の所は誤記と存被申候。

(十一月六日付)

仙丈岳平衛門谷

昭和四年八月　川崎吉藏

△七月十五日飯田町發の終列車にて出發、翌朝韮崎下車、姥石より靑木湯を經て鳳凰山に到り、早川尾根を縱走して仙水峠より北澤小屋に到着、同所にて四日間の小屋生活をしました。その第二日目に仙丈岳に登り、東北のカールに下り、同所の石室にて中食後、小仙丈と馬の背との中間の平衛門谷(平賀君の說にて、伊那方面にては藪澤と申します)を下りました。小屋を出てしばらく美麗な御花畑が續き、やがて十丁餘の雪渓になりました。此の雪渓は雪の少ない此の地方には寧ろ珍らしいものでした。雪渓を過ぎると一寸とした廊下狀の地形となり、其處をへづって尙も降ると地形圖

上に岩の記號のある仙丈瀧の直上に出ました、此の瀧は二段となつて居まして戸臺にては大タルと申して居り北澤峠の登りにて望見出來ます。瀧より密林を潜つて北澤峠よりの登路にはひ登りました。小屋より瀧上迄二時間、瀧上より尾根上迄一時間でした。(八月二十三日付)

黒部川下廊下(歩道完成、最初の通過)

昭和四年十月　　別宮貞俊

△八月に黒部へ行くことが出來なかつたので、秋には何とか都合したいと思ひ、岩永君を無理に誘ひ出して紅葉見物に宇奈月から這入ることにした。歩道の連絡については確かな通知に接しなかつたが、十月十七日の夜行で出發した。十八日朝宇奈月着、日電の事務所でも多分今日位は連絡が出來るだらうと云ふ返事で、上流から下流へ來た人は皆高廻りをして居るのであつた。

會社の西川義男氏と同行し十八日樺平泊り、十九日は晴天舊來の道をオリヲ谷まで行き、石小屋の坂を登つて水平道路に達す、山を觀賞するには低過ぎるが谷の模樣を見るには絶好の道である。アゾハラ谷の瀧の中腹を釣橋で過ぎ、仙人谷邊から紅葉は實に美しくなつた。東谷から棒小屋の小屋場の下手までは**棧道の連續で**ある。奥仙人澤(日電では半月谷と稱す)を長さ二十七間の釣橋で渡る。午後五時半に十字峽の日電テント着。テントは劒澤の右岸に數箇張られてある。

二十日朝少雨、上流へ向ふことにする。十字峽までは昭和三年九月に開通したのだが、これより上流、新越澤までは昨十九日兎に角辛じて通じたと云ふことを聞き雀躍した。九時半頃十字峽を發し、下のタル澤までは道が出來て了へば險難とは云へない。しかし**下のタル澤より上流は眞に廊下で**、それからは岩にボルトを打つて作つた橋の連續である。左岸より大きな空澤が合流し、その上手は盛に道路工事中で、命綱に頼つて黒部別山澤に出た。それより籠渡しで黒部本流の右岸に渡り河原で食事、しばらく右岸を進み冠氏一行の徒渉點より少しく上手で再び籠渡しで左岸大ヘツリの中部

の歩道へ出て、會社當事者以外で此の道路の最初の通過者となつた。あとは變つたこともなく、御山澤の日電小屋へ午後六時過ぎ到着。

二十一日は雪が降つたため御山澤溯行の計畫を捨てゝ平の小屋へ行き、吹雪の中を强行してザラ峠を越し(峠の上では積雪約一尺五寸)立山溫泉に午後六時頃着翌二十二日鬼ケ城までは紅葉を賞しつゝ歩き、それより軌道で人里へ出て、その夜の夜行列車で歸京した。(十一月十六日付)

烏帽子岳、鷲羽岳、双六谷、上高地

昭和四年十月　冠　松次郎

△秋の山旅を試みました。十月十七日の夜行で飯田町を發つて十八日には高瀨入濁の小屋泊、十九日烏帽子岳に上り、烏帽子の小屋泊、雪にその夜降られました。翌日列風飛雪の中を三ツ岳、野口五郎岳を經て三俣蓮華の小屋着、二十日夜より吹雪になり二十一日は晝夜吹雪にて小屋の中まで雪は積り表にては約一尺の積雪となりました。豫定では赤牛から上廊下の方へ澤を下ることにしてゐましたが、何分積雪が深く澤筋には二三尺の深さとなり、これは冒險だと思ひ第二豫定の双六谷へと逃れました。二十二日は日本晴、雪山麗はしき日和となつたので蓮華小屋から鷲羽へ上り展望と撮影とを恣にし双六池の小屋に泊りそれから双六谷を下りました。上部は積雪一尺乃至二尺で可なり下の下拔戸附近まで雪は歩道を埋めて非常に困難しました。二十五日漸く見座へ出て二十六日平湯を經て上高地に來ました。双六谷は金木戸から廣河原附近までの紅葉は實に見事でした。(上高地、二十六日)

會報

○第四十四回小集會記事

昭和四年十一月十八日午後六時半より、赤坂區溜池三會堂に於いて別宮幹事司會第四十四回小集會を開き、左記講演及び映畫映寫を行ひたり。

一、積雪期の朝日岳より祝瓶山　幹事　岩永信雄氏

一、黑部川櫸平より平の小屋　幹事　別宮貞俊氏

一、黑部の秋（十六粍映畫）　幹事　別宮貞俊氏

幹事　岩永信雄氏

講演に先ち別宮幹事より山岳の紙質、寫眞の改善及び近々從來發行の遲延せるを取り返す旨報告し、尙會費未納に關し會員の注意を促したり。

最初の岩永氏の講演は同氏が昭和三年四月二十五日に鮎貝驛を出發して、三十一日に長野驛に歸るまで、朝日岳附近を跋涉した談である。先づ鮎貝、日蔭より頭殿山を越えて朝日鑛泉に泊り、翌二十六日は鑛泉より鳥谷原山に登り、それより山稜を傳ひて小朝日に至り、好天氣に惠まれて大に眺望を享樂して、鳥谷原の神社に泊る。翌日は天候面白くなきため、神社に滯在し、二十八日はまた好天氣を利用し、午前五時半鳥谷原神社を出發して、小朝日を經て九時大朝日岳着、それより西朝日岳に行き、此の邊の斜面がスキーに極めて適當なるを見て、往路を戻り、鳥谷原神社より荷物を纏めて、朝日鑛泉に歸る。二十九日天候思はしくなく、幸熊狩りがあつたので、上倉山の下へ參觀に行つたが、獲物はなかつた。三十日には午前六時に鑛泉を出發し、上倉山の傍より御影森山に至り、それより尾根を通つて、平岩山に至り、大玉山より祝瓶山に行つた。夏は猛烈なヤブがあるが、積雪のためヤブは埋り、

割合に行程が渉つた。それより少し引き返して野川の谷に下り、人夫に背負はれて徒渉をするとき、人夫がすべり、背上の岩永氏も頸まで水につき、流石谷好きの岩永氏も膽を冷した相で、聽衆も手に汗した。午後七時四十五分木地山に到着したが、此の日は殆ど休憩らしい休憩もせず、非常に强行した。

翌三十一日は木地山より桂谷、明神峠を經て里に出たが、里では櫻が滿開で、やがて雨になつたが無事長井驛に着き夜行列車で歸京した。此行時にスキーを用ゐ、時に金カンジキを用ゐた。多くの美しい寫眞について說明せられた。

次ぎの別宮氏の講演は同氏が岩永氏と本年十月十八日より宇奈月を出發して、日本電力會社で作つた川通しの步道を通つて平の小屋へ出た談である。十八日は櫟平へ泊り、十九日はオリヲ谷までは在來の道を行き、それより急坂(石小屋の坂)を登つて、海拔約八五〇米の水平道路へ出た。

紅葉は追々に佳くなり、アゾハラ谷の瀧の中腹を釣橋で通過し、仙人谷を過ぎて東谷を見下す所に來る。それより道は非常に險惡な岩壁を過ぎる棧道となり、對岸(右岸)には作郎越の步道が樹間に隱見する。黑部本流は凄い廊下となつて遙か下を奔下して居て、實に絕景であることを稱し、奥仙人澤(日電稱呼半月谷)を長さ二十七間の釣橋で渡つて了ふと漸次地勢が柔和になり、棒小屋小屋場附近では全く普通の山道となつた。そして午後五時半に十字峽の劍澤右岸にある日電のテントに到着した。そこで川通しの連絡が本日ついたことを知つて一同雀躍した。翌二十日は朝の內小雨であつたが、模樣がよいので出發ときめて九時半頃出發した。步道を步けば往年苦闘した跡は夢の樣である。下のタル澤より上手は最も險惡なる廊下で、道は皆岩壁にボルトを打ち、それを針金で吊つたのに丸太を三本程架けた橋の連續である。黑部別山澤上手で籠渡しで本流の右岸に移り、再び籠渡しで左岸の大ヘツリの中途に移り、あとは新越澤、內藏助澤を經て御山澤の日電小屋に午後六時に到着した。翌二十一日は雪とな

つたので平の小屋に至り、ザラ峠では風雪と戰ひ、午後六時立山溫泉に到着した。翌二十二日は鬼ケ城の上手まで歩き、あとは軌道に依つて、途中の新雪と紅葉を賞しつゝ、千垣に出た。續いて十六粍の映畫で、上記講演にあつた絶景を一々紹介し、殊に廊下に於ける奔流は、何度見ても飽きることのないもので、午後十時散會した。

當日の參會者次ぎの如し。別宮貞俊、飯田末喜、西田誠一、野崎安彦、酒井忠一、中村直男、長谷川長次郎、山田多市、木村久太郎、高畑棟材、菊地孝、柳澤悟、額田敏、山下助次郎、原田保之助、吉田喜久治、宮木體夫、寺島克次郎、交野武一、鳥山悌成、田中菅雄、岩永信雄、渡邊漸、黑田孝雄、角田吉夫、笈川一鈴木勇、大熊保夫、山本六三郎、吉田竹志、伊藤新三曾原喜久藏、本多友司、大賀智、鹿野忠雄、神谷恭、伊藤一郎、磯貝藤太郎、飯塚篤之助、茨木猪之吉、山口成一、中澤眞二の諸氏計四十二名外に會員外傍聽者が二十六名あつた。

○會務報告

昭和四年十一月十四日午後六時三十分より、事務所に於いて、幹事會を開き、左記諸件につき協議せり。

一、會費徵集に關する件

一、山岳第二十四年第三號の原稿を決定す。

一、山岳の發行月を大正九年以前の慣習の通り三月、六月十一月とす。

一、圖書室に關する件。

一、小集會の度數を增して、二、四、六、九、十一の各月に開くことゝし、來年より少額の會費を參會者より徵することゝす。

一、小島久太氏を常任評議員に推薦す。

出席幹事　別宮、藤島、岩永、冠、木暮、松方、田中、鳥山

評議員　武田

○交換及寄贈圖書目

ツーリスト	第十七年第九、十號	ジャパン・ツーリスト・ビューロー
歩跡	第三年第九號	テクリ會
管見錄	第五年七、八、九號	大阪管見社
旅行	第四十二、四十三、四十四號	東京旅行クラブ
アルカウ趣味	第十六年十、十一、十二號	日本アルカウ會
旅	第九年十一、十二月號	東京カルカウ會
山水巡禮	第六年七、八、九、十、十一月號	リュックサック倶樂部
會報	第四年九、十一號	昭和マウント倶樂部
ペデスツリヤン	第百十二、百十三、百十四號	神戸徒歩會
山嶺	第八年八、九、十、十一號	東京野歩路會
雪嶺	十一月號	東京スキー山岳會
會報	第六年第五號	關東山岳會
旅	第六卷十、十一、十二號	日本旅行協會
山とスキー	第九十五號	山とスキーの會
アミーバ	第一卷第二號	生き物趣味の會
會報	第一卷第一號	日本生物地理學會
施	IX	桐陰會山岳部
山岳資料	第七輯	關東山岳會
中蒲原郡山岳誌		笠原鐵太郎氏
日米大學學窓(英文)	第一卷第一號	コロンビヤ大學日本人學友協會

La Montagne, 3e Série. N° 4.

Revue Alpine, Vol. 30 No. 2.

Rivista del Club Alpino Italiano, Vol. XLVIII Num. 7—8.

Butletti Excursionista de Catalunya, Any XXX IX Num. 408, 409, 410, 411, 412.

The Mountaineer, Vol XXI No. 10. 11.

Bulletin du Club Alpin Belge. 2e Série. Tom. VI, N° 16.

The Geographical Journal, Vol. LXXIV No. 2, 3, 4.

The Canadian Alpine Journal, Vol. XVII 1928.
Annual Report of the Department of Tourist and Health Resorts. 1929.
Trail and Timberline, No. 130, 131, 132.
Bulletin (The Prairie Club) No. 183, 189.
Sierra Club Bulletin, Vol. XIV No. 4.
Bulletin (Appalachian Mountain Club) Vol. XX III. No. 1.
Die Alpen les Alpes, V—N° 8. 9. 10.
Tatry（山の寫眞帖）　ポーランド公使館寄贈
Natural History, Vol XXIX. No. 4, 5.

尚號正誤

頁	行	誤	正
一四	九	醫油	醫油
七一	十三	東修道	東信道
九四	四	特長	特徴

昭和四年十二月二十八日印刷
昭和四年十二月三十一日發行

【定價金壹圓五拾錢】

編輯兼發行者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

發行者　東京市芝區高輪南町三十番地　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

印刷者　東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地　益枝寅三郎

印刷所　東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地　文雅堂印刷所

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

著作權所有

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXIV 1929 No. 3